
終わりの月の満ちる夜

双色

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終わりの月の満ちる夜

【Nコード】

N1125K

【作者名】

双色

【あらすじ】

二つの月の物語。始まりの月と終わりの月。震災による街の崩壊から七年。とある復讐の幕はひっそりと誰に知られることもなく上がっていた。速さに取り憑かれた慇懃無礼な後輩。文武両道の二重人格な少女。互いが互いを許容し合う白と黒の兄妹。邂逅の果ての月と、終焉の彼方の月。ある日の夜、気紛れに脚を運んだ災害跡地で見つけた猟奇死体。鮮血に彩られた終わりの囿い、その中で――
――僕は、彼女に出逢った。

／プロローグ

／ 0

*

「例えば生まれてから一度も不幸を体験したことのない人間がいたとして、その誰かの人生は幸せだったと言えるのかな？」

それは僕を指していつているようにも、あるいは天門坂自身を指して言っているようにも聞こえる質問だった。

絶望のない人生。

ただの一度の挫折も悲嘆もない人生。

生涯が幸福だったかどうかを判断するのは他人ではなく、やはり当事者であると思う。その誰かが己の一生を幸せだと思うのなら、それはそうなのだろう。主観的にその彼、あるいは彼女が幸せだったのならそれで人生は幸福。他人は口を出す権利なんて持っていない。

存在の価値を定めるのは他人でも、存在の意味を決めるのは自分なのだから。

「違うよ。その誰かは、自分で自分の意味を定めることなんて出来ない。だって絶望を知らないということは、つまり希望も知らないということだから。人間は比べることでは価値を見出せない生き物なの。悲しみを知っているから、喜びを知っている。痛みを知っているから、憐れみを知っている。生を知っているから、死を恐れる。だとしたら、一生の全てがどちらかに偏ってしまった人間は、

善悪の判断も、喜びと悲しみの分別だって出来ない。そうでしょう？」

天門坂は言った。遠くの星に僅かな憂いの表情を垣間見せるようにして。

人の世界は全てが比較。

どれだけ優れた存在があつたとしても、それを比較する対象がなければ価値をはかることなんて出来ない。もしも今天才と呼ばれている誰かの頭脳を世界中の全人類が持ったとしたら、天才なんて概念はそもそも存在しなくなる。

生まれてから一度も不幸のなかった人間は、最後まで自らが体験してきた幸福の価値を見出せない。

果たしてそんな人生は、幸福と言えるのだろうか。天門坂の質問は、どうやらそういう意味だったらしい。

人生に意味を求めるのは不毛だ。僕らは生まれた瞬間から生きることを義務付けられてる。だけどそれでも、最後には意味を定めなければならぬ。つまりとて僕らの一生は、死の瞬間に価値を与えるための考察期間でしかないのだ。

ならば考察期間の間に何の情報も得ることの出来なかった人間は、人生に意味を与えられないということになる。その人物が生きてきた時間は全て無意味に葬られる。後は、残った他人が勝手な価値を押し付けるだけ。

だったらそれは。

幸福ではなく、不幸なのではないだろうか。

「だからね、不幸を知っていることは実は幸せなことなのよ。……というよりも、幸せになる為の条件が不幸を知っていることなのかなんかにしろ、感情なんて反面だけでは意味を持たない。在って無いような概念だつてこと」

星に訴えるような呟き。押し殺した無感情。

天蓋に見える星の数が急激に増加し、闇は、世界を満たした。

「でもね、不幸を知っているからって必ずしも幸せになれるわけじ

やない」

天門坂が目を開じた。

「深すぎる絶望を知って、大きすぎる不幸を背負った人間は、自分が体験する幸福を全て飲み込まれてしまう。比較対象が大きすぎるから、自分の幸せがちっぽけなものだって分かってしまう。そうなったら、人間はどうなると思う？」

僕は答えない。答えられない。

「そうになったら、人間は幸せを幸せとして享受できなくなる。折角にした幸せも、その小ささが不幸に思えてしまつて——そんな、循環。永遠に不幸が募り続ける負の連鎖」

自分はこれだけの不幸を体験しました。

だからこんなちっぽけな幸福ではなく、もっと大きな幸福をください。

無い物強請りに拍車が掛かり、その人物にとって幸せを与えられることは不幸へと成り下がる。だけど、そんなのはただの我侭だ。当人がどう感じようとも、明らかにそれは幸福を与えられているのだから。

「この世界は——貴方にとって幸せ？」

そんなことを訊いてくる。

僕は、他ならぬ僕という個人はどうなのかと。

さてどうだろうと思案する。

不幸なら知っている。

例えば——真っ赤に燃え上がる世界。黒煙が雲となり世界を覆う夜。耳を塞いでも聞こえてくる誰かの嘆き。断末魔の悲鳴。炎上する家屋と瓦礫に埋もれた街。どこまでいっても出口のない、絶望のトンネル。終わりの無い、孤独。

僕は思い出す。

炎の中から伸びる誰かの手。

煙の中から聞こえる誰かの声。

死に損なつて迷走する一人の少年。

そして。

少年に差し伸べられた手。温もりをくれた微笑み。

果ての無い絶望の中にあつて、確かに僕はあの瞬間、同時に幸福を知った。

なら。僕は肯定を答えとして提出した。

「そつか。貴方の世界は幸福なのね」

一瞬だけ憂いの色を交えた瞳が小さく呟く。

「貴方にとっての世界は幸福。うん。そうだね。確かに貴方は恵まれている。誰もが生き延びることを諦めた地獄の中で、多くの犠牲を出してまで生き残った貴方が幸福でなければ嘘だもんね」

天門坂の言葉が止まる。

そしてほんの僅かな間を置いてから、天文坂は言った。

「はつきり言うかね——わたしは貴方のことが嫌い。嫌いだし、憎い。本当に、心の底から」

胡乱だった目付きが刃物の鋭さを以って僕を見据える。

僕はただ、そんな天門坂の視線を黙って受け止めることしか出来ない。

引き裂かれることを待つように。切り裂かれることを待つように。そうして天門坂が決定的な一言を告げる一瞬を、断頭台に立たされた囚人に似た心境で待つことしか僕には出来ない。あるいは、その義務が僕にはある。

「わたしはアンタを殺したい。殺したいほど、恨んでる」

決定的な一言が全ての終わりを告げるように。

幕を引く言葉は終焉から新たな邂逅を生んだ。

貴方を殺したい。

僕を、殺したい。

天門坂は僕を殺したい。

恨みから。憎しみから。憎悪や怨嗟の全てから。

僕は。

僕は、何も言えない。

僕を殺したいと告げた天門坂に返す言葉がない。

それでも言わなければならなかった。その義務が僕にはあるのだから。

喉の奥が乾いて上手く声が出せない。掠れる声が紡いだ一言は決定的に全ての幕を引く、終焉の言葉だった。

「——構わないよ」

君にはその権利がある。そして僕にはそうされる責任がある。

天門坂のこれまでを奪ってきた、その贖罪の責務が、僕にはある。

／プロローグ（後書き）

ファンタジーといいつつも本作は伝奇を軸にした猟奇小説です。
剣と魔法の異世界物語を想像された方には申し訳ございません。

/ ?

/ 1

有り体に言えば、ここは終わっていた。

鮮烈過ぎる真紅の飛沫。

四方を濡らす、美しいほどの赤色。

四肢を引き千切られた——否、喰い千切られた死体。
濃厚な死の臭い。

その、全てが終わった鮮血の囲いの中で、

——僕は、彼女に出遭った。

*

天門坂いちつき一月という名前のクラスメイトがいる。

性別、女。年齢、十六歳。身長、約百六十センチ。体重、不明。

血液型、不明。誕生日、不明。成績、詳細は解らないが優秀。文武両道。天才肌。何でもやってのける。

僕の知る天門坂一月という同級生はおおよそそんな感じの女子だった。補足説明。前述のステータスにおいて不明とした部分は僕の理解の及ばぬ所という意味であり、本当に判明していないという意味ではない。

高校二年生に進級した僕は彼女と同じクラスになったのだが、すごい生徒がいる、と噂に聞いていただけの一年次とほとんど既知の情報量が変わらない。『すごい生徒』、という抽象的な表現の詳細

も然り。

割れている情報だって信憑性があるわけではなかった。

身長は廊下で見かけた天門坂と自分とを比べて推測した数字だし、正確な情報といえば氏名と年齢（こっちは誕生日によりけり。もしかしたら十七歳かもしれない）、それから頭脳明晰運動能力高しということ。

加えてかなりの美人だということ。一年次はクラスが違っていてせいぜい廊下で擦れ違う程度にしか顔を合わせていなかったが——なので、向こうは僕のことなど記憶の片隅にも無いだろう——同じクラスになった今は余計に分かる。非の打ち所など無い。断言して、美少女。

教室ではいつも一人にいるようなイメージがあり事実として、いつも一人だ。

勿論それは、天門坂は人気が無い、という意味ではない。彼女ほどの容姿を持った生徒は同性にも異性にも人気が出て然るべきであり、この場合も必然的にその道理は当て嵌まる。だからといって、天門坂はクラスメイトを無視しているわけでも、高圧的に立ち回って人払いしているわけでもなかった。

声を掛けてきた相手には簡素に対応してそれだけなので、会話が続くことはない。僕が知る限り天門坂は発生した会話を大概の場合二三言で終了させているのだ。

故に僕は天文坂が人と仲良くしているシーンなど見たことがない。話しかけてきた相手は爆笑していたり感極まっていたり激怒していたりするのに、相対して天門坂は無関心無感動無感情な態度を貫き通しているのが常である。……これは極端な例だけれど。

と、概ねの情報を脳内に展開して収束。

回想モード終了。夕焼けが眩しい現実世界に意識を回帰させる。橙色の空を見上げるようにして、僕は隣で欠伸をしている遙風^{はるかぜ}に言った。

「で、その天門坂がどうかしたのか？」

「どうかしたのか、じゃないだろ。それはこつちが訊いたんだ」

「ん？ ああ、そうか。話を振ったのは僕の方だっけか」

うつかり長いこと独白してたから忘れるところだった。

話の運びは確か、僕が天門坂一月の情報提示を依頼して、それならお前は彼女についてどれほどのことを知っているんだ？ って訊かれたんだっけ。これは不覚だ。

「それじゃ改めて聞くけど、お前、何でいきなりそんなこと聞いてきたんだ？」

「うん、まあねえ。特に理由は無いんだよ、これが。実は遙風と会話がしたかっただけ、だったりしてな」

「……なにを、気持ち悪い」

いつもなら絶対にしないような、酷く悪辣な目で見られた。

……これで照れてるんだったら可愛いんだけどなあ。表情こそ強張っているけれど、世界は僕の味方をしていた。空高く昇った太陽が橙色に変わって降りていく夕方、遙風の顔は図らずとも朱色に染まる。

遙風^{リンネ}輪廻。僕の数少ない友人でありクラスメイトの一人。身長百五十八センチ。体重（訊いたら殴られた）。血液型A B。成績、いい時はめちやくちやいい。運動神経、常に抜群。容姿端麗で中性的顔立ち。黒の長髪。

今の性格、ガサツ。癖毛なんてほったらかしで、起床から手入れなんてまるでしていないらしい。制服の胸元はえらく大胆に開いているし、そんな制服の着こなしだって毎回変わる。

少し黙っていた僕を、遙風はジトつとした目で見ていた。

「なんだ、その目？」

「親愛なる友人に向ける、路上のヘンタイを見る目」

「せめて路傍の石にしてください！」

ご覧の通り、毒舌である。

くたびれた表情をしているこの遙風は、一日に三桁の欠伸をしているらしい。ちなみに自己申告。

「でもまあ、親愛なる友人なんて言って貰えて嬉しいぜ。他ならぬ遙風さんにさ」

「オレに好かれたところで何も得はしないだろ。それともお前はあれか。同性愛者なのか？」

「断じて違う！」

「だったら、そうか。オレのカラダが目的なんだな」

「断言するな、それだって断じて違う！」

「まさかお前……もしかして大事なものは心だとも言うのか？」

「もしかしくなくても、そのまさかだよ！」

今更、時系列。端的に簡潔に纏めてしまうと、遠くの空が徐々に暗くなり始めた夕暮れ時の放課後。

本日の修業課程を終了。現在は放課後にして、場所は街の外れにある災害跡地。崩壊した建物の瓦礫や辺りに散らばる硝子の破片が夕陽を浴びて橙色に輝く様子は、この街区にパンフレットがあるとした確実に表紙を飾るだろうと思うくらいに綺麗だったりする。

この光景は遙風も結構気に入っているらしいのだが、こいつがここを訪れることはそう多くない。ある条件の下、遙風の気紛れによりこのイベントフラグは立つ。ちなみに僕は多いときは週に四、五回はやってくるが、遙風の訪問は一週間振りである。

「あっそ」

遙風は興味無さ気に吐き捨てる。

「オレだっておまえと友人以上の関係にはなりたくないよ」

「親愛なる友人じゃなかったのか？」

「前言撤回。気の迷いだった」

「撤回するな！」

「ていうか、友人未満に言い直す」

「友人未満！？ それって、どんな関係だよ！？」

知人。クラスメイト。……遙風の中ではさらに下位の人間関係が発想されているかもしれない。何せ友人未満なのだから、垣根なしの限界値なしだ。無限に続く負の変域。それが遙風輪廻にとっての

僕であるらしい。

少しだけシヨックだった。

「オレ別個の意味だから気にすることはないよ」

「……そうかい、そいつは安心したよ」

遙風は長髪を鬱陶しそうに払い除ける。切ればいいのに、と思っただけどそれは無理なのだと思います。なにせ、その長髪は遙風一番のお気に入りなのだから。簡単に切れるはずもない。

「そんじゃ改めて訊くけど、なんで天文坂一月のことなんて訊いてきたんだ？」

これまでのやり取りとまるで変化のない口調で遙風が話を本題に戻してくる。

目敏いよなあ……こいつも。忘れてればいいのにさ。

「ん？ いやほら、お前一年の時は同じクラスだったんだろ？ それなら少しは天門坂のことも知ってるんじゃないかな、と思ったんだよ。そもそもこんなこと訊ける相手って、僕にしてみればお前くらいしかないし」

「だーから。だから、なんで天門坂一月のことを訊いてくるのかって言ったてんだよ。オレは別に、何で質問の対象がオレなのかなんて訊いてないんだよ」

さすがに鋭い。こつそり論旨をずらそうとした僕の試みは失敗に終わるのだった。どころか、遙風の表情はさらに陰しく変化している。状況は悪くなる一方。僕は自分で自分の首に木綿の首輪を括り付けた気分を味わった。

「いや……まあ、なんとなくだよ」

すっかりはぐらかすことに成功して、核心的な部分にはこのまま触れられずに済むと思っていたのだが。甘かった。

遙風は遙風で、遙風輪廻なのだった。僕はどうしたって遙風が遙風である以上、出し抜くことは出来ないらしい。

「なんとなく……？」

睨むようにこちらを見る。遙風は、ふん、と鼻を鳴らして、

「隠し事って言うんなら何が何でも聞き出したいけど、言いたくないことならその次第でもないよ。いいぜ、教えてやる」

やや憤り気味に全てを不問に伏してくれた。

「て言っても、オレじゃ上手く説明できないから、また今度にしてくれ」

「……そうかい。ありがとう」

追求されなかったのは救われた心地で、事実救われたのだけど。

これだと今までの会話は何の為にあったんだってことになる。お互いに新しい知識は何一つ得ていないし。貴重な、けれど有り余る時間を浪費しただけだ。

とはいえ、お互いに失ったものはそれ以外にない。ならば得るものが無くても仕方がないだろう。プラスマイナスゼロだ。元の均衡が保たれたと言えば聞こえもいい。結局人間、安定して退屈な進展のない日々が大切である。

さてと、と遙風は立ち上がる。さらり、と髪が流れる立ち姿が嫌に扇情的で思わず僕は息を飲む。

威勢よく立ち上がるのはいいけれど、それにしたってまだ座ったままの僕に気を遣って欲しいのだが。もっとも、そんなことを今の遙風に言っても無駄であることは間違いない。犬に論語。馬の耳に東のどこ吹く風だ。

しかしその軽率な行動が後日僕の身に降りかかる災難となることは、少しくらい意識して欲しいな。

夕陽をバックにして相変わらず気だるそうな表情で遙風が僕を振り向く。

「じゃ、オレはそろそろ帰るから。今日の復習とか明日の予習とかあるし」

「お前の口からそんな言葉が出てくるとはな」

「この口ならよく言ってるよ、そんなこと」

それもそうか、と納得。

じゃあな、と別れの言葉を反復し、遙風はくるりと身を翻す。学

生同士、それも同学年の軽い挨拶程度にも必要以上の敬意を払っている遙風は、この瞬間も僕の正面に立って先の台詞を告げたのだ。まったく、真面目なのかそうでないのか。礼儀正しさは習慣的に体に染み付いているのかもしれないな。

さて、僕はもう少しだけここで黄昏ているとしよう。夜の帳ももうじき降りる。そうなれば僕の気分も最高潮。今日一日の疲れはどこかへ飛んでいってしまう。知られざる僕の習慣だった。

習慣、という言葉で唐突に思い出す。僕は視界の中に遙風を探した。

発見した遙風は、ひよひよいと散らかる瓦礫の上を伝承される牛若丸のごとく飛び跳ねながら移動していて、その姿は既に小さくなって見える。けれどまだ会話には支障はなさそうだった。

危ないところで僕はもう一つの習慣を忘れてしまふところだった。習慣というよりもこれはこの遙風とのお約束みたいなものだが。別れの定型句としては、どんな挨拶よりこちらの方が相応しい。

「遙風っ！」

大声を出すほどの距離でもないが、それでも僕は高音声で大袈裟に呼び掛ける。思った通り遙風は振り向いてくれない。聞こえていないフリをするつもりらしい。まあ、同じシチュエーションで同じ台詞を何度も繰り返していれば、この後僕が何を言うかなど知れているのだろう。遙風の対応は実に正しいと言える。だとしても。

僕もまた別れの言葉を、この先何度でも繰り返し口にするだろう遙風への皮肉を言い放つ。

「帰り道は気を付けろよ——」

なにせ、遙風輪廻、君は、

「——どうあれ、女の子なんだからさ」

ぴたりと止まる体。振り返る視線は批難がましい。その拗ねたように怒っているような表情に僕は満足する。

今のところは僕が唯一遙風に対して持ち合わせる有効攻撃。事実なので反論のしようがない。すっかりダメージは与えられて、カウ

ンターのリスクが無い一撃必殺。
遙風輪廻。優等生。黒の長髪。
基本的には、女の子である。

七年前の話しよう。

それは突然やってきた——なんてよくいう台詞を前置きするのは些かセンスに欠けると思うが、しかし、同時にあれほどそんな定型句が当て嵌まることもないだろうと思う。突然にして唐突、唐突にして突如、突如として忽然と。まるで当たり前のように、何百年も前から決まっていたみたいに。

僕らの町は、崩壊した。

日常も平穏も平静も静寂も。そこにあつた全てのものが、いとも簡単に崩れ落ちた瞬間。あまりに圧倒的な崩壊の渦は全てを巻き込んで始まり、全てを破壊し尽くし終わった。その鮮やかなカタストロフにむしろ魅せられるほどに。運命の筋書き通り、バッドエンドがハッピーエンドに思えてしまうほど、それは圧倒的だった。

深遠なる夜の闇空を紅に照らす炎。崩れ落ちる建造物。響き渡る絶叫は天を割る雷の如く。

震災とそれによる二次災害、つまるところ火災。街全体を飲み込んだ爆発は、轟然と巻き上がる火炎となって街を焼き尽くした。一瞬で安全地帯など消え去り、始まりから終わりまでを住民は無力なまま蹂躪されるしか出来なかった。

死亡者数は住人数のほとんど百パーセント。生死が確認されていない者も、爪痕として残された瓦礫の下に死体となって埋もれているだろう。

火の海と鳴り続ける爆発音。崩れ落ちる家屋。

地獄絵図といって差し支えない景色を知る者は、確認されているだけなら数人らしい。

川を挟んで二つに分かれるこの街——二つであって二等分ではない。特に大きな被害があった側には古い屋敷や小さな民家が集まっ
ていて、おおよその面積は街全体の四分の一程度だった——の片方
が七年前に消え去ったのだ。

今でもまだ再建されていないそこには、立ち入り禁止を示す黄色
いテープと瓦礫しかなく、寄り付こう者は一人としていない。それ
はまあ、当然といえば当然だ。誰だって、コンクリの瓦礫の下に死
体があるかもしれない場所など、近寄りたくないと思うだろうから
そういうわけで。

七年前に崩壊し瓦礫と化したこの街は、僕のお気に入りの場所だ
った。

「……で、どういうわけだよ」

星空に向かって呟く。

自分の独白に対する突っ込みだった。

いやあ、これだとなんだか、僕が心無い人間みたいだな。言い訳
をしておくと、僕がこの場所をお気に入りとしている理由は偏に人
が寄り付かないから、というものである。死体が埋まっているかも
しれない死都だから、とか不気味な理由ではない。

夜の帳が降り、夕焼けの茜色は夜の黒とバトンタッチしてかれこ
れ一時間半くらいになるだろうか。僕は一日の終わりにこうして無
意味な時間を過ごすことが多々ある。世間の喧騒から離れたいとい
うかつこい思想。うん、僕ってシティボーイだよな。

夜の世界を満たす静寂。天空を飾る星の瞬き。月光が心を癒して
くれる。

さて、そろそろいい頃かと、寝転がっていたコンクリートから起
き上がる。遙風ではないが、僕も帰って明日の予習をしなければな
らない。授業についていけなくなる。留年とかは避けたいし。

なんてことを考えながら、もうすっかり慣れたステップでテー
プを飛び越える。キープアウトの黒い文字にほんの少しだけ罪悪感を
……覚えるほど僕は善人ではないか。善い人にはなれないなあ。

今も尚残される災害跡地。

ふと月を見上げるとき、いつか見た遠い夢を思い出す。今はもうずっと昔の、思い出。

遠い遠い、懐かしく儚い終わりの夢は、月と同じで手を伸ばしても届くことは無い。

*

帰宅すると、部屋の前で枯さん^{カラス}と出くわした。

いつものことながら黒のパーカーに黒のジーンズを着た不吉な雰囲気^{ヒヤヒヤ}の隣人は、部屋の扉に鍵を差し込む僕の姿を視界に認めるなりすぐ人畜無害な微笑を向けてきて、

「こんばんは、久刻くん。今帰りかな？」

「ええ、はい。枯さんこそ、今日は遅いですね。あ、でも私服ってことは仕事帰りじゃないんですね」

「まあね。未美好^{ミミスク}と一緒に食事に行ってたんだよ」

ほら、と枯さんが挨拶を促して、小さな少女の姿がジーンズの後ろから現れる。

「こんばんはです、お隣のお兄ちゃん」

「こんばんは、未美好ちゃん」

ぺこり、と小さな頭を下げてくるお辞儀。手は膝の上で、深過ぎず浅過ぎない模範的なお辞儀は、齡十二歳の子供にしては感心するばかりだ。僕なんて未だにそんな礼儀正しい姿勢、学校の式事ですら取らないのに。

ちなみに枯さんと未美好ちゃんは兄妹である。枯さんの年齢は不詳だが、見立ててではおそらく二十代前半といったところだろう。込み入った事情があるのか、二人は僕と同じアパートで暮らしている。両親不在の兄妹二人暮らし。

枯さんは名前を意識しているのか基本的に黒基調の服以外は着ていない。これは僕が遭遇するときのみというわけではなく、同居人にして妹である未美好ちゃんの証言である。しかもその発言時に一緒にいた枯さんから公式認定もされている。

対して妹の未美好ちゃんは日々着ている服の色が違う。今夜の未美好ちゃんは、意図的にか偶然にか黒単色の枯さんと対照的に白単色だ。偶然といっても、枯さんは毎日黒色だから未美好ちゃんが白を着れば必然的に対になるのだが。

白い半袖シャツの上に袖がない型のこれまた白いパーカー。膝上丈の黒いスカート。と、よくよく見れば単色ではないのか。膝上までのソックスも黒色だし。スカートとソックスの間がポイントだ。人類の夢や希望が、そこには存在する。

それにしても可愛いなあ、未美好ちゃんは。いや、これは別に僕が子供が好きなアブナイ高校生であるところの布石ではなく、生物的に見て可愛いものを可愛いと思っただけのただの感想でしかないのだけれど。

しかし僕の視線は周囲から見れば小学生を相手によからぬ妄想を膨らませる男のものでしかなかったのか、未美好ちゃんはまた、ずっと枯さんの後ろに隠れてしまった。シャイなんだよな、この子。

「久刻くんは」

枯さんの声。すっかり未美好ちゃんの姿にばかり夢中になっていたせいで、彼のことを忘れるところだった。小学生女子を見下ろす低い視線を上昇させ、成人男性でも高身長の部類に入る枯さんを見上げる。

「久刻くんは、いつものリラクセーションかな？」

「はい、そんな感じです」

リラクセーションと来たか。違う気がするが、まあ大差はないから頷いておくけど。

「君も物好きだよねえ、人気のないところでじっとしてるのが好きだなんて。あ、もしかして放置プレイとかが好きなのかな？」

「一般人をそういう目で見るのは止めてください。枯さん、普通の人の行動をいちいちプレイに当て嵌めるのはアブナイ思考ですよ」
「ははは、それも今更だな」

……この人、さらっと自分がアブナイ人間だと認めやがった。

未美好ちゃんの貞操を一瞬心配した僕は、本気で通報した方がいんじゃないかと迷う。こんなことも実は日課の内というから自分でも驚きだ。放置プレイは別として、その前までは言っていること自体間違っていないのはさらに驚き。

物は言い様か。日常的行動も、この人に掛ければ一瞬で外道風に言い直されてしまうんだろうな。

枯さんにとっては人生の全てが何らかのプレイになっているのではないか、と僕が自分よりも長く生きた人間の時間を考察している
と、

「ふむ。なんだかあれだね。久刻くんさ、さっきまで女の子を苛めてた臭いよ」

「あなたの嗅覚は、生物的進化の過程でどのように発達してきたんですか？」

まあ確かに、僕は先刻遙風輪廻という女友達に睨まれるようなことを言っただが。

「内容はそうだね……言葉責めといったところじゃないかい？」

「あなたはどこか専門の機関で働いてください！」

なんで割れてるんだよ！ 僕からどんな匂いが出てるんだよ！

「嫌だなあ、君達と同じだよ。ただ人よりもちよつとね、ちよつとだけサディスティックスメルを嗅ぎ取ってしまい易いのさ」

謎の進出単語が出現していた。残念なことに予習不足な僕はその単語意味が不明で、どのように返答していいやら困ってしまう。：

…と、強がるのは止めよう。

「久刻くんからは俺と同じ匂いがするぜ」

「あなたと一緒にしないでください！」

サディスティックスメル。サディスト、とスメルは複合単語。英

語について何の検定も受けたことがなく、学校の成績にだってそれほど自信があるわけではない僕だが断言しよう。このような単語を覚えていても何の意味もない。どの英語使用国でも通じないだろう。勿論テストにも出題されない。黒い油性ペンの太い方で、単語の上にラインを引いておくといい。見直しが楽になる。

「それにしてもねえ」

時間は小学生が床に就くにはそろそろいい頃で、外食に出ていたのならまだ入浴だとかなんだとかが終わっていないだろう。未美好ちゃんのことをまるで考えていないのか、枯さんは持ち前の饒舌振りを発揮する。

僕だって早く部屋に入って夕飯やら、明日の予習やら、今日の復習やらをしなければならぬ。出来れば早く開放して欲しいのだが。といつても、年齢差で僕は圧倒的に立場が低い。上司の長話に付き合わされる新米社員とは、こんな気分なのだろう。

そんなことを考えながら、次に枯さんから提示される話題を聞き流そうと思っていた僕だが、

「感心しないねえ。この街が今どんな状況か。公に騒がれてるわけじゃないけど、君達の間では主流の時事なんじゃないのかい。まさか、知らないわけじゃないだろ？」

如何せん、聞き流すにはシリラスな声音と言葉に僕は考えを改める。

「ええ、まあ。僕も高校生やってますからね、知ってることには知ってますよ」

「だったら尚更だね。俺は年配者として、それから君のお隣さんとして注意すべきかな？」

「……………」

こんな時だけ、枯さんは大人だった。

既に成人を迎えた大人の男性。言動こそ変人だが、それでも彼は僕よりも長く生きている。人生経験だって一端の高校生では及ばない量に達しているはずだ。

僕は黙って枯さんを見る。

「なんてね」

真面目だった表情が破顔する。軽薄とはいわないまでも、決して真剣ともいえない表情。

「久刻くんだったて、もう高校二年生だしな。俺がいちいち説教するほどでもないね。それに、君の場合はちよつと特別だし。俺からは偉そうなことなんて言えないよ。ってことで、お咎めなしだ」

ぼんぼん、と肩を叩かれる。

励まされているようなのだが、僕は別に落ち込んでなどいない。

枯さんの真剣な顔に合わせ、こちら真面目な雰囲気努めていただけだ。それと、少し考え事をしていたというのも理由に当たる。枯さんは足元の末美好ちゃんに微笑みかけて、止まっていた歩みを再開した。

僕は、枯さんが後ろを通り過ぎていくのを感じながら挿放しの鍵に手を掛ける。くるり、と半回転。がちやり、と無機質な金属音と共に施錠が解除され扉が開かれる。

ドアノブに触れてその冷たさを感じるのと同時に、

「でもね、久刻くん」

掌の冷たさなど比較にならないほど冷たい——悪寒という名の蛇が全身を這いずり回った。

瞬間にして汗が滲む。眩暈さえも覚えてしまいそうな異常な心境。しかしそれは、耳元で聞こえた枯さんの零した笑い声により正常化された。

「でもね、久刻くん。一応君の事を心配する人がいるって、忘れちゃダメだぜ？俺だってそうだし、末美好も君の事を気に入ってる。いなくなっちゃったら寂しいよ。だから、気を付けてね」

「……はい、気を付けます」

枯さんの笑顔は、どう見ても優しいお兄さんそのものだった。僕が寒気を感じる理由など微塵も見当たらないほどに温かく——否、これは温かいなんて優しいもんじゃない。得体の知れない、生温さ

だ。

「よし、だったら約束だ。俺はいいけど、未美好は悲しませないでくれよ？ こいつはこいつで、かなり寂しがり屋だからさ。ちゃんと、帰ってきて上げてね」

「分かりました。約束しましょう」

そう答えると、枯さんは満足したように頷き笑顔を倍にする。

見ると、未美好ちゃんは先に部屋の中へ姿を消していた。とうとう兄に呆れたのか、それとも子供らしく眠たかったのか、退屈してしまったのか。なににせよ、枯さんは彼女を気に掛けているように、気に掛けていないのだった。なにせ、

「そういえば久刻くん、さっき旧都の方を通ってきたんだけどさ」

新しい話題を持ち寄る始末であるから、この人は本当に自由気ままである。未美好ちゃんだけでなく、一応僕も未成年者なのだということを分かってもらいたい。夜更かしは体に良くないのだ。しかし、次に枯さんの口から出てきたワードはそんな僕のホームシックを断ち切るに十分なものだった。

「瓦礫の影にさ、久刻くんとこの制服の女の子を見かけたんだけど、あの子、君の知り合いかな？」

夜の郊外はおよそ三十分程度の時間が経過しただけにも関わらず、僕が去る前から停滞し始めた闇の色をさらに深くしていた。まるで闇に影が生じているよう。底無しに深く濃密な夜の具現が、瓦礫の狭間を埋め尽くしている。

さて……と。進入禁止を訴えつつも効果ゼロの黄色いテープを本日三度目に乗り越える。慣れたもので、軽い助走と踏み切りだけで今なら飛び越えることが可能だった。着地、八点。

暗がりには既に目が慣れていて。なので多少足場が不安定であっても歩行に支障も危険性もない。僕は迷わずに闇に溶ける道へ足を

進める。枯さんの話だと、人影はこの迷路みたいな災害跡の暗闇を突き進んでいったらしい。なに、僕に限って帰れなくなるなんてことはないはずだ。目当ての相手が見つからなければそれはそれで構わない。早目にこの衝動を片付けてしまおう。

このときもしも。

僕が何かの弾みで引き返していたなら、

——全ては、この夜に包まれたまま明るみになることもなかったというのに。

悔やまれるのは、いつも何かが終わった後。だからこそ、人はその感情を後に悔やむという漢字を当て嵌めて『後悔』と呼ぶのだ。僕だってその例に漏れない。

直前。入り組んだ瓦礫の隙間の通路を突き進む。初めの分かれ道。ほんの気紛れに選んだ、最初で最後の分岐点。迷路で唯一の行き止まり。

一つ、これが迷路と違う事象である点を挙げるならば、壁に行き止まってしまった場合に後に退けないこと。……いや、指先でなぞる俯瞰図の迷路と、この立体迷路とは訳が違う。僕は自分の足で歩き、コマを進めるのだ。

だから——膝が震度七レベルで揺れるこの状態で、引き返すことなどできるはずがなかった。

濃密な闇の中。そこは月の光が唯一差し込む夜の孔。あろうことかその孔、その場を満たすのは闇の黒とはまるで違った色。鮮やかに噴き出す瑞々しい赤色。悪戯に壁に飛び散っては滴り、歪な線を描く。

我を忘れていた僕は強烈な悪臭に自我を取り戻し、瞬間的に全てを理解させられた。そう。この場所は終わっている。ここは、なにもかもが行き着いた果ての終焉。

その象徴であるかのようにそれは、辛うじてヒトの形を留めているその肉塊は、瓦礫に凭れ掛かったまま噴水のオブジェみたいに鮮血を夜に散らしていた。

有り体に言えば、ここは終わっていた。

苛烈なまでの深紅の飛沫。

四方を汚す、目の痛くなる原色。

四肢を引き千切られた、というよりむしろ乱雑に喰い散らかされた元人体。

死体と呼ぶことさえ憚られる無惨な有り様と、濃密な死の臭い。

その、全てが終わった漆黒の中で、

「動かないで」

——僕は、彼女に出逢った。

*

「動かないで」

声は警告しているというよりもむしろ、何らかの動作を起こせば即座に首を刎ねると脅しているようだった。鋭利な、それでいて透き通るような声。凄んではいるが年齢はおそらく僕とそう変わらないただろうことが予想可能。

僕は眼前に横たわる奇怪なオブジェに目を釘付けにされ、背後に第三者の存在があつたことに気付くことが出来なかった。……というか、飛び掛けていた意識を繋ぎ止めたのが彼女の声であって、気が付いたらそこにいたといった方が正しい。この世界に、今この瞬間、彼女は現れたのだ。

「質問に答えて。この場での貴方には、それ以外の一切を禁止します」

凜とした声が闇に響く。一方的な言葉は有無を言わず、僕から権利を奪う。しかし冗談じゃない。質問したいのはこっちの方だ。ただでさえこんな訳の分からない——猟奇的な現場に居合わせてしまったのだから。いきなり現れた何者かの命令などおいそれと受け

入れてなどいられやしない。

突発的、あるいは本能的に僕は言って、

「……ちよつと待った質問って——」

言われても。答えられることなどない。

言いながら上半身を捻り、浮かした右足を軸に旋回しようとした僕は、

「——！」

思考が停止する寸前だった。

まるで一陣の風が吹き抜けるように、その体は月光を浴びて流れた。追いついていく夜より深い漆黒の長髪。感情のない瞳に灯るのは殺意に似た刃物を思わせる蒼い鋭い輝き。端麗な白い顔が、流麗に靡く髪と相まって、この薄汚れた匣の中でさえ美しく凜と輝いて見えた。

正直に言えばこの時、僕は彼女に見惚れていた。

月の光を一身に浴びるその姿が余りに綺麗だったから、彼女がいるだけで黒と赤のコントラストが演出に思えてしまうほど優麗で。息をすることさえ忘れて見入ってしまった。その、この世のものは思えない美しさに心を奪われていた。

だから——僕が首元を薙いだ銀光に気付いたのは、既に彼女が腕を振り切った後のことになる。旋風は木枯らしを生むように、闇を切り裂くその目も覚めるような閃き。回避出来たのは偏に、少女の振るった刃に殺意がなかっただけのこと。殺す気のないナイフは虚空を切り裂き、少女の体が着地する。寸間遅れて、髪が重力に従って垂れ落ちた。

ぱさり、というその音を聞いて。自分の中の何か柱のようなものが折れる音を錯覚。全身から力が抜けて、ほんの気紛れ程度の違いで刹那ほど前に自分が死んでいたことを理解する。途端、膝が笑い、姿勢が後方に傾ぐ。天を仰いで倒れる体をしかし、少女は許さない。視認出来たの一瞬だけ。細く白い腕が伸び、僕の襟を捕らえる。後は力任せに引っ張られ、片側から強引に引力を付加された体は半回

転して引き上げられる。

その結果、僕は少女に背中を向けて——しかもまだ足には直立に十分な力が入らない——半ば吊るされる形になった。さらには羽交い締め。呼吸器官の圧迫。止めには、首筋にナイフと来ている。どう考えても詰みだ。首筋に切っ先を向ける刀身を直視したわけではないが、気候とは無関係の冷たい空気がそれを否応にも悟らせる。動物の直感だ——今動けば、僕は間違いなく死ぬ。殺される。

かちり、音がして。

——凍えるような冷え切った死の悪寒が、首から全身を駆け巡った。

「もう一度言うわ。これが最後通告。次はないと思いなさい。あ、頷いたらダメよ。そんなことをしたら頸動脈が切れちゃうから」

「……………」

笑うように、涼やかな声が告げる。僕はちつとも笑えない。当たり前だろ。明確な死を今まさに突き付けられている最中に笑えるなど正気の沙汰ではない。その逆もまた然り。

だがそんな常識が通じないことも、同時に僕は理解していた。だって、そうだろ。どう考えたってこの場所は異常なんだから。既に終わった街の瓦礫に囲まれ、外界から隔離されたここは今や一つの異界。境界を外れた匣の中に同じ。僕の常識や良識が通じる道理など皆無なのだ。

ぎゅつ、と、少女の腕が締殺に力を加える。肺に取り込まれる酸素が極端に減少。感覚だけが研ぎ澄まされ、敏感になった肌は間近に迫る断末魔を感じ取る。

僕は、この瞬間、まるで当たり前のようにそれを——自分の死を受け入れていた。その、絶対的な終末の足音を確かに聞いていた。

……かと思えば。僕の覚悟に似た諦観を嘲笑うかのごとくないし、生への執着を攪り刺激するみたいに拘束が緩む。僅かに生じた安堵に付け込み、少女の声。

「そんな状態でも声くらいは出せるでしょ？ 大丈夫、簡単な質問

だから。答えは二者択一。イエスかノーでいいから答えてね。何度も言うけど、動いちゃダメだから。ちゃんと言葉で答えるのよ」

兼ねてからの目的であったそれを再確認。僕にとっては今更でもある。何を問うつもりかは知らないが、生命の終焉を見せられ、直後に生命の危機に迫られるこんな状態ではまともに回答などできる気がしない。

「アレ——」

顎の下から腕を突き上げられる。彼女が『アレ』呼ばわりする変死体に視界が定められて固定され、

「——貴方がやったの？」

笑い飛ばして否定してやりたい、そんな詰問を堂々大真面目に垣根無しに待った無しに本気の本心から至極当たり前に問う。

「……馬鹿言うなよ、そんな訳、ないだろ」

詰まる呼吸を吐き出して、虫の息ほどのそれに言葉を乗せる。アレを僕がやったのかだって？ 笑ってやりたいがそう出来ない。微動だにもすれば首筋から鮮血のアーチだ。致死量は軽く望める出血大サーブスをしてやるほど僕は自分の命を持て余していない。

「本当に？ アレ、本当にアンタじゃないの？」

少しだけ年相応に近付いた声は、どこか驚きを隠しているようにも聞こえた。お前こそ本気で僕を疑っているのかよ。そっちの方が驚愕だ。まともな神経をしているとは到底思えないね。

「……分かりました。貴方を解放します」

言って、首の束縛が解ける。するり、といやに扇情的な感じで肩を滑り降りる少女の腕。その感触に寒気を覚えながら脱力した僕は刹那の後、唐突に二度目の驚愕と衝撃を味わうことになった。

腹部に激痛。この感じだとおそらく、少女の爪先が思い切り加速を付けて脇腹に食い込んだのだろう。不意打ちにも程がある、しかも背後からだ。身心共に弛緩し切っていた僕がこの力業に対抗できるはずもなく、為す術などまるでないまま蹂躪された。

「ふうん。確かに——この惨状で、その格好は有り得ないわよね。」

おっけ、了解したわ。アンタの言ったこと、取り敢えず信用出来るって分かった」

人を蹴り飛ばした張本人は暢気にそんなことを言っている。何を考察しているのかは知らないが痛い。直撃を喰らった患部の横腹もそうだけど、倒れた衝撃がダイレクトに腰に集まってきやがった。その苦痛に耐え、なるだけ冷静に努めて今度は僕が訊く。

「……何が、どうなってるんだよ」

自発的に質問する権利が回帰したのかは定かでないが、当面で最大の疑問を口にする。月光の輪を離れた少女の姿は丁度胸から下しか確認出来ない。闇に紛れる死神は一步踏み出して、僕と、僕の背後でようやく流血を停止させた肉塊を順番に指した。

「それ、アンタがやったなら返り血を浴びてないわけないから。客観的に見てまずアンタは犯人じゃない。だから納得したのよ、アンタの言ってることは本当なんだって」

「君さ、いいこと教えてやるよ」

嘆息混じりに僕は言う。

「そういうときって、素直に謝るもんだぜ」

肋が折れてるかもしれないから、謝罪は治療費という形で行って貰えれば助かる。……いや、言葉による謝罪も勿論求めたい。なにせ僕はまったくの冤罪で死の境界線を垣間見せられたのだから。こんな体験滅多と出来るもんじゃない、出来れば一生経験したくなかった体験だ。

「そっか。それはいいこと教えて貰ったわ」

果たして彼女は一切悪びれる様子などなく、散歩するような軽い足取りで月下に姿を現す。改めて光の下で見るその全貌はやはり、夜空の一点を穿ち輝く月のように、ともすればついさっきまでのことを水に流してしまいかねないほど儚く綺麗だった。

「ちよつとだけ見直した。謝るだけで、復讐をしないなんて。――アンタ、いい人でしょ？」

「……さて、どうだろうな」

月を背景に、その少女は手を差し伸べる。月明かり。闇に延びる道標の様。――僕は迷わずその手を掴む。凶器を振り回す物騒な目とは違い、その手には確かな温もりがあった。

「こんばんは、久刻十字くん。さつきは疑ってごめんね。――はい、これで解決。本当、善人よねアンタ」

不敵に悪魔に微笑んで、今宵の満月も霞んで見えるほど眩しくも柔らかな笑顔を作って少女――天門坂一月は人を小馬鹿にするみたいに言うのだった。

ていうかこの女、本気で表面上の上部だけでしか謝らねえよ。

人間は一度に複数の事象を整理して処理できる生物ではない。これは僕の持論なので、世界にはそういうことの可能な人達もいるだろう。しかしそんなのは少数派で、断言してもいいが僕は間違いないく庶民派である。残念ながらそこまでハイスペックな脳を持ち合わせてはいない。

異なる二つの事象が同時に、あるいは連続して発生した場合、では僕のようなミーハーはどんな風に対処しているのか。なんてことはなくて、ただ起きた物事を縦に並べて一つずつ解決しているのだ。その順列とはそのまま優先順位。例えば自分に関係のないところで進行して完結した事象を事後に客観視するのと、自らが当事者となっている現在進行形の事象を主観視するのではどちらが優先されるべきかなど考えるまでもない。自分が殺されようとしている場面にも関わらず、既に殺された誰かを気に掛けるなんてこの世の誰に出来ようか。下手をすれば嫌でもその誰かと面を突き合わせることになりかねないのだから、急ぐことはない。自分の命の続いている間はそれを大事にしよう。

とどのつまり何が言いたいのかと言うと、僕は今の今まで自分の目撃した『異常』をすっぱり忘却し切っていた。原因は明らかに天門坂の凶行（殺人未遂傷害罪冤罪エトセトラ）。実感は実観よりも遅れて訪れる。自分の見ているこの景色が、自分のいるこの匣の中が殺人現場であるなどと、簡単には認識できなくて当然だろう。

「……いや、そもそも殺人現場とかいうのも間違ってるのか」

四肢を引き千切られた……喰い千切られた血と肉の塊。人間大の残骸みたいな巨大な肉塊。こんな惨状を殺人と呼ぶことが果たして正しいのか。僕にはむしろ同じ、災害跡と言った方がしっくりくる。こんなのは人間の死に方でも死に様でもない。ヒトとして殺されず、ヒトとして死ぬことの出来なかった憐れな誰かの成れの果てがそこにはあった。

僕がそんな風に事態をまとめていると、

「そうかしら？ これってどう見たって殺人じゃないの」

僅かな月明かりを頼りに現場検証を行う少女の背中が言う。他ならぬ天門坂一月。彼女はどうかやら僕とは頭の構造が違っていらしく、誰かを殺そうとしながら殺された誰かのことを思考できる優秀な脳をお持ちのようである。僕に着せた濡れ衣を自分で脱がせた天門坂はすると、一方的に久刻十字から興味をなくし、今のうちに死体（便宜上そう呼ぶなら）の観察に移っていた。ちなみに僕は天門坂から距離を置いて、彼女によって惨劇の光景が遮られ、目に入らないようにと選んだ立ち位置でおそらく元はオフィスビルの一部だったとおぼしき瓦礫に凭れている。

「自殺じゃないのは明らかだね。自分じゃ自分の両手両足を引き千切るなんて不可能だし、それを処理することも出来ない。事故では有り得ない状態だから、これは他殺で、突発的なものとも思えない——てことは、これは故意の殺人。そうなるでしょ？」

疑問系にされたって困る。それに僕が言いたいことはそんなことではない。天門坂は『事態』を見てその惨状を『殺人』という言葉に定義しているが、僕が言いたいのはあくまで変わり果てたカタチ

で散らばった元人間体についてだ。重ねて言うが人間はそんな風に死なないし、人間ならこんな風に死なせない。さながら暴風が通った後のように、殺人定義もその意義すらなく、基づくのは大義名分などではなくて一瞬の衝動。自然災害みたいに、理由なく運のなかった誰かが壊れてしまっただけ。

殺す目的があつたのではない。これではまるで――

「貴方、死体を見慣れてるのね」

天門坂の興味を亡骸から逸らしたのは不本意ながら僕であつた。まるでそれまで考えていたことが筒抜けにされているみたいな奇妙な感覚。見透かしたような目で天門坂は僕を見る。腕を組み、赤黒く汚れた壁を背後に、その凄惨なバツクを従えて揺るぎなくまばたきすらない眼差しで。

「……まあな、見慣れてるってほどではないけど。他人より少しだけ耐性とか経験とかがあるってのは事実だよ」

それよりも、むしろ言うなれば、僕が慣れているのは死体ではなくて『死』そのものだと言った方が正しいのだが。広義では変わらないし、天門坂もその程度の細かい差異を指摘するほど真剣に言つたわけではないだろうから付加説明はしない。

――思い出すのは、循環うように漂う死の臭い。

焼けた瓦礫と救済を懇願する断末魔。

静な夜に浮かぶ破滅の月。

地獄の顕現を見下ろす無慈悲な冷たい金色の孔を思い出す。

「お前だつて随分落ち着いてるじゃないか天門坂。普通女の子がこんなのみたら悲鳴くらい上げるものなんじゃないのか？」

「さあね。そんなのは分かんないわ。他と自分を比較してどっちがまともかなんて、考えたこともなかったし考えたくもないもの。でも、確かにわたしはちよつと可笑しいのかもね。――うん。慣れてるって言うなら、それは多分わたしの方だから」

訥々と、天門坂は言った。

「普通よりは見慣れてるし、感じ慣れてる。死の手触りも、臭いも、

音も色も通常よりは慣れ親しんでるわね。もう、七年になるから」

何を言っているやらさっぱり分からないのは、天門坂が故意に于遠な言い回しをしているからだろうか。僕に理解力ないという理由でだけはあつて欲しくない。

「……もう一つ質問、いいか、天門坂？」

「構わないけど。……なに、なんだかやけに絡んでくるのね」

お前ほどではないさ。何せ、話したことがないどころか目があったことすらもないクラスメイトを殺そうとするのだからな。僕としては名前を記憶されていただけでも驚きに値する。彼女のナイフを振りかざす姿はそれ以上に盛大な驚愕をもたらしたことは言うまでもないことだ。

それはそうと、僕は天門坂一月に尋ねる。

「お互い様つてことで、答えたくないなら無理には訊かないけど天門坂、お前はこんな時間にこんなところでしかもこんな時に何をしてたんだ？」

枯さんの目撃証言から考えて、僕が移動に費やした時間（往復なのでその二倍）を最低としておよそ一時間近く日が暮れてから天門坂は災害跡にいたことになる。僕が言えたことではないのだろうが、はつきり言つてわざわざ立ち入り禁止区域にされているこんな瓦礫の山に訪れる意味が分からない。ましてや、天門坂一月ともあろう学園のアイドル的優等生がこのように非行染みた真似をすることは一片の理由すら見当たらなかった。

天門坂は表情を変えず、しかし内心では返答の句を模索しているのだろう少しの沈黙を挿入してから口を開く。無理には訊かない、などという文句が質問される側にとって、答えなければならぬ、といった強迫観念に比類する効果を持つことは分かった上で前置きしたのだが。正直なところそれでも天門坂が質問に応じてくれるとは思っていなかったので驚いたことは否定出来ない。加えて、

「強いて言うなら好奇心つてやつ。知ってるよね、久刻くん。今の街で何が起きてるか。だからさっき『こんなときに』なんて言っ

たんでしょう？ …… まさかテスト前だとかそんな意味で言ったんじゃないんでしょ？」

咄嗟に言ってしまったことが逆にこちらの腹を読まれる隙になつてしまったらしい。この天門坂の返答は同時に、彼女の読み取った僕の推測が正解であることも表していた。

「連続失踪事件。今月に入ってから二週間で四人が消失した今一番のフレッシュなゴシップ、この街に住んでるからには知らない訳ないわよね」

そして。

「端的に言えばね——」

僕を仰天させるに足る言葉はそれらを聞かされた上で、自然な流れの中で到来するのだった。

端的に言つと、天門坂が続きを口にする。

月光の下、幽かに翳る深層の心。^{カオ} あっけらかんと、

「——この失踪事件つて、連続殺人なのよ」

にわかに信じ難い、けれど薄々誰もが意識し始めている最終結論を簡単に口に出すのだった。さらに天門坂の告白はこれに留まらない。僕は驚きの上に更なる同一の感情累積させられ、それさえ感情として処理しきれない内に重なる事実の宣言に見舞われる。これが最後になる驚愕は、今夜最大の爆弾となつて投下された。

「わたしはその犯人を追つてるの。見つけ出して、必ず殺す。わたしがしたいのはただの復讐よ。……あ、これじゃあ質問の答えになつてないか。いいわ、つまりそういうこと。今夜こそ、このいかれた殺人鬼を見付けてやろうと思つたのよ」

鬼気迫る形相の上から塗り固められた平静の仮面。取り繕つても隠しきれない冷酷な蒼の瞳。闇に煌めく銀色の軌跡。感情の一切を押し殺して刃を振るう少女の姿を脳裏に描かざるを得なかった。

「でも今夜は失敗。やっと見付けたと思つたら空振りだもん。紛らわしいつたらないわね。それでも気付いてよかった。勘違いで殺しちゃうのはよくないもんね」

おどけるように無邪気に笑う少女に戦慄を覚えた僕の中樞神経はこの瞬間確かに正常に稼働していたことだろう。気温も冷え込み始めた近頃。夜の冷たい影の中にいながら背中に発汗を感じたとしてもそれは、なにも間違った代謝反応ではないはずだ。

「……連続殺人って、なんでそんなこと分かるんだよ」

寒気に震える胸中の、その動揺を気取られないように努めて重ねて問いかける。

「異なことを訊くのね久刻くん。見れば分かるでしょ、そこにある死体がなによりの証拠よ」

「そこにあるものが失踪に関連してる確証はないんだろ。失踪事件とは別の……ただの変死体かもしれないじゃないか。あれもこれも同一の事象として捉えるのは早計じゃないのか、少なくともこの死体が今月四人目の失踪者になるとは限らない」

「最初の失踪が起きてからもう直一ヶ月よね。都合九人目を数えるこの事件の当事者が生きてるって方が理に叶わないと思うけれど。まあいいわ。論より証拠とか、そういうことが言いたいみたいだし。それじゃあ久刻くん、仮に貴方が前回の失踪事件直前に同じような惨状を目撃していたら——もしも、今貴方の見ているものと同じ光景を四日前に見て、その翌日にこの街から一人の人間が消えたとしたら——？」

貴方は今夜、どんな推測を思い描くかしら。なんて、悪戯に微笑む天門坂。したり顔が口元を歪める。なぜだか表情は笑っているのに、視線は一層冷ややかに研ぎ澄まされているみたいだった。まるで氷点下寸前の水が背筋を滑走しているように、寒気は骨髓を通して全身に行き渡る。心の動揺に共振する体。天門坂の言いたいことを理解して僕は、どうしても自己の感情を押さえきれなかった。

「分かるでしょう？ 貴方はさっきわたしに『驚かないのか』なんて訊いたけど、一度見たことのある手品に二度目も初見と同じ新鮮な感情は生じない。慣れてるって意味は、確かに的外れではなかったみたいね」

爪が掌に食い込む痛み。熱い、たぎる血液の滲み。この感情をな
んと呼ぶのだろうと思考して思い至る。嗚呼そうか、僕は初めから
恐怖して心を揺らしていたわけではない。揺れていたのではなく、
弾んでいた。さながら鼓動は舞踏の囃子。跳ね上がる脈動は高騰す
る精神で、だからこの意思を言葉にするならばそれは。

「ちよつと聞いているの？ 人が質疑応答してやってるのに、さつき
から別のことを考えてるでしょ、アンタ」

「え……ああ、悪い。なんかぼうつとしてた」

「……呆れた。血の臭いで頭沸いちゃったんじゃないの。慣れてる
とか言つて、実はそうでもないのね」

心底不満気に溜息を吐き出す端整な顔立ち。どうでもいいがこい
つ、話してる間にころころと態度を変えてくる。日付単位ならこれ
の強化版が友人にいるけど……いや、あれが天門坂の強化ではなく、
天門坂があれの劣化に当たるのか。何にしろ、変わっているのは人
格ではなくて性格の方に依っていて、それさえも大袈裟なので態度
に若干の揺らぎがあると形容しておこう。芯にあるものがぶれてい
ないのに、その周辺が落ち着かないから気持ちが悪い。

さておき、僕は天門坂の言わんとするところをまとめた風な発言
を謝辞の代わりに述べた。

「……てことはつまり、こんなことがつい四日前にもあつて、それ
で、失踪は神隠しなんかではなく殺人通り魔だと結論付けた……っ
てことか？」

「そんなところ」

「さつき物騒なこと言つてたよな。犯人、見つけ出して殺すんだと
か、なんとか」

「それがなに？」

「……不謹慎かもしれないけど、それってつまりさ——お前の知り
合い、それも比較的親しい誰かが——」

皆まで言わずとも、静かに蒼い瞳が語っていた。その通り。殺意
を孕んで虚空を穿つ、爛と灯る感情の火。闇に光る、それはまるで

夜空に座する天の月。

「久刻くん、今夜はもう遅いから帰った方がいいわよ。よく言うでしょ、犯人は犯行現場に戻るって。いつまでもこんなところに蟠ってたら、ちよっと冗談じゃ済まない事態になりかねないと思うんだけど」

暫定的にはあるが。答えを得た僕はそれで天門坂一月という少女を少しだけ理解した。まるで死神が悪魔に憑かれたよう。復讐者として殺意を受け入れていた、自分と同じクラスの優等生。

この夜。

——僕は少女を同胞と見誤った。二人の目指す先が同じであると、勝手に判断してしまった。

だからかもしれない。

「危ないのはお前も同じだろ。ていうか、天門坂の方が襲われる可能性は高いじゃないかよ。……まあ、刃物持つてるわけだけど。夜が危険なのは何も、いかれた殺人鬼に出くわすかもしれないってだけじゃないんだから。頭の愉快な輩はわんさかいるだろ」

そう言って、付き添って帰宅することを遠回しに提案してみるもやはり、天門坂は天門坂であり、彼女は学園のアイドル。泣く子も黙る美少女なのであって、僕のような一介の男子高校生のエスコートなど、

「もしかして心配してくれるの？へえ、心底お人好しね久刻くん。簡単に気を許したら今度こそ背中からザクリ、なんてこともあるかもしれないのよ？」

冗談にならないことを冗談みたいに苦笑ではない笑顔で口にして、「それにわたしは——貴方のこと、恨んでるんだから。それこそ、殺してしまいたいくらいにね」

冗談にすらならないような悪辣な台詞と共に笑顔に隠した殺意を仄かに覗かせて——破滅の月はこのとき、まごうことなき心底に広がる波紋を憎悪の形に滲ませた。

「……天門坂？」

くすり。艶やかな唇が笑みを溢す。

かくして、焼けた災害跡地に隠された猟奇死体の果てる赤黒い闇の充滿する匣の中。久刻十字は天門坂一月と初めて言葉を交わした。出逢ったというならばこの瞬間がそうであって、けれど始まったというならそれはきつと今ではなく更に過去のある日。終日の赤い夜。絶望の月の見守る世界の上、大地の激震の裏で、人々の叫びの奥で、この酷く滑稽で醜悪な螺旋状の復讐劇はひっそり幕を開けていた。

天門坂は笑う。声に出さず蒼の瞳で幽かに美しく。……本当に、僕は彼女の言う通りお人好しだ。自分を殺したいと宣言し、かつ実際そのように行動した相手の姿を見て、綺麗だと本心から思ってしまったのだから。

それは、僅かに月明かりの差し込む絶望の匣の中。

過ぎて行く夜。頭上の月もいつかは空に溶けて見えなくなる。永遠を思わせる遠い深淵の空もやがては朝に代わるのが世の理。

終わらないものなどない。

この世界は決して、永遠ではないのだから――。

/ ?

/ 2

天気快晴にして気温も温暖。長くこの国を配下に置いていた冬大將軍がシベリア寒氣団を引き連れ、春の季節風に押し戻されるように撤退を始めた三月の上旬の頃だった。まるで何てことのない、それは変わり映えがしないといえはその通りで、変哲のない日常のページというならそれも間違いではない。その、変化のない幸福を確かにこの街は肯定していた。

日が暮れて。

誰かが運悪くスイッチを押してしまったみたいに。

世界はあっさりと顔色を変える。

建造物の軋む音が人々の絶叫を飲み込む絶望の渦中。二次災害により発生した火災。炎は瞬く間に街全体を丸呑みにし、煉獄を思わせる世界は黒煙の空の下で幾つもの命を焙った。それは本当に、鮮麗過ぎる崩壊の過程。生きたいという氣力を根っこから削ぎ取っていくような、見事なまでの終わりの景色。地獄が顕現したといっても過言ではない。絶え間なく喉を裂いて放たれる救済の声も、月には届かず。僕らの街は、灰塵と瓦礫に還った。

十年前の震災はどのような様相を呈していた。生きている者が間違っていて、死んでいる者が正しい。生は偽りで死こそが真。誰もがそう錯覚してしまうほどの、凄惨な夜。

不意に、黒煙に霞む月を見上げてた。空はあんなにも遠いのに、何故かその晩天を統べる金色は大きくて、手を伸ばせば届くんじやないかと思ってしまったのだ。無論、届くはずなんてない。最後に残った氣力を全て注ぎ込んで突き出した掌は煤に汚れ、傷はないの

にぼろぼろに見えた。その小さな手が、ぱたりと落ちる。

瞼は開いているのに視界が薄れていく。目を閉じようとしているんじゃない、光が失われようとしている。世界の果てに見えた地平線は薄っすら明るくて、もう少してこの夜が明けようとしているらしいことが死に損ないの頭でも理解できた。

その綺麗な朝焼けを見て、涙した少年がいる。

生きたいと、もう一度叶わぬ願いを抱いた少年がそこにいて。

“キミも、一人なの？”

地獄の中。

煉獄の底。

終わった街の片隅で、その誰かは訊いてくる。

声は優しくて、泣きそうなのに歓喜しているみたいに聞こえた。

“そっか、それじゃあ私達は同じだね。……ごめんね、私は——”

彼女は最後に何と口にしたのだろう。

それだけが思い出せず、夢はいつも温かい腕に抱かれて終わる。

鮮明に思い出す、その瞬間。生きたいと、助かりたいと自分勝手に抱く願いが叶えられた瞬間。終わりの夜が明けて、暁の空から黒い絶望が退いて行く。代わりにやってきたのは始まりの朝。黄金に染まる朝焼けに滲んだ希望の空。

“——”

僕に出来ることはただ、落ちていく意識を懸命に繋ぎ止めて、涙を零しながら何事かを呟く彼女の声を必死に拾い上げることだけだった。

：

目を覚ましたのは、さて何が原因だろう。

これほどにすっきりと目が覚める朝は珍しかった。起き抜けにも

関わらずここまで頭が冴えていることもそうあることじゃない。とまあ自分の寝起きの良さに驚きつつ、畳み掛けるように次なる吃驚の種は嗅覚に訴えを起こす。空腹を誘発する、芳しい匂いに部屋が満ちていた。

極め付けには。

「おはよう久刻くん。朝ご飯出来てるわよ」

フレッシュに微笑んでそんなことを告げる、全国の男子高校生が脳裏に描く妄想を具現化して投影したかのごときエプロン姿がそこにいるのである。その妄想は名を、天門坂一月と言う。黄色いエプロンを身に纏い、髪をポニーテールに結んだ珠玉のベストショットを目の当たりにして思った。ともすれば、ここは天国なのか？

「……………あの、天門坂さん？」

僕は、まず何よりも優先してここが自分の部屋であることを確認。見慣れた天井。防音効果の足りない汚い壁。硬い安物の折りたたみベッドソファ―兼務。どうやらここは自室で間違いないようだ。天国ではない。

ならば——当然帰結する疑問。

何故、天門坂一月がここにいるのでしょうか？

「そりゃあ、アンタが昨日送ってくって言うて聞かないから『じゃあお願いね』とか適当なこと言っついていっしょに帰るフリをしつつ背後に回って——久刻くんが危ないから今夜は近くにある自分の家に泊まって行け。って言うてくれたんじゃない」

「嘘吐けお前！ 冷静に言い換えたって手遅れなんだよ！」

そういえば後頭部がひりひりする。こいつ、一日に何度人を暴行すれば気が済むんだ。

会話の中で、僕は少しずつ昨晚のことを思い出していた。あの凄惨な現場も、天門坂に殺されかけたことも、一睡程度で忘却出来るほどあっさりした記憶ではない。下手をすれば生涯トラウマとして付き纏わないでもないほどの、人生第二の厄日が昨日であると称して差し支えないだろう。

「……うるさいなあ。ごめんごめん、反省してるわよわたしだって。だからほら、朝ご飯作ってあげたんじゃしょ」

「投げやりに物で謝罪しようとするな」

それからこら、何でお前、ペタンと座って行儀のいい姿勢のまま僕と会話しつつ飯喰ってやがる。そんな態度で謝られたって誠意の欠片も感じ取れねえよ。

「アンタを担いでここまで運んできて上げたし、それからベッドも譲って上げたのよ」

「僕の部屋のベッドだ。譲るも何も僕の物であって然るべきだ」

「あーもう、うっさい！ あんまり文句ばかり言ってたら、これ全部一人で食べちゃうわよ！」

「それだってこの部屋にあった食材だ！ 本来お前が口にしている物じゃねえ！」

ちやつかり自分の分は完食している天門坂。ベッドの上の僕を睨みつけながらも礼儀正しく手を合わせて「お粗末様でした」とか言っている。食事と口論を同時に行えることに、僕は関心さえしてしまいそうだった。……いやいや、賞賛している場合ではない。

天門坂は自分の使用した食器を持って三步ほどの距離にある流しに向う。手際よく食器類を洗い終えると、何事もなかった顔をして再び床の上に腰を下ろした。依然として冷戦状態が続く。天門坂はだんまりを決め込んで僕の瞳をロックオン。

……無理です。耐えられません。

「分かった……僕が悪かったよ」

「それだけ？」

「美味しそうな朝食を用意してくれてありがとう天門坂さん！」

「どういたしまして、久刻くん」

なんだろうこの屈服感。生きた心地がしない。

というのは嘘で。

屈服感は腹の虫の泣き声により空腹感に変わり、これほどにないほど生きた実感を僕に与えるのだった。だってしょうがないだろう。

どう考えたってあり合わせの材料しか使っていないはずなのに、僕の前に並べられた天門坂お手製の料理達は、美食の言葉が形を成して顕現したみたいはどうしようもなくそれはそれは大層に旨そうだったのだから。

人の尊厳が欠け落ちていくみたいな朝食が終了して、天門坂が立ち上がった。僕の使用した食器は自分で処理しろとの無言のお告げである。当然のことといえば当然のことなので咎めるつもりはない。それよりも今は、この満腹感に呪詛を唱えたい気分だ。舌鼓を連打する自分が恨めしくて悔しい。……十点。

玄関を出て、見送りに出た僕を天門坂は振り返ると、

「わたし、今日は学校休むから」

伝言を任せるという意味だろうか。天門坂は突然サボタージュを宣言した。無論、これに際しても僕は糾弾するほど真面目な生徒ではない。休みたいならば好きにすればいいのだ。天門坂の誇る輝かしい経歴に泥が付いたところで、僕はちつとも困らない。優等生の幻想が壊れてショックを受けるのも、実に今更。僕の中の天門坂一月はスケルトン使用の猫を放棄している。

「それから」

だから、だ。

聞かなければよかったと、後々思ってしまう彼女の発言はここから後である。

「もうわたしには関わらないで。それから、あの災害跡にも近付かないこと。これ以上——貴方は事件に首を突っ込まないって約束しなさい」

必要以上に接近しておいて、一方的に突き放す。天門坂一月の瞳は昨日見た冷淡で鋭利な蒼を輝かせ、拒否を許さぬ拒絶の意思を僕に訴えかけているのであった。

その瞳に何と返事をすればよかったのだろう。僕は何事を口にすることもなく、天門坂は沈黙を肯定として解釈したのか軟らかく微笑んで――苦笑とも取れる、幽かで儚い嘆きの笑みに口元が歪む――下ろした長髪を翻して颯爽と僕の前から姿を消した。

…… 全くもって、勝手な奴である。

「朝から若いねえ、久刻くん」

と、あらぬ方向から場違いなほど軽薄な声。お隣を見れば、本日もまたばつちり黒のファッションで決めた枯さんの登場。着ている服は毎日違うので、色が黒に統一されているのは彼の好みと受け取って問題ないと思う。

「だけど頂けないな、君はまだ未成年だろう？ もう少し弁えた方がいいよ」

「何を勘違いしてるのか知りませんが、別に天門坂と妙なことは起きてません」

厳密には妙なことになりまくっていたのだが、枯さんの思い描く桃色の妄想とは遠くかけ離れた生臭い血色の現実はこの場では伏せるべきだろう。この場でなくても永遠に伏せなければ。これは僕が墓場まで持つていくべき思い出だ。

いつからそこにいたのか、枯さんは共同廊下の柵に持たれていた。僕はともかくとして、天門坂が気付かないとは思えないので二人は入れ違いに現れたと考えるのが妥当だろう。会話に関しては部屋の中にいても…… 流石にそれは言い過ぎか。玄関くらいにいれば外の音が聞こえないでもないから、偶然外に出ようとして扉の向こうに僕と天門坂がいることに気付き聞き耳を立てていた――事の次第は以上のような感じだろう。

ふと違和感を覚える。枯さんの目が、どこか虚ろな風に見えたのは気のせいかな。

「…… 枯さん？」

呼び掛ける。と、黒装束の隣人はぱちりぱちりと二度ほどのまばたき。表情は変えないままで、目の焦点だけが会話している僕に定

まった。それだけの变化で彼は死者から生者に蘇生を果たす。虚空に泳いでいた眼光は普段の温厚な色を取り戻していた。

「いや、これは失敬。久刻くんが俺の予想を越えてとんだ当り籤くじを引いていたもんだから、驚いちゃってね。へえ、あの子が天門坂さんねえ」

「……僕の話聞いてますか？ 言い方が悪かったのなら訂正しますけど、天門坂とはただのクラスメイトでしかないですよ本当に。昨日まで話したこともないんですから」

「いやいや、人と人との関係なんて一晩もあれば劇的に変化するものなんだよ。何にしたって、現象の切欠はほんの些細なことではないのだからさ」

この人には何を言っても無駄な気がする。ここまで嬉々として話を弾ませようとしてくる枯さんは滅多に見られたものではないのだ。一方的に聞き流すのが得策だろう。ていうか相手をしてられない。早々に打ち切らないと、折角安全圏で起床したのに遅刻してしまうじゃないか。

「あの、枯さん。悪いんですがそろそろ学校行かないと、時間が危ないんですけど……」

「ん？ おっと、そうか。そうだった。悪いね久刻くん、朝から俺の話に付き合わせちゃって。いやいや、さっきの彼女があんまりあれだったから、つい熱が入っちゃったよ」

「ははは。いえいえお気になさらず」

作り笑いで全てを受け流す僕。この技は既に達人級にまで鍛え上げられている。

「おや？ 丁度いいところに彼女、もしかして久刻くんのお友達じゃないかな」

はい？ と、ここはスルーせずに素直な反応を示してみる。枯さんは背にしていた柵の外に首だけを振り向かせて、正面の通りを見下ろしていた。倣って僕も同じ方向に目をやる。そこにいた人物を認識して、僕の気分は高揚を抑止出来なかった。なにせ、そこから

奇怪なものを見る目でこちらを見上げていたのは誰あるう遙風輪廻だったのだから。これは嬉しくて仕方ない。今日はいい日になりそうだ。枯さんも可笑しな勘違いを起こすなら彼女とにして欲しい。

「そうですね。てことで、僕はそろそろ退散させて貰います」

高ぶる感情を抑えて枯さんに別れを告げる。いつもの細い目の微笑が僕を送り出してくれた。この人、中身さえ知らなければファンクラブでも創設されるんじゃないかってぐらい、実は笑顔の爽やかなお兄さんである。

僕は人畜無害のスマイルに背を向けてやや小走りに駆け出した。余計な言葉は発しない。沈黙は無関心。孤独と静謐。孤高と孤立。世界には無関心が溢れ、静謐が満ち、無関心の中に死が埋もれている。

——それが、この世界の在り方。ならば無駄に多くは語るまい。

楽観的に主観的な娯楽を貪る人生。僕の理想とする今際の際は、快楽に溺れての窒息死だ。だから、さあ今日もこの日を楽しもう。そう思うと逸る気持ちを制御出来ず駆け出したくなる。後は本能に任せるまま――

「ほどほどにしておきなよ、久刻くん」

スタート寸前に聞いた枯さんの声に、不本意にも振り返ってしまふ。そこにあつたのは、

「深く追求し過ぎると破滅するのは君だ。出来過ぎた偶然の裏には必ず、悪意が潜んでいるものだからね。精々気を付けなよ、少年」

訳の分からないことをつらつら述べる、数秒前に変わらぬ笑顔の仮面だった。

「おはよう遙風！ グッドモーニング！」

「おはようございます久刻くん。今朝は随分元気がいいようですね」朝には弱いと思っていたのですが、とさりとて気にする感じもな

く遙風輪廻。

凜とした立ち姿。きつちりと服装をただし、髪は長いストレートで背中に垂れている。手入れの行き届いていることがはっきりと分かるそれは一步踏み出すたびに繊細な肌理を主張して揺れる。朝日を受けた光沢は、深く黒い輝き。美麗な黒。傷みなどまるで感じさせない長髪は、遙風のお気に入りと聞いている。

スカート丈はおそらく一切手を加えていないスタンダードの膝上数センチ。ブレザーの前ボタンは全て閉めていて、中のカッターシャツも同様。乱れなき風紀を体現している姿の優等生。それが遙風輪廻だった。

「時に、今日は私、久刻くんに話があります」

遙風との会話において、大抵話の主導権を握るのは遙風だった。こつちから話題を振ってみても、それは変わらない。知らない間に遙風のペースに持つていかれ、気付けば術中に嵌っているとでもいうのか。平静なる支配者、エンペラー遙風輪廻。

今日もまた話の流れを支配してしまった遙風は——こちらの言葉には耳を貸さない、ともいう——しかし、そこまでは普段どおりでも今の様子はどこがおかしかった。支配者などといっても、遙風は傍若無人やら唯我独尊なんて四字熟語が当て嵌まる人間ではない。人並みの恥じらいは持っているし、道徳も常識も持ち合わせている。だから彼女が何らかの行動の際に戸惑ったり、羞恥心を垣間見せたりすることは多々あることだ。

だが、しかし。なにやら今日は頬にほんのり朱が差している。高揚しているというか、恥らっているというか。なんというのだろう。これは、あれだ。乙女も恥らうお年頃、とかなんとか。つまりはかの遙風輪廻が久刻十字に対して女の子みたいな態度を取っていた。

「その、ですね。久刻くん」

「な、なんだよ……？」

自然、息が詰まる。独特の緊張感に心臓が妙にアップテンポで振動し、脈を打つ。血液の流れが通常よりも速くなったのか、秋も終

わりに近づく頃合だというのに体温が異常に上昇している。視界に映る遙風がなぜかやけに扇情的に見えて、自制心を削っていく。

跳ね上がる鼓動を抑え、その代償として理性をすり減らしながら次の言葉を待った。そして、

「久刻くん、今すぐに懺悔しなさい」

「いや、遙風、僕は――……じゃない。ちょっと待て、遙風、お前今なんて言った？」

雰囲気こそぐわない遙風の発言に、戸惑いながら訊いた。

「久刻くん、今すぐに懺悔しなさい」

変わらぬ口調と表情と言葉で、遙風は間髪入れずに切り返してくる。

「懺悔って……僕がか？ 一体誰に、なんの罪だよ」

「私に。……といえば、罪状は思い至るのではないですか？」

遙風はまだ仄かに赤い頬をして、上目使いに僕を睨みつける。その表情がどうということは今置いておくとして、僕には自分が糾弾される理由が理解不能だった。遙風に、僕が。謝るのは構わないが、一体何を謝ればいいのか。そもそも、それは何の代償行為なのか。意識の奥を探ってみるが、どうやら答えは見えそうになかった。「いや、なんのことだかまったく分からないんだけど」

瞬間――僕の襟元が強烈な力によって締め上げられ、下方から押し上がってきたそのベクトルに逆らえず、身体が一瞬の間宙に浮く。浮遊感の中で、確かめる必要もないことを確認してみると、僕の首元を締め上げているのは遙風だった。当たり前のように、呼吸困難。「あ、あの……遙風、さん……？」

肺に残されたわずかな酸素を使いきって、僕は遙風に呼びかける。「昨日のことです。よく思い出してください。……いえ、詳細は構いません。細部まで正確に思い出す必要はないので、曖昧な輪郭で思い出してください。くれぐれも、余計なことは思い出さないように」

言ってることが、滅茶苦茶だ。罪の糾弾なら僕にはむしろ正確な

記憶の想起を求める筈なのに、曖昧にだなんて。

……いや待てよ。

遙風の妙な態度。言動。矛盾した言動。羞恥。言い淀んで言葉を区切り。紅潮。朱色の頬。視線。合わない目。昨日。昨日のこと。懺悔。遙風への懺悔。曖昧。曖昧な記憶の想起。遙風が僕に謝罪を要求してくる事柄はなんだ。これまでに似たことがなかったわけではない。

そうか昨日は。

「かは——」

僕の心を読むのが遙風輪廻の特技であるらしく、僕が解答に辿り着いたそのとき、再び肺への酸素供給が再開された。あるいは本気で僕がヤバイ表情になっていたか。

げほげほと咳き込む僕に、遙風はなぜか微笑ましく表情を綻ばせていた。

「分かってくれましたか、久刻くん」

「ごほ……。心当たりは見付けたよ、でもさ」

でも、だが、しかし——

「僕が遙風のパンツを見たのは事故であって、つまり不可抗力だ。謝罪の必要は」

ない。と続けようとした僕は口を閉ざす。

正確には、顎を蹴り上げられて閉ざされたというべきだが……。遙風の白く長い足は運動エネルギーのあらん限りを尽くし、唸りを上げて僕の顎を蹴り抜いた。衝撃が脳天を貫き、無我の果てへと意識が飛ばされる。

だがしかし、油断大敵。遙風は自ら墓穴を掘ったのだ。

「舌は噛みませんでしたね？」

氷点下の視線が僕の眼球を抉る。全身の血液が凍りつく感覚を味わいながらも努めて冷静に、

「……………白」

「はい？」

違った。

「いや、分かった謝るよ。すまなかった、遙風。君の縞柄パンツを見てしまったことを、僕は心から反省している」

「——ッ！」

思い出しただけでも、昨日のは衝撃的だった。

これまでも何度か拝見する機会があったが、遙風がその度に今度のような暴力に訴える行動をしていたわけではない。つまり、遙風本人にも昨日のことは衝撃的事件だったということか。

耳まで真っ赤になった遙風はわなわなと肩を震わせて僕を睨みつける。反射的に防御の姿勢を取ったが、遙風が攻勢に移ることはなかった。自分の中でゲージを振り切った感情を鎮めるように目を閉じる。

「はあ……。久刻くん、あなたには呆れるばかりです。どうしてあなたは、目の前で醜態を晒している女の子から目を背けることが出来ないのですか？」

「なんです。パンツなんて男に見せるための嗜好品だろ」

「——改めて認識しました。久刻くん、あなたとは永遠に分かり合えません」

もう一度深い溜息を吐いて、遙風は俯いていた顔を上げた。

紅潮が治まらない頬で、上目遣い。瞳が潤んだように見えるのは、まさか泣いてたりしないかな？

「ちなみに何度見たのですか？」

「三回」

「……久刻くん。何度、見たの、ですか？」

「……よ、四回です」

視線で人が殺せるんじゃないか、と思わせる遙風の目は地獄の門番よろしくのそれだった。どんな凶悪犯だって最上級の秘密を暴露してしまいそうな視線に僕が耐え切れるはずがない。分かってはいたことだが、遙風を欺くのは不可能だ。

でもまさか階段を昇る際にことに気付いていたとは思わなかった。

それってよく考えたら、自覚しながらも隠そうとしなかったってことだし。威風堂々と階段を昇る遙風の姿を思い出して背筋が冷たくなるのを感じた。

「私の人生で一番の汚点です……」

がつくりと肩を落とす遙風。凜とした雰囲気萎れて、横顔は暗澹たる面持ちを隠さない。

本来そこまで落ち込むことなのか男の僕には理解が及ばないが、遙風の友人としては確かに、昨日のは遙風のイメージに合わない。意外性というかギャップというか。遙風が落ち込んでしまうのも少しくらい納得できる。

だから僕は言わなければならぬのだ。

「遙風」

「……なんですか？」

「可愛かったぞ、しましま。僕は嫌いじゃない」

「……………っ!!」

励ますつもりだった言葉は効果覿面。耳まで真っ赤にした遙風は無言で僕を非難するような視線を送ってきた。少し効果がありすぎたみたいだ。まあ、予想通りだけど。遙風は隙のない優等生のように見えて、実は普通の女の子なのだ。

やはりこっちの方がからかい甲斐があるかと再認して、僕の機嫌は朝から最高潮。今日もいい一日なりそうだと実感しながらいつもの通学路に行く。補足程度に、頭から蒸気が出ている描写が似合う遙風が僕と目を合わそうとしなかったことはいうまでもない。その後教室に着くまで僕と口を利いてくれなかった。

遙風輪廻。

規律正しく、礼儀正しい。教師生徒のどちらからも絶大な支持を受ける完全無欠の優等生。定期考査学力考査はともに毎回学年トップ。中学時代、陸上で全国大会の出場経験もあり。文武両道を体現する完璧超人。

そしてなにより——二重人格の女の子。

そんなこんながあつて昼休み。以下は余談として語られる。ちなみに、そんなこんな、というのが今朝の一件であることはいうまでもない。あの会話から遙風は一切僕を意に介さず、無視という無視を決め込んだ拳句にとつと四限目終了のチャイムが鳴った。視線さえ合わさず、ちらりともこちらを見ないから徹底している。しかしその徹底した無関心が放棄されたのは、昼休み開始の鐘と間を置かずしてだった。

ここ数週間の習慣に従つて腰を挙げ、僕が昼食のパンを買いに行こうとしたタイミング。ブレザーのポケットに手を入れて財布の所在を確認しているとき。遙風の涼やかな声が僕を呼び止めた。

「久刻くん……と、どこへ行くのですか？」

「購買。昼飯の買出しだよ」

遙風は僕の机の上に視線を落とし、そこに弁当が置かれていないことを認識したらしい。すぐに顔をこちらに戻すと、怪訝な表情で目玉を覗き込んでくる。

「確か、久刻くんはお弁当だったと記憶しているのですが。間違いだつたのでしょうか？」

「あー……それは」

僕が昼食に弁当を持参していたのは少し前までのことで、今は諸事情により購買組みなのです。という言葉を食べ飲み込んで、遙風用にと別の理由を用意していた。

「別に毎日弁当持参ってわけじゃないさ。毎朝そんなもん用意するのも大変だろ」

「驚きました。久刻くんは料理なんて高尚な趣味を持っていたのですか？」

真顔で驚いている。

「……いや、僕じゃなくて姉さんがね。言ってなかったっけ？」

「いえ、えっと……確か標月さんでしたか？」

「そ、久刻標月」

もつとも、名字は僕のものだから正式には異なる。血の繋がっていない義理の姉弟。姉さんは僕の名前を優先してくれた。そういえば本名は聞いたことがないな。尋ねることはなかったし、そもそもその辺りの事情には僕と標月姉さんは互いに触れないようにしていた。

それはそうと、今は遙風と話している最中だ。別の思考に気を割くのはいけない。

「それで、だ。遙風。てつきり今日は一日君に無視され続けるだろうと思っていたのに、一体全体なんの用だ？」

遙風は核心を突かれたという風に表情を驚かせる。知らない間に脱線していた話を僕に正されたのが気に食わないのか、コンマほどの間不機嫌顔に表情をシフトさせ口元に手を持っていく。こほん、と作り物過ぎる咳払い。

「ええ、はい。少し話がありました。昨日のことなんですが」

「なんだ？ パンツのことか？」

「ヒサトキくん？」

失敬。どうやら真面目な話らしい。

「悪い悪い。購買でなにか奢ってやるから、許してくれ」

「久刻くんは私など購買の食べ物で手懐けられる、とても思っているんですね」

なにやら……さらにご機嫌を斜にしてしまった様子だった。

「しかしまあ、久刻くんがそういうなら、折角ですので言葉に甘えましょう」

どっちなんだろう。遙風の、というよりも女性の言動というのはよくわからない。

なんにしても、僕の提案は功を奏したようで遙風の不機嫌は解消

されているようだ。どころか、むしろ上機嫌に傾斜したといつてもいい。揃って教室を出ると、遙風の歩くペースは先を急かすように早い。ぼやぼやしていれば置いていかれかねない。楽しみに髪を揺らしながら進む遙風の表情は残念ながら窺えなかった。

そして購買に到着。

我が校の購買の商品は一部を除き日替わりである。おばちゃんが試験的に新商品を生み出したり、廃止したり。毎日通っていても飽きない工夫だというなら、間違いなく大成功だろう。他の高校のことは知らないが、主観的に見てこの購買の客入りは多い。蠢くように犇めき合うように、商品を物色する人の群れが今日もまた軍隊よろしく群集している。

「ストロベリータルト」

「すとりべりー……なんだって？」

凜と背筋を伸ばし、鋭い眼光で僕を射抜きながら遙風は悠然と言いつ放った。いやいや、そんな単語ぶつ切りで言われても、と思った僕は瞬時に戦慄した。轟然と燃える闘志を宿した瞳が、揺ぎなく僕を見据えている。

啞然としていた僕はだらしなく開きつ放しの口を閉じ、目の前の光景を直視した。

そして。

今日一番の真剣な剣幕が、そこにあった。

「行きましょう……久刻くん。戦いは既に始まっています」

「遙風、ここは購買だ」

「違います。ここは既に――戦場です」

「……」

「賽は投げられたのです。さあ、行きましょう！」

とととん。小気味いいステップ。爪先がリノリウムを打つ音が響く。

遙風は背中に流した長髪を、ポケットから取り出したゴムでポニテールに変形させた。それが、戦闘準備完了の合図だったのかも

しれない。ステップを確かめるように一定のリズムを刻んでいた脚が止まり、視線を落としていた遙風の顔が前方を向く。

横顔だけで分かる。

遙風は間違いないく、これから死地へと赴く騎士の心境だ。

「あの……遙風さん……？」

気合や闘志というには既に強大過ぎる遙風の気迫は、差し詰め戦場に立ち込める殺気。一般小市民である僕など空気も等しく飲み込み渦巻く。呂律が上手く回らないのは、僕が完全に気圧されている証拠だった。

「行きますよ、久刻くん」

数十の叫び声が入り混じる昼の購買。誰もが勝利をその手にと自らを叫し、ここに必勝を謳う。己が勝利の為に仇なす全ての敵を切り捨て進む、狂乱の戦士達。流れる鮮血も、轟く絶叫も、ここでは全てが無為に等しい。

戦場にある希望は唯一つ。栄光という名の一つの勝利。その輝きを掴むために、誰もが命を削り、死力の限りを尽くして前へと進む。一步、また一步さらに前へ。向かい風も乗り越えて、屍の丘を踏み越えて。

遙風輪廻は、この瞬間一人の戦士——気高く嘶く栄馬を駆り、目に映る全ての敵兵を切り裂く常勝の騎士だった。……それはいい。遙風が本気を出して群衆に臨むのは構わない。けれど、少しは考えてみて欲しいものだ。

君に手首を掴まれ、限界を超えた速度に引き摺られながら人と人との間で摩擦される僕のことを。

「痛い痛い痛い！ 痛いって遙風！ ちょ、ストップ！」

「喋らないでください。舌を噛みますよ」

引き千切れそうな腕の激痛に耐え、僕は思う。

遙風輪廻、君はなんて『食欲』に忠実な女なんだ……。

はこなき バスル

箱崎外流という名前をした後輩にして現陸上部のトップランナーは、校舎周りをランニング中に僕の姿を視界に捉えるなり何の迷いも躊躇いもなくランニングコースを変更してこちらに向かつてきた。と言え、下校しようとした僕が偶然にもばったり部活に勤しむ後輩と遭遇したように聞こえるが、現実はそのではない。完全に箱崎が僕を待ち伏せていた結果だった。

理由の方には残念ながら心当たりがある。だからこそ下靴に履き替え、エントランス前で楯円を描きながら疾駆する箱崎後輩の姿を認めるなり下駄箱の影に身を潜めたのだが、厄介なことにこの後輩の空間把握能力は狩猟前の肉食獣に等しかった。

不吉極まる喜色満面で僕のもとに駆け寄る箱崎の、その澆刺過ぎる笑顔が作り物だと見抜くの呼吸ほどの手間も掛からない。背筋を伝わる嫌な汗の報せである。箱崎が僕に向かって微笑み掛けるなど、天変地異の前触れでなければただの死亡フラグなのだ。

半ば呆れるようにして言った。

「こんにちは箱崎。今日はまたずいぶんと機嫌がいいみたいだな」
「そう見えますか？ さすがは久刻先輩です。ボクの心なんてお見通しなんですなっ」

にこにこ。なにがそんなに楽しいのだろう、本当に。

顔の筋肉が完全に緩みきってべったり貼り付いた笑顔が消えない箱崎に僕は続けた。

「はは、僕ほどの人間になれば君の心の中なんて簡単に覗けるのさ」
嘘だった。

「あっははー」

箱崎は独特の笑い声を上げてから、

「だったら、久刻先輩にはボクの言いたいことなんて口に出すまでもなく分かりますよね？」

「ん？ なんだ」

「ばあ、と一層箱崎の表情が明るくなる。ごく自然な動作で一步前に出ると、僕との距離がそれだけ縮まり見上げてくる首の角度が急になった。そして上目遣いに僕を見、久刻先輩、という甘い声の囁きがして、

「死んでください」

「なんでだよ！」

「いや、まあ、こいつが僕に笑顔を向けてきた時点でこのオチは予想していたのだけど。」

「あれ？ 久刻先輩ならボクの心なんて簡単に読めるはずですよ。ボクのは笑顔は不機嫌なほどに輝きを増すんですよ。今の気分はつまり最悪です。先輩、殺戮していいですか？」

箱崎は相当ご立腹であるらしい。見上げてくる笑顔に背筋が凍る感覚は、遙風の逆鱗に触れてしまったときのそれに似ている。……ふ、腕を上げたようだな箱崎。

「……と、ボクだってバカではありません。この国には法律があって、殺人は違法です」

「ほう、どうやら君にも常識ってものが分かってきたようだな」

「ボクにだって先輩には法を犯してまで殺害する価値などないことくらい分かっています」

「ははは、面白い冗談が言えるようになったな箱崎」

出来るだけ箱崎の暴言に耳を傾けず、胸の辺りにある頭を撫でてやった。

「触らないでください暴漢」

「言うようになったな。これも一つの成長か」

「触らないでください童貞」

「な、なんてことを言いやがるんだお前！」

「だ、誰か来てください！ 先輩が！ 久刻十字先輩が私に——あ、

やあ！ や、やめてください先輩！ や……っ、ダメ！」

「止める！ マジで誰か来たらどうする気だよ！」

こいつ！ この事態を予測してさっき一步接近してきていたのか！

後ろに飛び退いて距離を取ろうとする僕の袖を、箱崎はがっちり掴んで離さない。

「いや……っ、ダメです先輩！ そんなもの仕舞って下さい！ これ以上はもう……やめてください」

「お前が止める！ ……あ、いや、止めてください。ほんとお願いします箱崎さん！」

物凄い勢いで年下の女子に謝る僕だった。袖を掴まれているために大幅な体勢の変更が出来なかったことが僥倖か、膝をつくことまではしなかったのだが。可能ならそれさえ辞さない勢いであったことは否定できない。惨め過ぎるそんな先輩男子を、箱崎後輩女子は勝ち誇るようなほくそ笑みに軽蔑の眼差しを上乗せして睥睨していた。騒ぐ様子はない。その事実にあ堵している自分が嫌だった。

ふう、と吐息してから箱崎は僕の袖を解放する。

嘲笑う表情が崩れて呆れの感情に移り変わり、箱崎は腰に手を当てて首を左右に往復させてから再び僕を見た。その視線がやけに癢に障る。やれやれと言って箱崎は、

「臆面もなく後輩の女子に頭を下げるんですね。ボクは失望しました。久刻先輩はもっとプライドや自尊心というものを大切にすべきです」

「……………」

「はあ……。なんだかもう、ボクは久刻先輩が分からなくなってきました。いえ、初対面から同じ人間ではない気はしていました。それでも脊椎動物というくくりの中においては、同じ生物だと思っていたのですけどね。それさえも買い被りでしたか……」

今日この瞬間をもって、箱崎にとっての僕が無脊椎動物と化した。「多感なお年頃で自身の感情を抑えきれないのは分かります。もはや欲求を一人では処理できないというのも分かります。ですけど」

とつとつと呟くように続け、憐憫を湛えた瞳でこちらを見上げる。「いくらなんでも、学校のエントランスで後輩の女の子を襲うのは人格を疑いますよ」

「僕はお前の人格を疑うけどな！」

「おっと。無脊椎動物相手では人格という表現は正しくありませんね」
「答える箱崎、僕が何をした!？」

常日頃から非道の極みの暴言で僕を罵倒する箱崎だが、今日は度が過ぎていた。言葉に容赦がない。僕の人間性が乏しめられている気分だ。なんだか僕自身、久刻十字は本当に無脊椎なのではないかと思ってしまうほど。

「ふう。さてまあ、冗談はこの辺りにしておきましょうか」
冗談だった。

僕の人間としての尊厳が取り戻される。

「本題ですが久刻先輩」

「なんだ？」

「死んでくれますか？」

「また繰り返すのか!？ 今のやり取りを初めから！」

「触らないでください無脊椎童貞」

「微妙に変化している!？」

「ところでですね、久刻先輩」

これまでと変わらぬ口調で箱崎が言う。三度目の循環を予想して反射的に身構えたが、次に箱崎の口から出た言葉は予想に反してまともなものだった。

「久刻先輩の今日のお昼休みの行動について、詳しくお話していただけないでしょうか」

至って真剣な眼差しで僕を見上げ、僅かにトーンを落とした声。

箱崎外流が訊いてくる。

今日の昼休み。という僕が遙風と共に戦場、もとい購買を馳せていた頃で——と、思考がそこで急停止する。加えて僕はなるほどと事の次第を理解する半面で、やっぱりそうかと呆れるように納得するというおかしな胸中を味わった。

「遙風と購買行って、中庭で弁当を食べた」

誤魔化す気はないので包み隠さず伝える。すると箱崎はため息混

じりの吐息をし、

「やはり、あれは久刻先輩だったんですね。実は偶然ながらボクもお昼休みは購買にいたんですよ」

「それは偶然だな」

本当に偶然であるかは分からないが。話を合わせるように僕は相槌を打つ。

「いやあしかし、久刻先輩でよかったですよ。遙風先輩と手を繋いでいるものですから、うつかり蹴りを入れてしまったので。でも久刻先輩なら問題ありませんよね？」

「そうか……犯人はお前だったんだな箱崎外流……！」

ずきり、と右脹ら脛が痛むのを僕は確かに感じた。何がうつかりだ。確信犯に違いない。

思い出したことで患部が再び痛み出すのに耐えながら、僕は表面上を冷静に装う。

「それにしても箱崎、お前って本当に遙風信者なんだな」

「それも今更ですね。ボクは遙風先輩に全てを捧げるためにこの高校を受験したのですよ」

筋金入りだ。

箱崎は至って本気表情。残念ながらそれは見た目だけではなく、おそらく心中もなのだろう。

遙風信者こと箱崎外流。高校の志願理由は本人曰く遙風の追っかけであり、その行動の全てが言葉に即している為に嘘は言っていないと推測できる。詳細は聞いたことがないが、当時別の中学に通っていたながらも地方の大会で遙風の走りを見た箱崎は一目に心を奪われたという。

そう、文字通り心を奪われたのだ。

走る速度に魅了されたとか、そういう意味ではなく、人間として完膚なきまでに惹かれてしまった。

端的に言うなら。

箱崎は遙風に恋をしてしまったのだ。

「……………」

何だか自分で自分の独白が嫌になってきた僕は、そこで思考を停止した。

「どうかしましたか、久刻先輩？」

きょとんとした箱崎が小首を傾げた。

「いや、なんでもないよ」

「そうですか」

本当はなんでもなくないのだが。重ねて言うておくと、箱崎は女である。

しかしながら人にはそれぞれに想いの形というものがあるのだから、他人である僕がとやかく言うこともまた出来ない。関係のないことでもある。遙風が特に迷惑しているという訳でもないのでも——あくまで遙風は。おかげで僕は被害を被り続けている——好きにすればいい。

「本当に、つくづく分かりません。どうして遙風先輩はそう、執拗に久刻先輩なんかに構っておられるのでしょうか。日当たりの悪い位置に生えている雑草を、そっと日向に植え直しているようなものですね」

「……なあ箱崎、これで何度同じことを言うか分からないんだが」
箱崎の嘆き（罵倒含み）を無視して、

「いい加減僕に付きまとうのは止める。心配しなくても遙風と僕は友人以上の関係ではないんだよ」

遙風によれば友人未満と認識をされているレベルなのである。

「ふむ。確かにもう何度目か分からない台詞ですね。しかし、それもまあ今なら少しだけ信用してもいい気がします。……いえ、信用と言うより信憑ですか。久刻先輩の言葉に少しだけ説得力があります」

「なんだ、聞き分けがいいな箱崎。長いこと同じことを繰り返して良かったよ。半年もあれば人は分かり合えるものなんだな」

「ご冗談を。ボクと久刻先輩は永遠に分かり合えなどしませんよ。」

言わば、ボクが実数なら久刻先輩は虚数です」

二乗したらマイナス箱崎になるらしい。

「ボクはですね、自分が直接見たものや聞いたものしか信用しません。——だから昨晚、久刻先輩が他の女性と仲良くしていた様子を目撃して、先輩の仰ることも案外本当なのではないかと思い始めた次第です」

……なんてことか。僕としたことがとんだ失態をやらかしてしまっていた。昨日放課後に会話した、あるいは周囲から見ても仲の良く見えるような状況を共にした女子は二人。遙風輪廻と天門坂一月だ。ということはつまり、箱崎に僕と天門坂がいつしよにいる場面を目撃されていたことになる。

構わないんだけど、問題はどのシーンを見られていたかだ。箱崎の語る口調からして、よもや関節を決められた上に首にナイフを突き立てられている様子を見られていたわけはないにしても——あれ。思いも依らぬところで思考が中断される。待て。箱崎が僕を見たのが仮に災害跡の瓦礫路地地として、たとしたら箱崎もまたスプラッタな死体を発見していることになるではないか。態度を見る限りではそんなものは見ていないようなので、だとしたら、どこで僕らの姿を見たというのか。天門坂曰く、僕はあの後間もなく意識を失っている。何とか記憶を辿って思い出せるのはあの瓦礫の上で——

「箱崎、お前どうして夜中に旧都なんかにいたんだ？」

当然の結論として行き当たる。災害跡地。今や瓦礫の街たる旧都に夜、脚を運ぶ理由が見当たらない。

「ぎくっ……です」

箱崎はあからさまに怪しい擬音を自分で口にするこれは何かある。間違いない。箱崎外流は黒の星だ。

「い、いえまあ、なんというかですね、夜のランニングに出掛けていたんですよ。トレーニングは欠かせませんからね。あつはは——」
本当になんでもないですよー！ と両方の掌をバリアーみたいにして必死に訴えてくる。パントマイムで見えない壁を拭いている

ように高速でワイパーの運動を繰り返す小さな掌。……たまにこんなことをするから、こいつは可愛くて仕方ないんだよな。ませてるのかそうでないのか。

今日のところは、ではそんな目に優しく心暖まるハートフル箱崎に免じて先刻までの無礼を許した上でさらに言及なしのお咎めなし、寛大な久刻十字先輩からの特別大サービスで忠告を一つくれてやる程度にしておいてやろう。

「分かったよ。そういうことで構わない。でもな箱崎」

今から自分の言おうとすることに今朝を彷彿する。あの地から、天門坂一月が久刻十字を遠ざけようとしたように、僕もまた彼女に倣うようにして、

「これからは旧都には近付くな、あの辺は結構危ないから」

「……はい？」

「それに知ってるだろ、近頃流行りの失踪事件。夜はこの田舎も物騒だからあんまり夜には出歩かないこと。——これは後輩思いの先輩がしてやる、有り難いご忠告だから忘れるなよ」

ぼかん、とまだこちらの言っていることが理解できない風な箱崎後輩。いいさ、今はそれで。必要以上のことなんて知らなくていいのさ今はまだ。少しでも僕の忠告を守る気になってくれれば幸いだ。だって、いくら生意気だとか言っても自分を先輩と呼ぶ人間に殺人の現場なんか近付いて欲しいとは思わなくて当然だろ。

じゃあな、と簡単に別れの句。それを最後に僕はエントランスを出る。

夕日が綺麗に輝くオレンジ色の空。時刻は夕風とか呼ばれる頃合い。深呼吸を一つして、不意に見つけた飛行機雲の先をなぞってみる。それに飽きたら歩き出すとしよう。

目的地は勿論——旧都、災害跡地だ。

瓦礫の城、廃墟の街。そんな風にキャッチフレーズでここを親しんだことはないのだが、突発して閃いたにしてはまあまあセンスを秘めているのではないか。そう考えて今一度頭の中でそれを反復してみると自分が意外と恥ずかしいことを思考していることを思い知らされた。てなわけで没。これからも僕はこの瓦礫に埋もれた旧都を災害跡として認識し、またそのように呼称するだろう。愛称なんて必要ない。……うん、ないな。

埃っぽい廃墟の隙間を練り歩く。昼と夜と夕方で見えてくる景色が丸切り違ってくるから、ただでさえ迷路染みて入り組んでいるというのに訪れる時間帯まで異なってしまうえばそれだけで目的地まで正確に脚を運ぶことは困難を極める。昨日と同じ位置を目指すか、はて先日はどんな道程を経て辿り着いたのだろうか。アリアドネの糸を用意しておくべきだったかもしれない。

これはちよつと埒が明かないな、とか思つて気晴らし気分首を上方に傾けると、

「……アンタ、何してんのよ」

その不機嫌な声が頭上から落ちてくるのは同時だった。

誰の声かなど思考するまでもなく、僕は視界に捉えた彼女に軽い挨拶を送る。

「よ、天門坂。やっぱりここにいたんだな」

とことん仏頂面の天門坂一月と、あくまで軽薄に装う久刻十字。

二人の対照的な態度と視線が交錯する夕方の頃は、この瓦礫の上に登れば遙風もお気に入りあの絶景が拝める時折。雅な赤い世界を臨める位置にいらしかし、天門坂は影の下界を見下ろす。

「ここには来るなつて、言わなかった？」

ややあつて、非難の声が降ってくる。天門坂は長話になると判断したのかその場で膝を折り、長い脚を組んで廃墟の上に座り込んだ。……際どい。もう半歩前に出ればあるいは、この視界は神秘の領域に到達するのではないか。畏れ多すぎるので自重しておくが。

さてあれ、余計な雑念を振り払い毅然と答える。ここで退いては

負ける気がした。

「かもしれない。でもさ、僕だって頷いた覚えはないぜ。天門坂、悪いがこの件から手を引けっただってそれは無理な相談だ」

「……あっそう。言葉じゃ説得できないってことね。呆れた、もしかしてアンタバカなの久刻くん？」

「……だったらどうするつもりだよ」

聞くまでもなく、彼女の實力行使がどういったものかなどつい昨日経験済みである。再生される優雅で流麗な殺人技。闇を滑走し風を薙ぐ銀の光。目の覚める一閃。一撃で戦闘意欲を削ぎ落とし、二撃で命を奪い去る。それは実に鮮やかな剣の舞い（ブレイドダンス）。死神の鎌が降り下ろされる、見る者を魅了する戦慄の一閃。

知らず身構えていた。幾ら天門坂の運動神経が優れていようと、来ると分かっていたれば攻撃を回避できない程ではない。昨日とは違って視界は良好。背後からの不意打ちも有り得ないので、これは地の利を得ている僕に分がある勝負だ。

「そっか。分かった。言葉でダメなら体に教えるしかないみたいだから——これが最後の忠告よ、久刻十字くん」

「……聞こうじゃないか」

「もし、どうしてもこちらの要求に頷く気がないなら」

何故か、目を細めた蠱惑的な顔をして、

「足を組み替えます」

「な、なんだって!？」

解ける緊張感。弛緩する空気。僕の中の戦意は消え失せ、臨戦の覚悟は遥か彼方。代わりに沸き立つ邪な感情に流される理性が、消えていく代償として久刻十字を内側から斬り付ける。

「待て! 落ち着け天門坂、気は確かか!」

「これほどにないくらい確かだけど。で、どうするの? まだ逆らう気?」

するり。組まれた脚が僅かに動く。デッドライン。ある意味で可視状態よりも破壊的な扇情的姿を頭上にいる同年代の少女が晒して

いる。それだけではない。彼女はその全身を使い、身に纏う覇気を利用して言葉を介さずに訴え掛けてくるのだ。——この先に行きたいのなら早く頷きなさい、と。但し拒否をしたらその時は、樂園は永遠に手の届かない所へ過ぎ去ってしまう。

焦らすように、また天門坂が脚を揺らした。破裂寸前の理性。今朝の食事など比ではなかった。一秒おきに人として大事な何かが擦りきれていく気分だ。早く、早く答えを口にしないと。このままでは何もかも失って空っぽになる。

まだここに、久刻十字が残留する間に——確固とした意志を繋ぎ止め、言葉を紡ぐ。それは希望を放棄する、樂園への切符を捨て去るキャンセルの一言。胸を張って、己を強く持ち、言い放つ。

「お断りだ天門坂——！ そんな誘惑……いや、挑発に僕は決して乗らない！」

右手で宙を切り裂く。

いいんだ、僕には、遙風がいるから。……本人に聞かれたらドロップキックをマッハで見舞いされそうな、自分への慰めがそれだった。だってやっぱり惜しいじゃん。これが悲しい男の性さがなのである。

「……なんか、物凄い葛藤を経たような顔ね」

呆れている。天門坂は呆れている。

「……そっかあ、ダメか。ね、久刻くん？ わたしだと……嫌なの？」

かは……！

ちょっと待った！ そのしおらしい態度はなんですか天門坂さん！
「久刻くん、わたしの、見たくないの？ ……本当はね、もっと色々見て貰いたかったんだ。……こんなこと、誰にだって言う訳じゃないのに。久刻くんだから……なんだよ？」

致死量。もう止めて。これ以上は本当に駄目です。その紅潮した頬とか、ちょっと涙目になりながら横目でちら見する仕草とか、耐えられません。鋼の精神を溶解させる、あどけなさを残す魔の美貌。

無論作り物であることは容易く看破出来る。だが、しかし、人の視界とは目に映るものしか捉えられず、精神はその映像をダイレクトに刺激として受け取ってしまうのだ。

久刻十字の崩壊五秒前。

緊急回避。天門坂から目を逸らす。これ以上はダメだ。僕が僕としてあるために、これ以上は危険過ぎる。シャットアウトする景色。伏せる視界。固く瞼を閉ざす。とん、と軽やかな音が一つ。意識の外に転がった。安定を取り戻していく心拍。理性が正常に再起動。ひゅん、と滑らかな音。——微かに感じた、冷たい殺意の風。

「で、答えは久刻くん？」

大至急目を開けるが、当然既に遅過ぎる。目前には凶刃をゆらりと構える少女の姿。

愚かだったことは、一度死地に踏み込む覚悟を決めていながら天門坂に惚気てしまったこと。眼前の死神を人間と認識してしまったこと。そう——元来魔に属するモノは必ず、人間をペテンに斯けて魂を回収するのだ。

それは昨日の再現だった。

懲りもせずにもたまたま突きつけられる、冷酷な死の切っ先。身の竦む一触即発。

「もう一度言うわよ。それと、付け加えておくけどこれは交渉じゃなくて命令。約束して、もう二度と——いいえ、せめてわたしが犯人を見つけ出して始末するまで、ここには現れないで」

脅迫。……違う。命令だなんて言っているが天門坂は独裁君主になりきれていない。その態度は相手を完全に支配した者の取るそれではなかった。言葉の機微から窺える。これは天門坂の懇願。この地にはやってこないでくれ、と誠心誠意からの願い。

「これ以上、わたしに関わらないで」

何がそこまで彼女に頑なな拒絶をさせるのか、僕には分からない。だが分からないなりに伝わる真摯さもまたある。理由は知れずともそれは混じり気のない本音。一切合切を否定したいと、遠ざけたい

と願う切実な思い。

「……答えてよ、久刻くん」

ナイフが音を立てて、肌に触れた。冷たい。大気の冷えを吸った鉄の刀身が、血液を介して温もりを得ようと静かにその時を待つ。まだ、血は流れていない。けれどこれが本当に最後で最後。言葉通り首の皮一枚。切り裂くにはほんの少し、微風ほどの摩擦で十分。

状況は完全に詰んでいた。全く昨日と同じだ。

確かに天門坂の言う通りこれは命令かもしれない。交渉であったとしてもこちらに選択肢が一つしか用意されていないのならそれは拒否を許さぬ絶対令だ。命と秤に掛けて。彼女の懇願を掃き捨てるか。突き詰めれば生死の選択。

僕は。

久刻十字は言った。

「言ってるんだろ……お断りだよ」

何度問われても答えは返られない。頑になる理由なら、こっちにだってある。

そうだ。自らの命と秤に掛けて尚、尊いモノがあった。だから僕は何度だって答えよう。断じて否。天門坂が何度跳ね除けようと構わない。僕はこの件から手を引けない。それは、今ここにある自分の存在意義を破棄することと同義だから。

「……悪いな、天門坂。僕だって犯人には恨みがあるんだよ、だから引けない。お前の言うことには領けない」

これが連続殺人だというのなら、
「僕も、姉さんを殺されてるんだよ」

二週間前。久刻十字の命を救ってくれたその人は、忽然と姿を消した。——それがこの猟奇殺人に依るものだとしたら僕は、どうあっても引き下がる訳にはいかない。例えこの身が破滅しようと構わない。ただ二度と帰らない久刻標月の残像を空想し続けるだけならば、よほどそんな存命の方が無駄だ。

「……本気で言ってるの、それ？」

天門坂は、低い声で訊いてくる。だがそれは質問ではなく嘲笑で、苛立ちを含んだ憤怒の声。お前の命は自分が握っているのだと、高圧的に威圧的に警告する言葉。

僕は答えず、黙って天門坂を見据えて。蒼の瞳が静かな侮蔑でもって憎悪を隠そうともせず睨み返してくる。言葉は要らず、交錯する視線だけがこの場における絶対の意思疏通。互いに互いの用件を拒絶し合う沈黙の拮抗。

「…… かったわよ」

先に目を逸らした天門坂が憎々しく吐き捨てた。

「バツカじゃないのアンタ……！ もういい勝手にしろこのバカ！」
激昂しながらナイフを下ろす。

「信じられない、ほんと。……… まあいいわ。そこまで言うなら協力関係を認めて上げてでもいい。だけどね——冗談じゃなく、アンタ本当に死ぬかもしれないのよ。それだけは覚えときなさい」

「…… 分かったよ。ありがとう天門坂」

不覚にも苦笑してしまう。怒って怒鳴り散らす天門坂の姿がこれまでになく何だか幼く見えてしまい微笑ましかったからだろうか。いや、これはあれか。遠く感じていた天門坂一月が少し自分に近くなった気がして嬉しかったんだ。

「お前さ、僕にお人好しだって言ったけど、そのまま天門坂にも返させて貰うよ」

「……」

「だってさ、僕のこと心配してくれただろ」

天門坂は答えず、静謐な瞳で冷ややかにこちらを見据えていた。どうやら扱いを間違えたらしい。かと思ったら、

「勘違いしないでよね、別にアンタが心配な訳じゃない」

王道中の王道。その手の鉄板にして代名詞のような台詞を口にする。

が、しかし。

後に続けられる言葉は照れ隠しなんて可愛らしいものではなく、

静かに揺らめく怨嗟の意志を燃やした紛れもない本心からの、

「言つたでしょ。わたしは貴方を憎んでる。殺したいくらいにね。」

——だから、わたしに殺されても文句は言わないでって、最後通告をしたまですよ」

一線。境界を隔てるその一言が両者を別つ。揺るぎない瞳での拒絶が、それを告げた。

中々どうして全く。

こいつを理解出来る日は果たしてやってくるのだろうか。一抹の不安がいつか一縷の期待に変わることを願って。今は協力すると言ってくれた彼女を信じよう。

/ ?

/ 3

それは語られることのなかった幕間。

ある少女の物語を垣間見た、少年の記憶。

*

天門坂一月に殺されかけた翌日の、また別の意味でも殺されかけた朝から時刻は時計が半分回って昼休み。遙風が本題、つまり本来僕らが昼食をとにもする理由であるところの話題を持ち出したのは、購買での激戦が終結を迎えた後だった。この際だから戦況を回想したりはしないが、否応に痛む全身と疲労困憊した心身は筆舌に尽くし難い戦の経過を物語って自重しない。明日の筋肉痛は間違いないし、加えて右脹脛が異常な痛みを訴えている。人込みに揉まれている途中、誰かの膝なり肘なりが入ったのだろう。

僕達は中庭にある何期生かが卒業前に作っていた木製ベンチに腰掛け、僕は自販機で買ったパックのコーヒ―牛乳を、遙風は正しく戦利品のタルトを片手に食後の緩やかな時間を過ごしていた。

「天門坂一月のことですが」

青空を仰ぎながら僕がパックの中身を吸い上げていると、遙風が唐突に切り出した。

穏やかな陽気に眠気を催していた僕はその一言で意識を元の場所に戻す。遙風は、両手でタルトを持ったまま僕を見ていた。

「話すのはやぶさかなのですが、どうしてそんなことを尋ねるのが理由を聞かせてはくれませんか？」

「理由……ねえ。それは聞かない約束をしたと思うんだけど」

「約束をしたのは昨日の私です。言っただけですよ。私達は同じ遙風輪廻ですが、完全に別離した人格だと。彼が結んだ協定を私が守る必要はありません」

不可侵条約は意味を成さないということが、ここに明言される。

これは弱った。昨日の遙風は大雑把な性格だから深入りや詮索したりはしてこないのだが、この遙風は繊細にして几帳面な性格だ。誤魔化そうにも僕では天下の遙風を欺くことなど出来ないし。肩を竦めて苦笑。僕は言う。

「男子が女子を詮索する理由を、遙風、昼下がり前の女の子に話せると思うかい？」

「……それはつまり、不純な動機があるということなのですか？」

不純な動機、とは。これはまた随分な表現ではないだろうか。

遙風は唇を固く結んでしまい、やや自棄になった様子でタルトにがつついた。荒れ狂う戦場を駆け抜け、多大なる犠牲（僕）を払って手に入れた至高の一品を半分ほど平らげる遙風。口の中でそれを咀嚼嚥下し、残ったタルトを睨みながら、

「不愉快です。とても。とても不愉快です久刻くん」

「僕が女の子を気にすることが、君にとってそんなに気に食わないことなのか？」

俯き加減の視線が鋭く振り上げられ、槍の勢いで僕を穿った。

「このタルトが美味しく感じられなかったことが、不愉快だと言っているんです！」

「あ、口元、ほら。クリーム付いてる」

慌てなくてもタルトは逃げないだろうに。冷静な遙風にしては珍しい姿だ。

僕が遙風輪廻と過ごした時間は、実に半年ほどである。一年次はクラスが違っていたし、中学の頃の遙風なんて知りもしない。今年

の四月にクラス替えがあつて、五十音順に割り振られた座席で僕の前にはいたのが遙風だった。きつかけなんて覚えてない。その程度の関係。別段特別な関係とは言わないでも、僕にとって彼女が平均以上に好意を抱いている友人であることは間違いない。

故に。

遙風の様子が異常だと感じ取れることは、呼吸も同然に容易かった。

「よし、オーケー。まずは落ち着こう遙風。ほら、深呼吸」

「すー……………っはー」

案外素直だ。目を閉じてする本格的な深呼吸だった。流石はもと陸上部といったところか、やけにその姿が様になっている。断つておくが、僕は決して動作のたびに緩やかな上下運動を見せ付ける胸部を見てなどいない。

目を閉じたままの遙風に僕は問いかける。

「落ち着いたか？」

「……………ええ、はい。ある程度は、お陰様で」

「それじゃあテスト。君のご主人様は誰でしょう？ ヒントは、目を開けて最初に見えた人だ」

ゆつくりと、閉じた瞼のシャッターが上がり遙風の瞳に僕の姿が映し出された。

「……………久刻、十字」

「あれ？ 遙風輪廻、君は自分のご主人様を呼び捨てにするのか。それはまた不躰な話だな」

「ご、ごめんなさい……………ご主人様……………」

「なんだ、やれば出来るじゃないか」

催眠術にでも掛かった感じで僕に従う遙風。

「それじゃあ『行つてらっしゃいませ、ご主人様』とでも言うてみようか」

「……………」

「ほら、どうしたんだ？ 早く——」

「逝つてらっしゃいませ、ご主人様」

にこり。向日葵みたいな笑顔が遙風に咲く。

だがその笑顔は直視した者を骨の髄まで氷付けにってしまうほどに冷たい、氷点下の冷笑だった。

なんだか、様子が可笑しくないか……？

「いや、遙風、それはなんだか違う気がするんだが……。もっと、なんていうだ——」

「お還りなさいませ、ご主人様」

「ごめんなさい！ 調子こいてすいませんでした！」

僕は謝った。ベンチから飛び跳ねるようにして、今にも土下座に移行しかねない勢いで。周囲の生徒達から注目を浴びることなどお構いなしに、天まで届けとばかりの大音声を響かせて。僕の醜態を見た生徒達に告ぐ。後学の為に覚えておくといい。これが、身から出た錆だ。

顔を上げると遙風の冷笑は収まっていたが、冷ややかな侮蔑の視線で僕を見下す瞳は健在。それは自分とは違う何か、ケダモノでも見ているように非難や嫌悪を孕んだ眼光が僕の全身に向けられている。やめろ、溶ける。

「久刻くん、言って御覧なさい。誰が、誰のご主人様か」

「は、はい！ 久刻十字は遙風輪廻様の奴隷でございます！」

「では、私の靴を舐めなさい」

「はい！ ご主人様！」

僕は遙風の靴に両手を沿え、ゆっくりと持ち上げて口元に近づけた。

そこで、

「久刻くん」

「はい！ なんてございましょうかご主人様！」

「空気を読んで下さい」

「……」

それを言われてしまったら、お終いじゃないだろうか。

返す言葉もなく固まった僕を見下ろす遙風は、依然として掴まれ

たままの脚を定位置に戻す。やれやれとばかりに溜息を吐き出して、その表情はより一層憂いを含んだものに变化した。

「先に取り乱したのは私ですが、久刻くんのそういうところは改善すべきだと思います」

もつとも過ぎるが、悪乗りしたのは遙風、お前だぜ？

僕は地面に突いた膝を上げて、また遙風の隣に腰を下ろす。今度は僕が深呼吸をして空気と気持ちをリセット、清浄化した。おふざけなし。話を振ったのは僕の方で、遙風は貴重な時間を割いてまで僕に付き合ってくれている。ならば、これ以上昼休みを無駄に過ごすのは無益でしかない。時間は永遠ではないのだから。

さて――前置きが長くなったが、ここからようやくにして本題だ。遙風はまず一度重たい口を開いて息を吐き、俯き加減僅かばかり瞳を細めて話し始めた。

「先に断っておきますが、私に話せるのは『天門坂』についてです。残念ながら、『天門坂一月』という個人については話せることがありません。勿論、まったくないというわけではありませんが。それは久刻くんにとって既知の情報だと思うので割愛させていただきます。よろしいですね？」

早口に言った遙風に首肯。分かりました、と遙風は頷いて話を進めた。

「有り体な言い方ですが、天門坂という家系はこの街で最も旧く巨大な家系です。知ってましたか？ この街も昔は殆どが天文坂の私有地だったんですよ。まあ、それはいいでしょう」

遙風はそこで一度言葉を区切った。間を置くというよりも自分の中で次の句を発する心構えをしているような、そんな沈黙。さっきほど大袈裟ではないが、小さく深呼吸もしている。

ややあつて、遙風が言った。

「――天門坂の家系は既に途絶えています」

「……なんだって？」

まったく言っていないほど間を空けずに僕は問い返す。

「ちょっと待った、遙風。途絶えた家系って言っても、現に天門坂姓の人間がいるじゃないか。それじゃあ矛盾するだろ」

天門坂なんて名字、そう頻繁に見かけるようなものでもない。この小さな町の中で天門坂と言えば、きっとその姓を持つ家系は一つしかないだろう。それが途絶えたというのならば、僕達のクラスメイトである天門坂一月は一体何者かとそういう話になる。

一人内心で動揺している僕の心中を読み取ったように——というよりその疑問が発生することを初めから予想していたと言わんばかりに、遙風は直ぐに答えを寄越した。

「途絶えたと言っても、根絶やしになったというわけではありません。大きな家系ですから、分家は今でも生き残っています。とはいえ、正統な意味での天門坂は事実として終わったのです」

意識して見ないようにしていたのだろう、校舎の遙か上空、あるいはそれよりももっと遠くのどこか果てに向かっていた視線が僕に向けられる。正面から大きな瞳が僕を映し出して、瞬きさえもなく遙風は告げた。

「天門坂本家は、七年前に屋敷ごと全滅しました。——この意味が分かりますか？」

遙風は僕を見ていた。表面的な意味ではなく、内面的な意味で。これまでは呼吸も同じく読み取っていたであろう僕の心象を、今回は特に注意して逃すまいとするように。僅かな漣も見逃さず捉えようと、心の深い部分まで視線が突き刺さる。

七年前。この町に住む者なら否応でも脳裏に思い描く、あの夜の震災を。真紅に染まった地獄に等しい滅びの世界を。絶え間なく夜空に響き渡る断末魔の嗚咽を。

炎に身を焼かれ、廃墟の下に埋もれ、降り注ぐ瓦礫に押し潰される人々の姿。

死後の世界があると仮定するなら、地獄という概念に形があるとするならば間違いなくあの夜は地獄そのものだっただろう。

黒煙が支配する空。終焉無き煉獄を照らす金色の月。

その全てに一切の救済はなく、それらはただ無慈悲にこの街の終わりを見下ろしていた。

瞼の裏に描いた絶望の具現を消し去って、僕は今日の晴天を見上げる。

「震災、か。天門坂の屋敷もあつち側にあつたわけだ」

「はい。では天門坂本家がどうなったかを想像するのは容易でしょう？」

容易どころじゃない。想像するなんて行為自体が無駄だ。

僕ほど頻繁に災害跡地を訪れていなくても分かる。直観は直感よりも尚鋭利に人間の脳に切り込み、真理として記録されるのだから。見渡す限り一面の廃墟。瓦礫に埋もれた景色。あの中で原形を留めている建造物がない以上、天門坂邸も無事で済んでいるはずがない。あの夜、あの場所は全てが終わったのだから。

天門坂が誇っていた巨大さを僕は詳細には知らない。だがそれでも、街を治めるほどの家系が数人程度しかいない生存者の中に納まりきるとは到底思えない。遙風が終わったと言うのなら、それは本当なのだろう。

「ってことは、天門坂一月は分家の人間だつてことか」

確率論でいって最も可能性のある考えを僕が口にする。遙風は肯定も否定もしないまま、

「あるいは——彼女自身も生存者の一人であるか。です」

その可能性を口にした。

「気をつけてくださいよ、久刻くん」

これまでにないほど真剣な声音で遙風が脈絡もなく言う。

「もしも天門坂一月が生存者であるとするならば、彼女はあなたをどう思うでしょうね。誰も人が寄り付かないあの災害跡地に足繁く通っているあなたを。そのことを、彼女が知ってしまったのなら」

「別に。なんとも思わないんじゃないのか？」

廃墟と見るや侵入したくなる子供のように思われるか、ただの変人だと思われるか。どちらにしたって特別な感情など発生しない筈

だ。彼女が生存者だとしてもそれは変わらない。天門坂が災害を経験していたとして、その地に僕が踏み入ったからといって何だというのか。

「そうですね。普通ならそうです。普通の人間なら、久刻くんの頭が変だと思う程度でしょう」

「……お前のその台詞には、何だか悪意を感じるな」

遠回しに遙風が僕を罵倒していたとしても、それは普段のことだから気にならない。

気になることがあるとするならば、彼女がもう一つ遠回しに暗示している事柄だった。

「普通の人間なら……ね」

冒頭を思い出す。遙風は『天門坂一月について』は話せることがないと言った。その割にはここまでの話の運びは天文坂個人のことで、遙風が初めに言った『天門坂家について』のことを僕はまだ聞いていない。

天門坂個人に関して、おおそ予想でしかないにしろ外堀だけなら情報を貰った。遙風にとってそれが前提だったというなら、この次には本題——天門坂家についての情報が提示される頃だろう。

「今となつては真偽が不明な話ですが、過去、天門坂家にはある噂がありました」

前置きを済ませる遙風。その様子から、僕が汲み取った遙風の意図はおそらく間違つてはいなかったと認識する。

「天門坂本家は当時分家の一つを使って人体実験を行っていた、そうです」

「人体実験？」

にわかに信じ難い非常識な単語を僕が反復する。

対して遙風は、首肯してから首を傾げるなどと矛盾した動作で僕を見返してきた。自分の発言に違和感があったのか、それか伝えなかった事柄が上手く伝わらなかったと言っているような。補足するように遙風が続けた。

「人体実験…… というのは表現に誤りがあるかもしれませんがね。天門坂家は遺伝子操作、DNAの組み換え、近親相姦など…… そういった方法で『優れた人間』を造ろうとしていたといわれています。人工的な天才、先天的に造られた才能とでもいうのでしょうか」
遙風としてはこちらの方がしっくりきたのか、その口調は先刻よりも確かなものだった。

「そいつはまた、『優れた人間』が欲しかったのなら、物心ついた瞬間から英才教育漬けの日々を送らせるなりすればよかったのに。人体実験なんて表現をされるような方法をどうして選ぶのか、僕にはまるで想像が付かないよ」

時に頭のいい人間の思想は常人には理解が及ばぬ発想をするという。正しくその類の話だろうかと考えて、やはり僕にはそれさえも理解できないことに思い至った。何だか誰か知らない頭のいい存在にバカにされている気分だ。

頷いては、いいえ、動作と口上で矛盾する対応をまた遙風が見せる。

「それでは届かないんですよ。人間の限界は生まれた時から決まっています。上限は初めから定められていて、ヒトのスペックは無限ではありません。だから彼らは常識的な手段を選ばなかった。自分達の求める域に達するには、常識という檻を破壊する必要があったのでしょう。切欠なんですよ。平穩の揺るがない世界を動かすための。理を覆すための手段。天門坂にとって、方法とは鍵と同義です。こういう言い方も出来ます」

一度息を溜めてから瞳を閉じ、再び開かれた水晶体に僕の姿を映して、

「—— 天門坂は、世界を越えようとした、壊そうとした一族だったとも」

スケールの飛躍し過ぎた話に僕の思考が若干の遅れを伴ってリア

クシヨンする。けれどやっぱり、世界なんて単語を持ち出されてはいまいち的確な反応が見当たらなかった。世界を壊す。それが比喩的な意味を持つ言葉だとしても、僕には何の例えか皆目検討も付かない。

だとしても一つだけ理解できたのは、遙風が言葉よりもむしろ目で語っていたことだった。

本人が意図して眼光に意思を籠めたのか、僕が勝手に深読みしてしまったのか。なんにしろ、分かってしまったことはどうしようもないのだが。遙風は純黒の瞳で僕を見据え、こう語っていた。

だから、罰が当たった。

憎しみも悲しみも、哀れみなんて到底なく。ただ静かに落ち着いた視線が無言で主張していた。

「といつてもまあ……全て仮設なんです」

最後に全体を曖昧にする言葉を付け加えて話を締める。

はあ、とため息を吐き出した彼女の表情は少しだけ弛緩していた。「今となつては全て真相は闇の中、もとい瓦礫の下ですね」

「上手いこと言つたつもりかよ、それ」

これは珍しい。遙風が冗談を言った。本人にそのつもりがあつたかは定かでないが。

僕は苦笑して、遙風は笑わなかった。緩くなつた空気が今一度固さを取り戻し、

「ですが、火のないところに煙は立ちません。噂に、全く根拠がないなんてことは有り得ないことなんです。あの場所でなにが行われていたのか分かりませんが、私に言えることは一つです。天門坂という家系は常軌を逸しています。分家だってそれは変わらない。久刻くん、あなたがどんな理由で天門坂一月に関心を持っているのかは知りませんが、気を付けてください」

真っ直ぐに僕を見、穿つ視線。

僕は知らず口内に溜まっていた唾を飲み込んで遙風の瞳に応える。「彼女には関わらない方がいい。天門坂と関われば、日常なんて簡

単に壊れてしまいます。……私はあなたを失いたくはありません」

特別と普通。

異常と通常。

二つは同じ場所になく、決して寄り添うことは出来ない。

この場合、天門坂に関わって飲み込まれるのは僕だということか。遙風にとつて、少なくとも僕は平凡で通常らしい。そして彼女にとつて、今僕らは同じ場所にいるという意味でもあった。それは、素直に喜んでもいいことなのだろうか。

「大袈裟だよ、遙風」

心配し過ぎだ。さっきの話を仮設だと言ったのは他ならぬ遙風自身だというのに。

もっとも、遙風に心配して貰えるのは僕としては身に余る光栄なので素直に喜ばせてもらう。

友人は大切にしなければならぬ。たださえ僕は交友関係が広いわけではなく、遙風は数少ない友人の中で特別友好度の高い人物だ。彼女の気遣いを蔑ろにすることは絶対に避ける必要がある。だから僕は平静を装って日常の言葉で返す。

きつと遙風が友達と思ってくれているだろう久刻十字として、僕は僕自身の偽りなき誓いを口にした。

「心配しなくてもいい。未来永劫、僕は君以外の人間の靴を舐めたりはしないよ」

僕は笑って、遙風は笑わなかった。代わりにもう嘆息さえも出てこないという風に肩を竦め、それでもやはり堪えきれなくなったのか、はたまた無意識なのか本日最大級のため息を吐いた。

それでいいんだよ遙風。
だつてさ。

僕らの日常に、シリアスパートなんて必要ないだろ。

それはある日常の頁。ひょんなことから読み飛ばされた幕間。

「死体が消えてた？」

またなんともホラーなことを事後報告とばかりに天門坂が告げたのは、その翌日の昼休みであった。ところで近頃僕の昼休みはスプラッタであつたりサイコであつたり果てはセカイ系の話題に占領されているのは如何したことだろうか。健全なハイスクールライフの休息時に好んで持ち出す話題でないことは確かだ。

「リビングデッドとかそんな類いかよ。止めてくれよ天門坂、幾らなんでも僕は吸血鬼みたいなのと秘密裏に戦う学園生活は送りたくないぜ。ニンニクとか嫌いだし」

死者の蘇生に関して最もポピュラーなのはやはり吸血鬼、ドラキユラとかのオカルトだろう。しかし現場に撒き散らされた異常な量の血液を見る限りその類いの怪異を持ち出すのは不適切だ。奴等はきつと一滴の血も残さない。

「冗談で言ってるんじゃないの。ふざけてるなら本気で無視するわよ。別にわたしは一人でも構わないんだから」

「い、いや悪い。ちよつとくらい軽い空気を挟んでおいた方がいいと思うてさ、ほら、精神衛生上とか。暗い話題ばかりだと気が滅入るだろ」

「……もう。いい？ 一応言つとくけど今は現実的な話をしてるの。吸血鬼云々は空想でしょ。そんなのが有り得ない以上、昨日まであった死体が次の日になつて消えてたつてことがどういふことか。それぐらいアンタにだつて分かるでしょ？」

嘆息を交えながら筋道を立てる天門坂。どうにも冗談に付き合ってくれる気配はなく、いやはや、遙風と違つて扱いの難しい奴だ。単刀直入に本題を持ち出した天門坂に合わせて、僕も上がりきらないモチベーションを無理具持ち上げる。

死体の消失。

空想上の概念や理論を排除した上で導き出される結論は——何者かがそれを隠した、ということ。あるいは持ち去つて埋める、焼く

といった手段により一度殺した人間を完全に消し去ったか、だ。今朝の地方新聞を拝読した限りでは、まだ失踪事件は都市伝説扱いで小さな枠を隅に構えるのみだった。あんな変死体が正規のルートによつて発見されたならことは既に一大事になっているはず。それがないということとはつまり、死体を破棄ないし移動させたのはそういった部類の人間ではない。世間にその存在を認知されては困る誰か——他ならぬ犯人だ。

「昨日の朝にはなくなつてた。迂闊だつたわ。前に死体を見つけた時も次の日には消えてただけで、前のは今回よりずっと酷くて、色々考えようがあつたから気にしてなかつただけだ」

本当に、残念。天門坂は発言に相応しく心底悔しそうな顔をしている。苦杯を飲みなんてものじゃなく、樽ごとイッキした感じだ。苦杯が樽に入っているかはともかくとして。

悔しい。その通りだ。天門坂一月は寸分の狂いもなく見立てに違わず悔しさを湛えた心境なのだと思う。だがそれは「手掛かりを失った」とか「あの場で張り込んでいれば犯人を捕まえられたのに」のような悔恨でしかない。決して死した誰かを気に掛けるのではなく、死者への冒瀆に憤りを感じているわけではない少女の表情にこちらは複雑な心地に陥る。復讐は、こんな少女を冷酷無比な存在に変容させてしまうのかと。

なにより。この僕自身もまた、その概念に取り憑かれて自己を乱されてしまうのかもしれないという、恐怖に似た不安。人間らしい感情を殺してまで、僕は——久刻十字は姉を思っているだろうか。それを考えると嫌になる。自分と彼女を天秤に掛けようとする自分に言い知れぬ嫌悪感を抱いた瞬間だった。

「ねえ、聞いているの十字？ ……アンタさ、その人に喋らせておいて途中にどっかいつちゃう癖、治した方がいいわよ。話してる側からしたらすつごく気分が悪いんだから」

憤懣と不満に眉を怒らせながら、覗き込むような角度で睨んでくる天門坂。驚いたのは彼女の端整な顔がやたらと近くにあったこと

で、往年のテレビアニメなら僕の左胸がハートマークを突起させていたことだろう。だがそのことは意に介さず、冷静な口調で平然をアピールする。

「悪い。どうにも気になったことがあると考え込みまう性格なんだよ」

「へえ、それじゃあさっきの話で気になったことがあったわけね」
う……何だこいつ、嘔発見器みたいな勘してやがる。宿題を忘れた言い訳を追及される気分では咄嗟に口から出任せを吐き出す。後付けになるけれど、それが意識せずとも口をついたのは深層心理のどこかに疑問として引つ掛かっていたからかもしれない。

「腕——」

思い出したくもない、鮮血の匣の中。欠如したパーツ。

「……死体から腕と脚がなくなってただろ。あれ、なんか意味があるのかと思つてさ」

思えば、あれを死体と認められなかったのは、その認識に抵抗が付いて回ったのはそれが理由だったのかと今になって思う。人体を模しているにも関わらず、決定的に足りない四肢。乱雑に喰い干切られたそのパーツを見ていない。そこだけが持ち去られたように消失していた。

「なんだ。本当に考えてたんだ。ちょっと意外かな」

いちいち言葉と表情がぴったり適合し合う奴だ。隠す気などさらさら、目を丸くして天門坂が僕の思考が未だ至らぬ先を継ぐ。

「確かにね。どうせ全部持つていくんだったら初めからそうすればよかったのよ。なのに犯人は四肢を無くした胴体だけを残した。疑問と言えば疑問よね」

「何か推理とかあるのか？」

「残念ながら。そうした理由は皆目見当も付かない。単純に、一度に全部運ぶのは重いから分割した、とかしか思い付かないわね。手足を千切って放置しておけば、その間に血も抜けて軽くなるし」

天門坂一月。同期の女の子が口にするには残忍過ぎる上背德的過

ざることを臆面なく言つて退ける。

「でもね、その疑問から分かったことが一つあるの」

ぴん、と人差し指を立て、若干得意気に口元を吊り上げる。大人の盲点をついた事実を自分だけが見つけた子供みたいにあどけない話題からして明らかにそぐわない表情。……何度も思ったけど、こいつの精神構造はどんな風に形成されてるんだ。

「あの死体には、実は二種類の傷があつたの。昨日確認したけど、あの死体はぱつと見ただけで全身傷だらけだった。どこを見れば負傷してないのか分からないくらいにね。だけど、それだけ大量の傷を刻まれていながら、そのどれも致命傷ではなかったのよ。正確に、意図的に急所を避けられてた。大事に大事に殺さないように傷付けられていた。それなのに肩口は酷いものよ。乱暴に噛み千切った、とか無理矢理引き裂いたとかそんな感じ。他の傷が全部『傷付ける』為の行為によつて出来たものならこつちはまるで、『解体する』ことが目的みたいだったっていうのかな。殺さない傷をあれだけ作つていながら、止めの致命傷があれば乱暴なのはどう考えても可笑しいわよ。あの死体にはね、同時に二つの異なつた目的の傷痕、いわば『意思の痕跡』が残つてたのよ。——わたしの言いたいこと、分かる？」

「……犯人が二人いるってことか？ それか、一人の人間の中で完全に異なつた意思が二つ成立していて、それが何かの拍子にスイッチしたとか」

傷付ける目的の先に、偶然行き着いたのが殺人という結果。殺す目的があつたのではない。これではまるで——目的なく殺した結果が、傷付けるといふ行為の先にあつただけ。血と肉の塊。知らずそんな表現をしていたのは全身に刻み込まれた多過ぎる傷のせいかな。直観が思考と繋がつて、ようやく自分の考えが明らかになってきた気がする。

天門坂は無表情に、惨状を喚起して悼むようでもなく、

「正解。わたしもその考えに賛成かな。まあ、後者は現実的じゃない

いし、冷静に冷静に人体を傷付ける人間が衝動的な激情に流されて腕を引き千切るなんて考えられないから、賛同するなら前者かな」

「犯人が二人……ねえ」

だとしても、それでもやはり疑問は残る。複数犯による連続殺人なんてそうあることじゃない。共犯者が多いほど犯罪は成立の難度を上げる。計画的に特定の人間を殺すならともかく、不特定多数の人間を目的なく殺害する愉快犯が複数人であるなどありえるのか。状況だけで見た仮定なら正しいかもしれないが、所詮こんなのは当て付け論法。欠点は幾らでもある。

「今の段階でわたしに言えるのはそれくらいかな。今日も、もう一回旧都に行ってみるつもりだけど……って何よそんな風にまじまじと。わたしの顔、何かついてる？ それとも見惚れちゃった？」

常套句の後に天門坂らしい、からかうみたいな発言が付け加えられる。

「いや、何て言うか天門坂、お前って結構いい奴なんだなって思ってたさ」

「なによそれ、わたしが十字みたいなお人好しだとも言いたいのか？」

褒めてるのに、なぜ仏頂面して突っぱねられなければならないのか。素直に喜んでもらいたいところ半分、紅潮して狼狽する天門坂を見たかったところが半分であった僕としては大変不本意な結果だ。こんなところで王道を外して欲しくない。

腰に手を当てて、仁王立ちした天門坂の表情が曇る。腹の底から引き摺り上げた深いため息をこれ見よがしに吐き出して、

「あのね、わたしは一応協力関係にある以上最低限の義務は果たす。アンタ強情だから、どうせ何を言っても一人で犯人捜しを続けるだろうし、そうなったら目の前をちよろちよろされるのは鬱陶しいのよ。まあ……十字を躍起にさせたのはわたしだし、責任がないわけじゃないから……。頭数なら一人くらい邪魔にならないし、二人の方が見えてくるものも多いと思うからね。それにほら、昔の人が言

つてたでしょ？ 三人寄れば文殊の知恵ってさ」

そういうことは照れ隠しを含んで言って欲しいのだが。要望は通らないだろうから、指摘する点を文末に絞る。

「一人足りてないぞ」

「大丈夫よ。わたしが五人分はカバーするから」

「僕いらねえじゃんか」

文殊の知恵が二つ完成していた。

「もういいでしょ。くだらないこと考えてる暇があったらちよつとは善後策でも練りなさいよ。言つとくけど、手掛かりないんだからね、わたし達。どうやって犯人を特定するかとか、問題は山積みなんだから」

偉そうに言うことでもないのだが、天門坂の言うことは正論だ。放っておけばまた次の被害者が出てしまう。今は手探りでしかないが、せめて捜査の方針くらいは定めるべきだろう。

「とにかく、わたしは放課後旧都に行くから。見落としがあるかもしれないしね」

じゃあね、と黒髪を翻して歩き出す。天門坂の背中が僕を向いたとき、昼休みの終了を告げる予鈴が鳴り響いた。……なんか別れ際を上手く決めたみたいな後姿だけど、僕も戻る場所は同じなんだよな。思いつつ、腰を上げたのは天門坂の背中が見えなくなっただけだった。なにをしてるんだろうね、久刻十字はさ。

*

「箱崎」

放課後だった。僕は先にすたこら教室を出て行った天門坂に遅れを取ることに掃除当番分の時間とそれから気分的にどこか重たかった足取り分だけを経て、旧都と新都を隔てる川の岸边までやってきた。

大橋の傍に立つて、ぼんやり厩気楼でも眺めているみたいな様子の箱崎外流を見付けたのはその時である。

「なにやってんだよお前、ていうか、こっちは近付かないようにって言つといただろ」

昨日の今日もいいところ。先輩の忠告など聞く耳持たない箱崎。

少しだけの苛立ちと九割の呆れを含んだ口調で呼び掛けると、

「ああ、なんだ。なんですか。誰かと思えば年がら年中発情期の危険男子、久刻ザ無脊椎先輩じゃないですか」

「お前とは一度法廷で話し合わなければならぬみたいだな」

「奇遇ですね、ボクもどう意見です。つきましては昨日の強制猥褻について裁判官の良心にしたがった判決を仰ぎたいところですね」

「……き、貴様箱崎……！」

「なんです久刻ザ童貞無脊椎先輩？」

「お前を殺して僕も死にたいなまったくコノヤロウ！」とか。

まはやお約束になりつつあるやり取りも学校の外で行うと新鮮に感じられた。悪い意味であること間違いない。通行人の奇異なる視線や、子供に見えないよう注意する母親とか、その母親と手を繋いでこちらを指差す子供とか。路上で騒いでる変な高校生に世間は冷たかったのであるまる。

だがその冷たさが僕の頭を冷やす役割を担ったことも事実なので、結果オーライと言えなくもないのではないかと自分を慰めつつ咳払いを一つ。勝ち誇る顔をしている箱崎後輩の死角を衝いた。

「ところでだ箱崎、まだこちらの質問に答えて貰っていないんだが」「はい？ ああ、でしたね。これは失礼。今日のボクの下着は上下水色ですよ。確認してみますか？」

スカートの端を持ち上げる後輩女子の姿を僕は直視した。ここですぐのは男ではない。

が、僕は男でありながら箱崎外流の先輩なのだ。

「しない。誤魔化すな箱崎」

「おや？ 下だけでは不満ですか。では上下とも――」

「箱崎」

「……………」

迂回ルートにパイロンを乱立させて、箱崎の逃げ道を塞ぐ。悪いがここは真剣な場面にさせて貰う。

「色々と聞きたいことはあるがまず第一にお前、部活はどうしたんだよ。エースランナー不在で陸上部は活動中か？」

「休みですよ。先輩の仰る通り、最近は物騒らしいですから。学生間の噂でしかないと思いますが、顧問が割りとそういうことを気にする人なんです」

連続失踪事件。……いや、世間的には事件ではなくまだ都市伝説程度のトピックスでしかないが、それを気にして部活動を一日休止させるくらい事は次第に世間に浸透している。事態を甘く見ているのは噂の伝達役を担う学生達の方かもしれない。

「だとして」

僕は言う。箱崎の曇った表情を見据えて。

「何でお前、またこんなところにきてんだよ。この間もうつついてたんだろ。何かあるのかよ、ここ」

「その……えっと」

戸惑う仕草が年相応で、こういうときくらいしか僕は箱崎を後輩と認識できないくらいだった。だって明らかに態度が可笑しいもんこいつ。

長い沈黙を挟んで、口ごもりながら箱崎は言った。僕の目を見ないようにして、瓦礫の果てに思いを馳せる横顔に哀愁を漂わせ、そのあまりに不慣れな真面目な表情と口調で言葉を紡ぐ。

「……………」 家が

泣いてしまいそうな、嘆きに似た虚な声と眼差し。霞む幻影を眺望するように、白昼夢の中を循環するような様子の少女が消え入りがける微かな声で風に乗せた言葉。夢の続きを現に口に出すように、箱崎は先を自らの声で継ぐ。

「……家が、見つからないんですよ。もうずっと、帰れないんですボクは」

＊

箱崎の話をまとめると次のようになる。

当時小学三年生だった箱崎外流の住所は旧都であって、それなりに古い歴史を持つ家系に生を受けたらしい。だがある日のこと。それは唐突に訪れたという。切欠は両親の一言だったそうだ。その日珍しく父に呼び出された箱崎は、普段なら入室を許されない父親の書斎に脚を運んだ。律儀にも、あるいは他人行儀に。ノックの後、廊下に膝をついて許しがあるまで顔を上げずに。

やがて扉越しの声に入室を許可された箱崎はそれに従って立ち上がり、部屋の中に入る。開口一番。豪華な椅子に腰を深々と押し沈めた父親は娘を振り返りもせず宣告した。

“外流、お前は今日から箱崎の家に預けることにしたよ”

子供の箱崎外流が果たしてどのような心境でもってその言葉を聞いていたのかは計り知れない。本人曰く、不思議と抵抗はなかったらしいが詳しいことは覚えていないと語る。泣いていたかも知れないし、笑っていたかも知れない。怒っていたかも知れないが喜んでいたかも知れず。だが曖昧な記憶から理解に至るのは、自分がその瞬間を思い出さないようにしていることだけだった。

莊嚴な声が続ける。

“外流、お前は失敗作だったんだよ。方針が間違っていたらしい。私はお前を『娘』として育て過ぎた。徹しきれなかったんだよ。自分の役割を履き違えていた。私は――”

忘れたかったのは、消し去りたかったのはその、

“お前に父として接してはならなかった。すまないな、外流。これ以上、お前をこっちは置いておけない。忘れなさい全て”

反転した椅子に落ち着いた白髪の子。顔さえ忘れかけていた父親がゆっくり歩みより、腰を屈める。箱崎外流が忘却したかったのは彼の言葉ではなくてその時に見たあの、

“ここにあった全てを忘れなさい。——そうすればまだお前は幸福に生きられる。だから忘れなさい全て。今日までのお前を忘れなさい”

頭に載せられた手が微弱に振動している。握力の少しずつ籠る掌が髪を掻き回す。忘れなさい。言葉は呪いのように。忘れなさい全て。懇願は螺旋のごとく循環を描き。そうすればお前は——。垣間見た一瞬のそれはきつと。

——そうすればまだ、お前は幸福に生きられるから。

彼の。終始涙を溢しながらも声色を変えず表情を表さなかった父親の願い。

忘れたかったのは。

最後に見てしまった父の泣き顔で。——楽しかった、幼い日。家族の笑っていたいくつかの思い出ではなかったはずなのに。

そうして新都に移り住んだ箱崎外流が以後、旧都の家に帰ることはない。家を離れるその日、迎えに来た車を見送る家族の姿はなく、箱崎は父と母の顔を正確に思い出すことが出来ないと言っ。ただ一つ鮮明に覚えているのが最後の夜に見た、父の顔。他の記憶は彼の言い付けを守ってなくしてしまった。

以上が箱崎の語った話である。

道端では長い話になるので、会話は近くの喫茶店で行われた。僕の提案なので、支払いを押し付けられるだろうことは予想の範疇だ。奢ってやるつもりにしては、いやに高そうな雰囲気のお店に入ってしまったなと絶賛後悔している最中。

補足として、箱崎は何度も家に戻ろうと試みているが結果はいつも大橋を渡ることさえ出来ず川の対岸で立ち往生。本日よろしく瓦礫の街を眺めることしか出来ないでいるそうだ。それは決して触れてはいけないから。父に与えられた禁忌であるから、遠くから臨むだけ。……なるほど。少しだが話が読めてきた。しかしそれにしても、たとしたら箱崎のしていることはあまりにも……

「遙風のことと同じなんだな」

遙風信者、箱崎外流。しかしてその実態は——一度も彼女と会話をしたことがないどころか、まともに視線を合わせたことさえない。憧れだけで繋がった疎遠の存在なのだ。箱崎は遙風に憧れている。それだけでなく、行き過ぎてその信仰は崇拜の域に達しているが、畏れ多い遙風様には声すら掛けられないと言う始末だ。だから彼女の近くにいる久刻十字にしつこく絡む、一人のファン。それこそ箱崎外流の正体だった。

「お前さ、中学の大会で……その、何て言うか遙風に憧れた、つうか率直に言って惚れたわけなんだろう」

「はい。初めてだったんですよ『自分より速い生き物』に会ったのは。ええ、ボクの前を走っていく遙風先輩の背中はどうしようもないくらい心を奪われたんです。その純粋な速さに、魅了されたんです」

回想する箱崎。……それはつまり、こいつは遙風を好きになったのではなくて遙風の持つ『速さ』に惹かれただけということではないか。ただこいつは、『速さ』という概念に取り憑かれてしまった結果が遙風への好意や憧憬に連結していると今宣言したのだ。

「それって何か違うないか？ お前、遙風が好きな訳じゃないみたいに聞こえるぞ」

「ですか？ よく分かりませんね、誰かを好きになるってそういうこととは違うのですか？」

「……じゃあ仮に、遙風より速い誰かがいたら、お前はそいつを好きになるのか？」

数秒考える様子の箱崎。答えには五秒を要さなかった。

「はい、おそらく。……遙風先輩には特別惹かれる何かがあります
が、それ以上にボクは彼女の『速さ』が好きなんですよ。堪らなく」
「……そうかい」

何故だろう。目の前にいる後輩を、自分と同じものと認識できないのは。こいつは、どこか歪な人間じゃないものが人間の形をしているだけではないか、そんな風に考えてしまうのは何故だ。当たり前のように、こちらの質問に頷いたこいつを、恐ろしいと感じたのは、どうしてなのか。背筋が冷たい。骨が軋んで体が冷却されていく。似たような感覚をどこかで味わった。あれは確か——旧都で、天門坂に殺されかけた時。初めて彼女の瞳を見た時と同じ。

いや待て。もっと身近にあった気もする。

「……そついや、箱崎。答えたくなけりやいいんだが、お前の名前
って元は何だったんだ？」

寒気を絶ち切りたくて話題を変える。暗示的に記憶に蓋をしている箱崎が旧姓を覚えていなくても不思議はないので返答には半ば期待をしていなかったがしかし、

「ああ、それでしたら——」

箱崎が何気なく答え、結果、違和感が現実につながった。

「——夜杜。夜杜外流です」

「ヨルモリ……？ それって、夜に木編に土の杜で夜杜か？」

「よく分かりましたね先輩。ご明察ですよ」

分かったも何もありません。だってその名前は。

「今度はボクから質問させてもらいます。答えたくなければいい、
とは言いません」

「……なんだよ。拒否権なしって。それでも僕はお前に黙秘権を認
めてやったんだぞ」

「お話したのですから先輩にも答えて貰わないと割に合いません。
では行きますよ、心してお聞きください」

ずっ、と身を乗り出して。

呼吸の止まった、時間の止まった表情が詰問を超越す。

「先輩は、ボクには近づくなと言ったあの場所で何をしていらつしやるのですか？」

答えない。つて選択肢はないんだよな。誤魔化して逃げ切れる雰囲気でもないようだし。

……構わないか。隠すようなことでも、箱崎が明かした過去に比べたら僕のそれなんてそこまで大層なことでもない。知りたいと望むなら教えてやろう。初公開。これが久刻十字の馴れ初めである。あー、決まらねえ何だか。

「姉さんがさ、いなくなっただよ」

正確には。

天門坂の推理が正しいとしたら。

いなくなっただんじやなくて、殺されたのだが。

「知ってんだろ、失踪事件のこと。僕の姉さんもなくなっただ一人なんだ」

訊いてはいけないことを訊いてしまったと、今更のように箱崎は氣不味そうに表情を曇らせる。からんからん、と店の扉が開く音で沈黙は破られ、乗じて箱崎が質問を付け加えた。

「……ですが、それと旧都にどんな関係があるんですか？ 先輩にだってあそこに行く理由はないじゃないですか」

言われて納得。確かにその通りか。事情を知らない人間には今の理由だけでは弱過ぎる。という以前に理由として成り立つてすらない。ならばやはり、連動して深く掘り下げる必要があるらしい。

「……まあ、なんていうかさ」

どんな風に説明すればいいのかは咄嗟に浮かんでこなかった。婉曲させて一部を曖昧にしようにも上手い言い回しが見つからない。代わりとばかりに脳裏を掠めていくのはあの夜。もう何度も悪夢として見た地獄の景色と最果ての月。誰もが生きることが諦めた絶望の煉獄に迸る深紅の炎と、震動し嘶く大地。

僕は言った。

「あそこに行けば会えるんじゃないかって、思ってしまったんだよ。」

——僕が姉さんに拾われたのは、あの場所だから」

「拾われた……？」

思案顔は作り物ではなく心からのそれで、瞬きの内に箱崎が答えに辿り着く。凍り付いた顔に表れる感情。その心中を見越して僕は話の先を進める。

「そういうことだよ。僕はさ——あの震災で生き残った、幸運な一人なんだよ」

絶望の渦中。多過ぎる犠牲の結果救われたのは極少数。片手の指で数え切れるその人数に久刻十字も含まれていた。

本来ならあの日、間違いなく死んでいるはずだったのだ。それが何かの手違いで助かってしまっただけ。焼けた瓦礫に倒れ込んで、周囲を囲む火災を見るのも飽きて見上げた黒い空。黒煙の隙間に覗く金色に手を伸ばして、当然のように死を受け入れたその瞬間。——温もりに、伸ばした手を包まれた。

その時の彼女の顔を覚えている。煤に汚れながらも輝いていた美しさを生涯おそらく忘れることはない。絶望の中で一欠片の安堵を見付け、和らいだ笑顔。儂く脆く、直ぐに泣き顔に変わってしまいそうに涙を溜めた瞳で彼女——標月姉さんは微笑んでいた。

「お互いに身寄りがなかったから一緒に暮らすことになったんだよ。実年齢と名字は聞いたことがなかったけど、親子と言うよりは姉弟って言った方が正確だと思う」

この先は口に出さず独白に留めておくが、僕は久刻標月を姉としてではなく好きだった。自分を救ってくれたことへの感謝や、誰かを助けられる存在への漠然とした憧憬もあったのだろうがそれ以上に綺麗だと思った。誰かを好きになるなんて気持ちがどんなものかは知らないけれど、多分これはそういう類いの感情なのだと思う。

だから僕はこのふざけた猟奇殺人の犯人を——■■たい。絶対に赦すことなど出来ない。

「悪いことを訊いてしまいました。申し訳ございません、久刻先輩」

「お前がそんなこと気にする柄かよ」

失礼な、と箱崎。唇を尖らせて批難の視線を浴びせてくる。悪態ばっかついてないでそういう顔をしていたらこいつは結構可愛いと思うんだけど。不服を申し立てする視線に苦笑で応えつつ、

「いいよ別に気にしなくて。隠すことじゃないし、悪いことでもないだろ。だからさ、お前にも事情はあるんだろうけどやっぱり旧都には近寄らないでくれ。何にしても危ない場所だから」

「……分かりました。ここは久刻先輩の顔を立てましょう」

渋々ながら納得してくれた。なんだろうこの達成感。箱崎と心を通わせたのはこれが初めての気がする。嬉しいというよりも驚いた。箱崎外流にも人の話を理解して受け止める能力と理性が備わっていたのか。

「ぶっちゃけ、あんな人気のないところにおいては久刻先輩のような獣に襲われかねませんしね。遙風に捧げると決めたこの身を汚されるのはボクも好ましくありません」

いつもの調子に戻って、箱崎の軽口を物理的には数分振りに、感覚的には久方振りに聞いた。

「でもですね。少しだけ、久刻先輩なら構わない気もします……今は」

「箱崎……？」

ぺしり、と顔面に生温かい感触。浮わついた誤解を招きかねないので一切合切の比喻を省いて端的かつ簡潔に事実を描写すると、おしぼりが僕の顔を覆うようにヒットしていた。視界が薄い黄緑色に染められる。

「何しやがる？」

「あつははー。本気にしかけてエロイ顔になってたので、先輩の名誉のためにモザイクを掛けましたー」

いつの間にやら普段の箱崎が回帰していた。訂正。やっぱりこの後輩と分かり合うことはこの先なさそうだ。根本から人間としての何かがずれている。僕らの感性が符合する日は未来永劫訪れないこ

とを知った。悲しくもない。

「約束ですよ、先輩」

「何の約束だよ」

湿った布地を剥がすと、悪戯っぽく笑って小指を立てる箱崎が向かいの席から腰を上げて僕を見下ろしていた。

「先輩がいいと言うまで旧都には近付かないことにします。ですが、いつか、久刻先輩の抱えているそれが解決したら——一緒にボクの家、探してください」

久刻先輩の抱えている……か。その詳細を追及しただけこの常識知らずにしては気を使っているだろう。こちらの言い付けを守ると公約しているところが何よりも好評価だ。聞き分けのよさが不気味なくらいである。ならば。

箱崎に倣って小指を立てる。絡ませることはなくても約束を結ぶ意思だけを明確に。それは言葉ではない何かで結んだ、やはり言葉ではない何か。

「約束だ、箱崎」

「はい、久刻先輩」

満面の笑みを咲かせたスプリンターは、その一言で満足し、自慢のスピードを加速させて店を出て行った。一度、出口で振り返ってそれが最後。小さく手を上げた後輩は店外に姿を消して戻ることはない。

承知の上ではあったのだが、やはりこの場は僕の奢りであるらしいと、残された伝票を見て悟った。

……思わぬ失費だ。

*

予想外と言うならば箱崎が図々しくも、あるいは無自覚的に支払

いを僕に押し付けて去って行ったことではなくて、その代償とばかりに買わされた会話を傍聴している存在が過疎状態の店内に潜んでいたことだった。僕にそのことを報せたのは、しかし、盗み聞きとかそんなことがどうでもよくなるほど無邪気で無垢な声であり、

「お隣のお兄ちゃんっ！　こんにちはです！」

ぴよこりん、とツインテールにされた髪を弾ませる小さな体。ソファに身を沈めている僕を起立しながらも見上げる瞳は純粹を絵に描いたような、それはそれは星雲を詰め込んだ銀河のごとく澄んだ輝きを放つ――と、過剰過ぎる表現は逆に胡散臭いか。一点の曇りも汚れもない無垢で綺麗な水晶体に久刻十字を映して、そこにいたのは未美好ちゃんだった。

なぜこの娘がこんなところにいるのかと思案するが、まずは満開の笑顔に応えて笑みを作り出し、

「こんにちは未美好ちゃん」

小さな頭を撫でてやる。と、累乗した笑顔の輝きに一瞬、僕はこの為に生きているんだな、と生の喜びを実感する。国の宝じゃないかな、この娘の笑顔は。などと至福に浸る僕はすっかり失念していたのだった。未美好ちゃんのあるところには、

「やあ、久刻くん。奇遇だね奇遇。いやあ、しかし、なんと偶然立ち寄った喫茶店でばったりだなんてこれは運命を感じるじゃないか」
枯さんも、当然いるのだ。

「カラス兄さま、ウソつきはいけません。兄さま、お隣のお兄ちゃんを見掛けたからこのお店に入っただです」

未美好ちゃんは正直な子供だった。この兄あって、何故この妹があるのか甚だしく疑問である。性格が正反对過ぎやしないかこの二人。

「ははは、まあそうなるんだけどね。ならここであつたのは偶然ではなくて必然か」

言いつつ、枯さんはそれまで箱崎の座っていた位置に腰を下ろす。さらには遠慮も躊躇いも微塵にも見せずに箱崎の残していったエス

プレッソを嚙っている始末。何この人。こんな大人にはなりたくない。

「……相変わらずですね」

もう思ったことがそのまま口に出るほど呆れ返る僕。見ろ、未美好ちゃんは律儀にもまだ着席せずに向かい合う男二人を交互に眺めているではないか。不憫で仕方ない。

「未美好ちゃんも座りなよ」

「いいんですか？」

「構わないよ」

久刻十字的優しさの全てを注ぎ込んだ微笑みでそれを許して上げる。するとほら、期待を裏切らず未美好ちゃんは人類の至宝と言って過言ではない笑顔を一層輝かせてくれるのだ。これに勝る喜びが他にあるだろうか。

ぴょん、と跳ねる体。ツインテールが揺れる。体重を感じさせない小さな体が、僕の膝の上に乗った。

「……未美好ちゃん？」

「えへへ、いいですか、お隣のお兄ちゃん？」

いいも何も、こつちがそれを言いたいくらいである。神様ありがとう。この幸せを僕は忘れない。

「はは、これじゃあ久刻くんと未美好が兄妹みたいだな」

と、枯さん。ああ、そういえばいたな、この人。

ていうか知らない間に僕のカップにまで手を伸ばしている。

「だってさ、未美好ちゃん。もう僕ら兄妹でいいんじゃないかな？」

「ダメです。ミミスクの兄さまはカラス兄さまだけです」

「……そっか」

しょーく。がーんと音が聞こえた気がしたくらいである。可愛い顔して殺人的な一言をお見舞いしてくれる、膝の上の小学生女子。

「でさ、何か話があるんじゃないのかい？ 未美好にまで座れって言ったのはそういうことだろ」

人のカップを優雅に傾ける姿がルックスの効果もあって非常に様

になっている。騙されるな。あれは僕の注文した品を無断で拝借した男であり、僕から最愛の妹を奪った存在だ。……いや、実際に未美好ちゃんの兄は枯さんな訳だけど。

気を持ち直して枯さんに顔を向ける。確かに話があるのは事実だ。箱崎の話を聞いて少しばかり気になる点があったので尋ねておきたい。不安を残すのはやはり健全な精神に害を及ぼすことだろうから、疑問は払拭するに越したことはない。

「今の奴、箱崎って言うんですけど。……なんていうのか、ちよつと事情があつて名前が変わつたんですよ。で、その名前が元々は『夜杜』って名前だったらしいんです。それで、その名前の時は旧都に住んでたそうなんです。これってつまり——」

カップを口から離す黒い男。——夜杜枯に、僕は訊いた。

「——枯さんも、あつちに住んでたんですか？」

旧都。今は面影のない、瓦礫の街。七年前に瓦解した、この街の半分。

枯さんがカップを置く。小気味よい音をコースターが立てる。余韻の消えない内に、顔を上げた枯さんは顔色を一切変化させることなく、

「そうだよ。俺も未美好も旧都の人間さ。久刻くん、君と同じあの震災の生き残りって訳だよ。納得出来るだろ？ 君と同じさ。君と標月さんとね」

もつとも、俺と未美好は血の繋がった真正正銘の兄妹だけどね、黒い男が付け加える。言われてみれば、彼の言葉は正しい。枯さんと未美好ちゃんが兄妹二人で暮らしているのにも、その理由ならば頷くことが出来た。

「でも箱崎か……。俺は知らないな。下の名前は何て言うんだい？ ……パズル？ どんな字を書くのか、それは、あ、いやいいよ。字を聞いても多分知らないや」

言つて、枯さんは硝子の向こう側に視線を投じる。箱崎が消えて行つた彼方を眺めて何かを考えているようだがやはり、箱崎外流……

：夜杜外流なる人物に覚えはないらしく、無害を極めた苦笑でこちらを振り向いた。

「悪いね、力になれそうにないよ。久刻くん」

「あ、いえ別にそんなことは」

元より何かを求めていたわけではなかった。少しだけ気になったのだ。自分の後輩が隣人と同じ名字を持っていてしかも旧都の出身だということが。少し過敏な反応かもしれないがそれでもやはり、遙風に聞かされた話があるせいで無視出来ない。本来ならば意識する必要もないのだろうけど。……面倒だ。

「そうだ。俺も久刻くんに頼みたいことがあるんだけど、いいかな？」

「何ですか？ 一般常識の範囲内なら聞くことも可能ですよ」

「なら大丈夫だ。ちよつと、俺はこの後用事があるから、先に未美好を家に連れて帰って欲しいんだよ」

未美好ちゃんを見る。薄桃色のほんのり滲む白色の服装を基調として、本日も兄と対をなす少女。アクセントとばかりに補色を用いた黒のオーバーニーのソックスと黒のスカート。空になったカップを興味有り気に見詰めている横顔を二秒未満観察して答える。

「それなら構いませんよ」

本当は旧都に行く予定があつたのだが、天門坂とは待ち合わせをしているわけではない。僕がいなくともあいつは一人で勝手に色々と調べているだろうさ。どちらかといえば僕はいない方がいいくらいかもしれない訳だし。

「助かるよ。お礼って訳じゃないけど、ここの支払い俺がしておくよ。それじゃあ久刻くん、妹をよろしく頼むよ」

「任せましょう」

未美好ちゃんに促して席を立つ。話は聞いていたから分かっているだろう。案の定、膝の上をちょこんと占領したツインテールの肩を叩いてやると「はい」と弾む勢いの返事。未美好ちゃんはぱたぱたと髪を揺らして出口へと駆けていく。無邪気な姿に頬が緩むの

を抑えられないのは人として抗えなくて当然だと思う。

手を振って待つ未美好ちゃんに追い付こうと立ち上がった僕に最後、中身のないカップをスプーンで掻き混ぜる動作をする枯さんが呟くように言った。

「これは兄としての注意なんだけどね、久刻くん。未美好を決して人気のないところ、特に囲われた狭い場所には連れ込んだんじゃ駄目だぜ」

兄として、の辺りにアクセントを置いていたが、そのような疑いを掛けるなら僕に任せなければいいのに。……言われなくてももしないけどさ、そんなこと。

*

以下、余談というか幸せのお裾分け。未美好ちゃんとの楽しい帰宅イベントの佳境について少しだけ語ろうと思う。この間に起きたことは、どうも空腹だったらしい未美好ちゃんに鯛焼きを買って上げたことくらいで特筆するほどのことはない。誓って間違いは起きていないので注意とご理解を頂きたい。

「未美好ちゃん、甘い物好きなの？」

この世の幸福を噛み締めるように鯛焼きを頬張る小さな姿があまりにも微笑ましいので、咄嗟に訊いてしまふ。口元に餡を付けた子供らしい未美好ちゃんがこちらを見上げる。

「はいっ。ミミズクは食べ物なら何でも好きです。何でも食べられることが自慢ですっ」

「そりゃあ偉いな、好き嫌いが無いのはいいことだよ未美好ちゃん」
えっへん、とまだ未発育の胸を張る未美好ちゃん。これがいずれ成長したら、などと無粋なことは想像しない。そこにある少女を愛でることが大切なのだ。童女は決して発展途上などではない——未

発育の完成形、それこそが齡十二の女の子である。

……あれ。何か親戚のおじさんみたいなこと言いながらさらりとアブナイことを語ってやしないかな、僕。

まあいいか。

「お隣のお兄ちゃん」

「ん、なに？」

「手、つないでもいいですかっ？」

無論。大歓迎。

「お手を拝借します、レディ」

未美好ちゃんの小さな手を握る。温もりと柔らかさに精神が異界に飛び去ってしまいかねない勢いだ。流石に言い過ぎなのだが。夜杜未美好の手は見た目に違わず小さく、力を少し入れれば壊れてしまいそうなくらい脆くて柔らかだった。

「えへへ。お隣のお兄ちゃんの手、カラス兄さまと違って暖かいです」

枯さんの手は冷たいらしかった。

「未美好ちゃんも大変だよな。枯さんみたいなお兄さんがいるとさ」

「いえ、カラス兄さまはとても、可哀想な人ですから」

未美好ちゃん。その『可哀想』というのは社会的な意味で寸分の狂いもなく正しいので出来れば分かっていても妹の君には口にして欲しくない。ていうか枯さん、いい妹を持ち過ぎだ。僕も未美好ちゃんの兄になりたい。

手を引く力が強くなった気がした。見れば、未美好ちゃんは強く明るく笑顔を一面に輝かせ、

「だから、ミミズクが傍にいます。カラス兄さまの傍には、ミミズクがいらないといけないんです」

小さな誇りを得意満面に、そして喜色満面に高らかと誓いのように口にしたのだった。

＊

余談、として付け加えるにはその後の話は少し深刻かもしれない。部屋の前まで未美好ちゃんを送っていた後、特に理由もなく自室の天井を眺めて惰眠になりきらない時間を過ごした頃には既に、外は茜色を引き下げて夜に染まり始めていた。カーテンの隙間から入り込む夜を告げる薄暗い、影に似た光でそのことを知る。

あれからどれくらいの時間が経過したかを考えるより先に部屋を出、僕はようやく旧都に脚を向わせた。

不気味な月の座する夜空。

不吉に薄明るい彼方の空。

旧都に至る頃には月明かりの頼りを必要とするまでに暗く、世界は落ちていた。

天門坂を搜して、廃墟と瓦礫の合間を歩く。その姿は多分、当てもなく彷徨っているだけの、言い得て先日の僕と同じような、目的を見失って迷走する足取りをしていただろう。予感があった。曖昧模糊で掴み所はなかったが、瓦礫の形成する迷路を深く進めば進むだけ、強く高鳴る鼓動が確かに告げる。

やがて。

異臭に嗅覚が追いつく頃に僕はそこに辿り着いた。

そう。まさに再現。そこはばかりと、周囲から断絶された空間になっでいて、誰かに決められたみたいに壁をその色に染めて、誰かの訪問を待っていたように月明かりを差し込ませ――。悪戯に作り上げられた趣味の悪い箱庭みたいだ。

「……………天門坂？」

幽鬼のごとく影染みた姿が微動だにせずそれを見下ろしている。

赤い囲いの中にいて、他に染まらぬその少女が直視する。何を？

彼女は何を見ている？　いいや、天門坂じゃない。僕だ。久刻十字は今何を見ているのか。夢か、現か。

紛れもなく後者。

この感触を間違えるはずがない。偽物の幻想であるはずがなかった。

圧倒的な死の気配を充満させて——昨日と同じく、四角い囲いの中に横たわる一つのオブジェ。

それは、僕のよく知っている少女の姿をしていた。

四肢の急所を正確に射抜かれ、おそらくは即死だったのだろう幸いにも表情は苦悶ではなく驚愕に染まっている。綺麗な致命傷が四点。一目で分かる。血化粧を整った顔に施し、腕と脚を自らの血液で湿らせる真紅の少女。

陸上部のエースランナー。

「……ああ、遅かったね久刻くん」

振り返る天門坂。その目が何を語っているのか。

白い無表情は蒼く灯る瞳で僕と、その周囲の空間を見据えている。視線が交差したのは一瞬の間。

刹那の間を置いて、その後僕の視線を釘付けにしたのは変わり果てた箱崎外流の姿だった。

絶望に言葉を飲み込み、呼吸をすることさえ忘れる。天門坂が淡々と、

「ねえ、分かつてると思うけどその娘」

無慈悲に、いつかこの旧都を統べていた金色のように、

「もう、死んでるわよ？」

どうしてそんなことを言っているのか。表情を見れば分かったかもしれない。……あれ？　なんで僕には天門坂の顔が見えていないのだろう。可笑しい。なら僕は何を見ているんだ。何を、しているんだ。

答えは簡単。

客観的に久刻十字を観察して理解に及ぶ。

僕は、赤く濡れた少女の体を抱いて、その冷え切った感触を確かめていた。

「……箱、崎？」

絶望の淵から沸き上がる声。

——なんですか先輩？

そんな声が聞こえた気がした。幻聴だ。箱崎は顔色を変えず、目を開いたまま眠っている。

「この、馬鹿……危ないから近づくなくて、言っただろ」

永く忘れていた感情があった。

この、体の芯が熱を帯びて行き、全身が戦慄く感覚。

思い出した——これが哀しいって感情だ。

「なんで……約束だって、言ったのに」

声は泣いているように濡れていて、呟いたそれは月には届かない。

——約束ですよ先輩。

その顔を思い出せない。

——一緒にボクの家、探してください。

そう言った箱崎を思い出すと、本当に泣いてしまいそうだったから。

ごめん、なんて謝る必要はない。約束を破ったのはお前だから。

だけど、それでも。

「ごめんな箱崎……」

誰に許して欲しかったのか、そう言って強く箱崎の肩を抱くことしか今は出来そうになかった。

/ ?

/ 4

箱崎外流殺害について、久刻十字が一時間程度の事情聴取だけで解放されたのはおそらく天門坂の家の方だと思う。幸いにも僕は犯人と疑われることはなく後輩を殺された先輩ということで理解を得た。何の間違いもない認識だが、自分が無罪放免にされたことがここまで不快なのは何故だろう。そして付き纏う罪悪感の正体にも今はまだ至れそうにない。というよりも当分はまともな思考を展開出来る気がしなかった。

「遅かったわね久刻くん。貴方は無実だってくらい、すぐにでも分かりそうなものなのに」

夜の帰り道。街灯の下で天門坂が僕を待っていた。こいつも事情聴取をされたのかと考えてみるが、それはないだろうと結論を下す。遙風の話ではこの街における天門坂家の権力は法を凌駕しているらしい。勿論誇張はあるだろうけれど、証拠不十分ではかの天門坂のご令嬢を拘束するなど笑止千万だ。

「大分疲れてるみたいだけど大丈夫？」

「大丈夫じゃないって言ったら、お前は大人しく僕を帰してくれるのか？」

「まさか。話があるから待ってたのに、ここでアンタを帰したらわたしの時間は無駄になるじゃない」

街灯に凭れて腕を組む。話とは何か。夕方旧都に行かなかったことを怒っているようではなさそうだし、だとしたら他に天門坂が僕に対してする話とはなんだ。散々人をこの件から遠ざけようとしておいて、協力的な部分を見せるのも妙である。

天門坂は冬の空を見上げる。人工の光のその向こうに点る星の数を数えるように。しばらく間を置いてから話し始めたのは、天門坂の都合というよりもこちらが聞き手としての準備を整える猶予をくれたと思った方が妥当だろう。

「久刻くん、少し昔話してもいい？」

断ったって、どうせ話すのだから僕は何も答えなかった。否定も肯定も天門坂を前にしては何の意味も持たない意思表示でしかない。ならば受動的になろう。今は誰かに流されている方が楽で助かる。

「遙風輪廻に聞いて色々知ってると思うけど、貴方、旧都が健在だった頃の天門坂家についてどこまで知ってるの？」

天門坂、本家。七年前に旧都と共に途絶えた家系。僕は思い出す。昼休み、遙風が語ったこと。彼女は何と言っていたのか——そうだ思い出した。遙風は確か、「天門坂は世界を超えようとした一族」とその血統を称していたのだ。

「そう。世界を、ね。うん、まあ、詳しいことはわたしも知らないけど、そんな感じよ」

「怒らないのか？」

「なにが？」

きょとん、とした表情が首を傾げる。恐ろしく整った顔が少しだけ幼げに見える仕草だった。

「なにがって、普通自分のこと色々詮索されたら気分悪いんじゃないのか？」

そう思うから僕は遙風を経由して自分的には秘密裏に天門坂を調べていたのだ。本人に色々尋ねるのは常識的な方法とは言えないだろう。だからこそ——二週間前を境にして頻繁に旧都、災害跡に訪れ始めた天門坂の情報をこそそと嗅ぎ回っていたというのに。

あっけらかんとして、天門坂。小さく悪戯っぽく、くすりと笑う。「別にいいよ。お互い様だから。わたしもね、久刻くんことは調べてたの」

「お前が？　なんでさ」

「言ったでしょ。わたしは貴方を恨んでるって。……あ、違うかな。それだと逆だ」

一人で納得して頷いたりしているが、何のことか説明を求めてもいいか。

「悪いけど、その話は後で」

質問の権限は与えられていなかった。

釈明するように冗談交じりの軽い笑顔を含んで天門坂が続ける。

「今の段階だとわたしの方が久刻くんのことを知り過ぎてるから、不公平なのよ。だから知っておいて、わたしのことも。——天門坂家のしていたことも全部。貴方にはその権利があるから。あの震災で唯一生き残った『正常な人間』として、貴方には知る権利があるのよ」

それは遠い夜空の星に呟くような声で、この時初めて久刻十字は天門坂一月が人間らしい表情を浮かべるのを見た。空には月。金色が見下ろす深遠の世界の中で、天門坂が静かに語り始めた。

*

「『箱庭プロジェクト』——天門坂の連中はその実験をそんな風に呼んでいたわ」

事は遡ること三十年前。当時の天門坂家当主の発案により立脚した計画に与えられた名前が天門坂の口にする『箱庭プロジェクト』だったらしい。

「旧都を支配していた天門坂は広大な土地と巨大過ぎる屋敷、それから傘下にあった幾つかの家系と有力な外部の家系と提携することによってその計画を実行に移したの。——『箱庭プロジェクト』。忌まわしい計画の概要は簡単で、そうね、久刻くんの言った通り…

…つまり遙風輪廻の表現が正しいことになるけど…… とどのつまりわたし達がしたかったことは、人間という素体を使って世界を壊す鍵を創ろうとしていたのよ。人間を人間としてではなく、ある一つの『衝動』や『現象』として先天的な異常者を造り出す。言ってみればそんなところ。少しでも世界にとって不都合な存在を、人工的に造り上げようとしたのが『箱庭プロジェクト』」

世界。

ここで天門坂の口にする世界とは即ち惑星という意味ではなくおそらくは、概念的に人間を存在足らしめる境界のようなものを指すのだろう。それを破却するために『人間』という現象を作り替え、ある一つの『衝動』として生成する。いわばヒトの形を持った混沌衝動。それ自体が既に成立した現象であり衝動であるがために、周囲に絶対的な影響を及ぼす因果の相対的矛盾の存在。世界を壊す鍵。つまり因果の鎖により形成される運命の流動を断ち切る破綻。天門坂が求めたのは、そんな存在。

「だけど、結果は言わなくても分かるでしょ。結局世界を超えることなんて出来なかった、ましてや壊すなんてこと。プロジェクトはただ破綻者を造り出すだけの異常生成機関でしかなかった」

天門坂家の至った結論。やはり、世界には敵わない。僕達が僕達である以上、例えば人間が人間としてでなく一つの衝動の形として造られようともしなれない。何にしたって、全ての現象は世界の上に成り立つのだから。それに抗うことが出来ないのは必然。世界を否定することは己が存在を否定することと同義。完全な意味でレゾネートルを剥奪することなど、世界に有る上では人工に行うことの出来ない業だ。

「そうして年月を費やして、たくさんの破綻者、異常者の生成を繰り返し——何人もの人間を境界の外に追いやった天門坂家は、ただそれさえ計画の前準備でしかなかった、なんて平気で言うんだから本当にどうかしてるわよ。結論からして、全ては『箱庭プロジェクト』の前実験程度でしかなかったの。それが始まったのは発案か

ら数年後。わたしの、姉さんが生まれた年からだった」

姉、その言葉に思考が止まる。まるで意識を鷲掴みにされたような感覚。異常だったのは、その単語を口にした瞬間の天門坂だった。思い出したくない記憶を無理矢理押さえ付けて否定した、そんな苦しさを滲ませる表情の歪みが見えて、今までのどんな時よりも人間らしい一面を覗かせたというのにその実、僕が覚えたのは戦慄。いつかナイフを突き付けられた夜と同じ、寒気が体中を這い回る不快感。

僕の思考を断絶するように天門坂がその先を続ける。

「結局のところ『箱庭プロジェクト』ってのはわたし達姉妹を披検体にした実験だったのよ。そう。世界を超えるなんて不可能。世界を壊すなんてことは出来ない。子供にだって分かる答えよね、そんなの。だから方法を変えた。——世界を超えるのではなく、世界を生み出すってことにね。バカらしいでしょ？ 壊せないものを創るなんて。いつだって何だって、創るよりも壊す方が簡単なのに」

笑っちゃうよね、言いながら天門坂自身は一切笑っていない。表情に含まれる成分の一粒にだってご機嫌な要素などあらず、星を見上げる横顔はどこか悲哀の色を帯びていた。

「箱庭。世界を表すその概念はね、外界からの干渉の一切をなくした閉じた空間。わたしと姉さんは同じように屋敷の中で幽閉されるように育てられた。孤独に寄り添って。絶望に身を寄せて。衝動は『邂逅』と『終焉』。始まりと終わりを繋いだ閉じて完結した世界。わたし達は対となる現象として世界の製作の軸にされるはずだった」

——はずだった。故意に、それが叶えられなかった目的であることを強調する。

そこまで聞けば、あるいはそれさえ聞けばその後を想像するのは容易い。天門坂の言おうとすること、何故『箱庭プロジェクト』は成立しなかったのか。その意味を僕は知っているはずだ。——七年前のあの夜に、全ては集束する。旧都、この街の半分を瓦解させた震災の日。全ては崩れ、消し飛んだ。遙風は言っていた。バチが当

たつたのだと。

「……さてと。実はね、本題はここからなのよ久刻くん。貴方に話しておかなければならないのはここから先。あの夜の真相を、貴方に教えます」

「……真相？ まさか、あの震災も天門坂家の起こしたものだつて言うつもりか？ それさえも『箱庭プロジェクト』とかいう実験の過程だと言っんじゃないだろうな」

有り得ない仮定を口する。茶化すみたいに肩を竦めて苦笑する天門坂。罵るのでなく、疲れた仕草で語る。もしそうだとしたら、むしろその方がよかったのに。そんな風に笑う。

「半分正解かな。計算外ではあったみたいだけど、あれを計画の一貫として取り入れることにしたのは確かよ。スイッチだった。全ての切欠で、言うならば撃鉄。——もっとも、それは本家にとっては予想外の出来事だっただけだね」

「……その、地震を起こしたのは分家だった、てことか？」

「いいえ。言ってるでしょ、半分は正解だけど、半分は外れだよ。震災はあくまで天災。そこは人間の力でどうこう出来るものじゃない。だから半分正解だったのは、これが計画の一部だったこと。ねえ久刻くん、可哀しいと思わない？」

「なにがだよ」

「震災はこの街全体に平等に被害を与えたはずなのに、ならどうして——崩壊したのは旧都だけだったの？ 新都の被害も勿論大きかった。だけどこっちの死傷者は人口の一割程度にしか満たない。火災？ まあね、確かにそれはあっただけだったかな。だとしたら、旧都の人達は新都に逃げればよかったのよ。——どうして、それをしなかったのかな？ どうして生存者が数えられる程度しか、存在しないのかな」

「……ちよつと待てよ、それって」

「合点がいった？ 貴方の考えてる通りよきつと。あの晩——旧都は封鎖されていた。あの街は震災の夜、そこに住む人々を焼き殺す

煉獄として利用されたのよ。避難経路の全てを閉ざして、隔離された世界を作り出した。救助機関も何もかもが機能を停止して、旧都は人為的に滅ぼされた」

風が吹いていた。夜の冷たい風。だけどそれに気付いたのは肌で感じた感触ではなく、天門坂の長い髪が虚空に流れる様子の視覚で、実感はしかし何の意味も持たず世界の静寂に飲み込まれて消えた。わざと空白を作って、天門坂が口を閉ざす。旧都の崩壊を語ったそのままの表情で、ぼんやりと幻想を見送るように。

「本家には想像もしていなかったことだろうけど、どこかで納得はしていたと思う。何も知らなかったのはわたしと姉さんだけ。あの日、姉さんと屋敷を抜け出した後、逸れたわたしを助けてくれたのは分家の人間だったわ。安全圏まで逃げて、そいつはわたしにこう言ったの」

煌めく街は滅び行く一瞬に紅く輝き、燦然たる光景は夜空の星を散りばめたみたいに美しくも凄惨だったという。その終わりの世界を見下ろして、

「『見なさい、これは君達の為に用意した世界の果てだよ』——拒絶も許されず、助けを請う絶叫をほくそ笑んで見下ろしながら、わたしが聞いたのは実験の完成だった。『箱庭プロジェクト』は、旧都という箱庭を崩壊させることで完成したのよ。破壊という名の終焉を以って——」

天門坂の左手が右の肘に触れる。寒さとは別の震えを堪えているような、自分の体を抱くような姿。それが普段毅然に振る舞う少女には酷く不似合いで、本来の小ささや細さ——存在としての脆さを如実に表していた。目を逸らしたくなる、消えかける儚い笑顔が泣き顔に変わりそうで——

「この箱庭^{セカイ}の滅びを以て——終わりの月は満ちる」

——強くも、脆い、一切の感情を殺した終わりの笑顔が涙を溢し

ていた。

「『箱庭プロジェクト』が、街全体を巻き込んだ計画だって分かったのはその時。——わたしが、天門坂一月が終極の月として完成したのも、その日。わたしはその日から、ヒトとしての境界を外れて『終わり』として生きていたのよ。……でもね、計画は結局そこ止まり。わたしが実験の結果だとしても、実は何の意味ももうなかったのよ。どうして分かる、久刻くん？」

僕は答えなかった。本当はその理由に思い当たる所はあったのかもしれないが、それでも。何かを口にして、自分でそれを現実に肯定することが怖かった。だから何も言わずに、天門坂の模範回答を待つ。——涙を流して声を上げず泣いている少女に、その続きを促した。

「現象は単独では成り立たない。対となる事象と共存しているからこそ存在として成り立っているのよ。終焉は、邂逅がなければ訪れることはない。わたし達はその究極系。本来なら独自に内包しているその表裏を持たないことこそ、矛盾の根源。拮抗がないから一方に偏るの。わたしはそのベクトルを終わりという最終地点に向けられたカタチ。終わりの月。全ての最終系。どんな存在もその概念には逆らえない。だって——」

不思議と、その先を僕は知っている気がした。聞いてはいけなないと心が叫ぶ。耳を塞げと体が震える。知ってしまったえば戻れない。被害者としての自分を肯定できない——だから、続きを聞いてはならないはずだと言うのに。それに抗ってでも天門坂から目を逸らさなかったのは久刻十字なりの罪悪感があつたからなのかもしれない。

どんな存在もその概念には逆らえない——果たして、天門坂一月は言った。

「——この世界は決して、永遠ではないのだから」

分かつてはいても、事実として認めるのにはやはり抵抗がある。だが否定は出来ないのだ。思えば片鱗は確かにあった。それを疑わせる天門坂の言動や行動も、出逢ったあの夜から幾つも見てきたは

ずだ。

この世界は決して、永遠ではない。それは、その言葉は何度も聞いてきた久刻、標月の口癖。

「……ねえ、もう分かるでしょ？ わたしが何の為にこの殺人を追ってるのか。誰の為に復讐を望んでいるのか。もう、分かるよね十字——久刻標月は、わたしの姉さんのよ」

七年前の記憶が過る。絶望の果てに叶えられた生きたいという願い。それをしてくれたのは誰だ。忘れるはずもない。標月姉さんだ。忘れていたのは、彼女が僕に言った言葉。抱き締められた腕の中で聞いたその懺悔。

“ごめんね”

安堵して、心からの涙で声を濡らして、

“私はキミを——妹の代わりにするよ”

救えなかった者の代償にせめて、小さな願いを叶えただけ。自分勝手な代償行為に選ばれたのが偶然そこにいた久刻十字であっただけの、本当にたったそれだけのこと。助けられたなんて、自分が特別だったなんてことは決してない。なのに、自分の前で泣いていたその人があまりにも綺麗に見えたから思ったかった。自分は選ばれたのだと信じていたかった。助けて貰えたと、誰かの代わりではなく個人として。

だけど構わない。本当はそんなことなんてどうでもよかった。自分を弟のように扱ってくれた彼女に憧れたから、あんな、強く笑える存在に心を奪われてしまったから——他人の為に流されたその涙さえ尊いと感じたからこそ、素直に嬉しかった。偶然でも代替でも構わない。標月姉さんが誰かの代わりを求めているならそうなりたい。——彼女にとっての久刻十字が意味のある存在であって欲しいと望むほど強く憧れた。

終わりの世界にあって輝いていた、開闢の月に、少しでもその存在の近くありたい。助けられたと思ったかった。そう思うことで、遠過ぎる月の光を手繰り寄せたつもりになっていた。

「わたしはね、貴方が憎い。殺してしまいたいくらい。姉さんを奪った——わたしの七年間を奪った貴方が許せない。……だけど、分かってる。本当はそんなの逆恨みだって。本当は貴方がわたしを恨むのが当然なんだってことくらい。そうでしょ」

閉口する。何も言えないで僕は天門坂を見詰めていた。姉妹というだけはあつてやはり、その泣き顔は月明かりに映える輝きを持っていて美しい。なんてことを考え、自分を誤魔化す。

「何にしたって、あの夜の破滅はわたしが原因なんだから。……ね、久刻くん訊いてもいい？」

儚くも、止めどない涙を流す小さな幽かな笑顔を浮かべて、天門坂一月は最後、問い掛けてくる。

「——例えば生まれてから一度も不幸を体験したことのない人間がいたとして、その誰かの人生は幸せだったと言えるのかな？」

それは僕を指して言っているようにも、あるいは天門坂自身を指して言っているようにも聞こえる質問だった。

*

「——構わないよ」

その声は自分の声ながら恐ろしく落ち着いていた。これが自分を殺したいと望み、そう告げた相手に対して発せられる声なのかと我が事ながら疑問に思う。しかしそれでも反面で理解できたのは、始めから僕は彼女になら殺されたっていいと思っていたということ。一昨日のあの夜、心は諦観とは違った意味で死を受け入れていた。そうだ始めから、どこかで分かっていたのかもしれない。天門坂が標月姉さんと同じ輝きを宿していたことに、気付いていたのかもしれない。

君にはその権利がある。そして僕にはそうされる責任がある。

天門坂のこれまでを奪ってきた、その贖罪の責務が、僕にはある。

——確かに、その通りだ。その通り僕には天門坂から姉を奪った罪がある。だけどそんなのは所詮建前。本音はこの後ろめたさを払拭したいと思う事故防衛の精神。天門坂ではなくて僕が救われたことに対する罪悪感からの解放を望んだだけのこと。何もかも、自分の為の我が侬だ。

「……なんでよ」

小さく肩と拳を震わせて、天門坂が僕を睨む。鋭い眼光。迫力は健在。

「アンタはなんでいつもそうなのよ……！　わたしに殺されるのが嫌じゃないの！？　どうして生きていたって思わないのよ！」

自分はこんなにも憎しみを抱いているのに——涙を散らして蒼の瞳が訴える。天を衝く怒髪。夜空の月を碎かなぬばかりの叫び。残念ながら、僕は天門坂を恨むことが出来そうにない。

それをするのは、今を生きていたかった久刻十字だから。……あの夜に、その久刻十字は死んだ。途切れたという方が正しいのだろうか。いずれにせよ、今の久刻十字は天門坂標月と出逢った瞬間に始まったのだ。さながら始まりの月導に導かれるように。邂逅の月に照らされて、新しく始まった。天門坂一月という少女のその後を代償にして。

だから、僕は天門坂を恨むことなんて出来ない。

「……ふざけないでよ」

感情が荒々しく波打ち静かな憤慨の声。

「ふざけないでよ！　生きたいって願いなさいよ！　生きていたいって、生にすがって懇願しなさい！　アンタの命は、わたしの代わりなんだから！」

「……だからこそ」

こんな言葉が誰の救いにもならないことは分かっていたけど、

「僕は、お前になら殺されてもいいって、思えるんだよ」

紛れもない本心を口にして、それがここまで後味の悪い台詞だったのかと無感動に実感する。罪の意識。違う。……これは多分、呪縛。姉さんが僕に遺した一つの呪いだ。

——キミを妹の代わりにするよ。

ならさ、僕、もういないんじゃないか？

みつともなく生きていく意味なんてないだろ。なら、天門坂に殺された方が全然ましじゃないか。元より僕は彼女の代替品。どっちがドッペルゲンガーか分からないけど、こうなった今偽者の僕はもういない。天門坂が望むなら、殺されたって構わないと思う。

「……でよ」

衝撃。

胸を打ち鳴らす弱々しい天門坂の拳。小さい、少女の手だ。今更そんなことに気が付く。死神。ナイフを携えた姿をそんな風に形容した自分が馬鹿らしい。終わりの月。……なにが、『箱庭プロジェクト』だよ。やっぱり失敗してんじゃないかねえか。

「なんで……アンタはわたしを恨んでくれないのよ……！ 本当は謝りたいのに。出来ることならあの街の全ての犠牲になった人達に、謝りたいのに……。アンタが、わたしを恨んでくれないとわたしは――」

そこにいたのは死神でも、終わりの月なんかでもなく、

「——ここにいてもいいんだって、思っちゃうじゃない」

天門坂一月という一人の、罪の意識に潰されそうな脆い少女だった。

「ダメなのよ。わたしはたくさん殺した。この街を壊したのはわたしのよ。そのわたしが生きていていいわけないのに……。お願いだから、ねえ、久刻くん、わたしを恨んでよ。咎めてよ」

泣きながら、悪夢に魘される子供のようにそればかりを繰り返す。その度に力のない拳が胸を打った。

「思えよ……思えばいいだろ。ここにいてもいいって。耐え切れな
いなら、僕が傍にいてやる。お前が僕を恨むことで楽になれるなら
そうすればいい。殺したいなら、そうすればいい」

「……やだよ。そんなの、嫌だよ」

泣き声。聞いたこともないくらい人間味のある、感情の含まれた
声色が子供染みた舌足らずの泣き声混じりに訴える。

「……………分かってるのよ。十字を恨んだって、標月姉さんは帰っ
てこないって」

はつきり言っ、安心した。

天門坂がまだ自分と同じ場所にいるとそう思えたことに少しだけ。
その月は決して手の届かない場所にあるわけではないのだと思えた
ことが。水に映った幻影を見ていたわけではなかったのだ。天門坂
一月は確かにそこにいて、触れることも出来るし声も届く。

「天門坂……あのさ」

何が言えただろう。何を、言えただろう。

どんな理由であれ、逆恨みだとしても自分を殺したいと言った相
手に対してどんな風にこの気持ちを伝えればいいのか分からない。
言葉が見つからず、名前を呼ぶだけに止まってその先を声にして吐
き出すことが出来ないでいた僕に、いつの間にか俯いていた天門坂
の声。

「……久刻くん、ごめん、今日泊まっていってもいい？」

爪先に語り掛けてるみたいだ。場違いにもそんな表現をして天門
坂の発言の整理を遅らせる。上目遣いに濡れた瞳がこちらを見上げ、
「今夜は一人になりたくないから。だから——作戦会議。いいよね、
久刻くん」

強がりだとは一目に瞭然だったが敢えて指摘してやることはせず、
いつものように強く振る舞おうとする彼女を受け入れる。気丈に努
めて、いつもの自分を装って。そんな姿が、大丈夫だから、と言っ
ている気がして僕にはそれ以上は何も言えなかった。

大切なモノを失った胸の穴が、今は何か別のモノで蓋をされてい

る。

帰り道。月の見下ろす夜の世界。

……間違っていないよな。

この夜、久刻十字は、天門坂一月を好きになったのかもしれないかった。

…

“お前さ、最近妙にオレに付き纏って、どういつもりだよ？”

慇懃な口調は、その容姿から想像を絶する酷く荒々しいものだった。

“何とか言えって。……あー、面倒臭い。いいや、オレが言ってる迷惑だから。そういうの止める”

彼女は、まるで性別をすっかり間違ってしまったみたいな語調でそんなことを言う。奇妙なものを見ている気分だ。姿形は何の変化もないのに——制服の着こなしこそ彼女には有り得ないが——目も声も雰囲気も一変して、人格を別人と取り替えたように。

“……ちよつと待った”

言いたいことを言っただち去ろうとする彼女……彼を呼び止める。無視されるのは覚悟の上だったのに、その覚悟が無駄に終わって、髪長いその後姿は脚を止めて振り返った。間違っ、運動神経が脳の誤作動で発信してしまったと言わんばかりに振り向いた顔は悪辣としている。そうしてしまった自分が心の底から嫌になる、と瞳が語っていた。

“なんだよ、まだ何か用かよ変わり者”

“久刻十字。僕の名前だ、君は？”

“はあ？ ……お前馬鹿なのかよ。オレが誰かなんて分かってるそんなこと”

呆れるように、荒々しく吐き捨てて、

“――遙風輪廻。オレの名前だよ”

気だるくため息を吐くみたいな様子で、けれどどこかでそれを誇るように彼は自らの名前を告げた。

噂には聞いていたけれど、実際にこの目で見るのは初めてだったから戸惑ってしまったのだ。二重人格。不定期に人格のスイッチする人物が同級生にいたとは有名な話で、勿論それが僕の耳に届いていないはずがない。だがここまで見事な豹変ぶりだとは、誰が想像できただろう。

“もういいか？ そろそろ帰りたいんだけど”

“……あ、ああ。時間を取らせて悪かったよ”

“そりゃ、どういたしまして”

“なあ、遙風”

呼びかけると立ち止まってくれる。遙風の習性を僕はこの時学んだ。

今度は上半身だけでこちらを向いて、明らかな怠惰の表情を貼り付けて。いい加減次辺りは本当に無視されてしまっんじゃないかと思うほど、顰め面が明確に拒絶を訴えている。だから僕は言った。一方的に言われるだけだった久刻十字の、今日で唯一の意思表示。
“また明日な”

それは毎日彼女に繰り返して伝えていた、再会の約束だった。

…

果たしてそれは作戦会議と呼ぶにはあまりにも無惨な結果に終了した。

家まで辿り着いた頃には日付が変わっていたなんて当たり前で、もう数時間もすれば夜が終わってしまうほどの夜更けになってアイ

ムホームを宣言した後には数秒もしない内に睡魔が大挙をなして襲い掛かってくる始末。意識を繋ぎ止めることが困難な疲労困憊に曝され――疲れていたのは体ではなく心だ。脳がその日あったことを処理しきれていない――あえなく目を閉じた僕は、相対して開いた睡夢の門を潜ったのだった。

少し懐かしい夢を見ていた気もするけれど内容をはっきりとは思いつけない。断言できることはそれがいつもの夢とは違っていただけ。天門坂標月と出逢った夜の記憶の再生が行われたわけではなかった。

目が覚めて最初に確認したのは現在時刻だったが、時計を目視するまでもなく予感めいたものを感じてはいたのだ。その予感を裏付けするみたいに明る過ぎる外の世界とか高く昇り過ぎている太陽とか全部、今が昼を回った頃だと無言のまま主張している。そして一応にして念のために確認した時計の針が、それを否定する材料にならなかったのは言うまでもない。

そういえば、とついでのように疑問を抱く。本来それは真っ先に考えなくてはならない事象であるはずなのに。天門坂はどこだろう。ここまで一緒に帰ってきたのは覚えていますが、それから間もなく僕は意識を昏倒させてしまったので彼女がどうしたのか知り得ない。以前のように朝食を作ってくれてはいないのが残念だ。

と、待てよ。

部屋の中に天門坂一月の姿はない。だけどそれはここが僕の家だからとかそんな理由とは別に当たり前ではないか。むしろ間違っているのはこっちの方だ。久刻十字こそここにいてるべきではなく、本来いない存在なのだなぜならば。……今日は平日だから。

「……あー、やっちゃったな」

学校、サボっちゃった。いやまだ間に合うか。時間的には昼休みになるから、これから登校すれば午後の授業を受けることは出来る。遅刻するくらいなら休む、なんて高尚ぶった主義など僕にはない。だがどうだろう。今の時間から登校するほど、久刻十字は学校とい

う場所に執着しているのか。それに一日休んだくらいなら出席日数に影響もない。さて――

そこまで考えた時である。ポケットの中の物体が突然のバイブレーション。何かと震源に手を伸ばして発覚したのは、その正体が内ポケットの携帯電話だということともう一つ、自分が今制服を着ていることだった。

知らない番号。間違い電話を疑ってみるが一応通話ボタンを押して端末を耳に当てる。

「もしもし」

定型句で呼び掛けると電話の主は平坦な声で、

『あ、起きてたんだ。ダメじゃない学校休んだら。それとも今起きたばかりかな、久刻くん？』

こつちが電話に出ないことを前提にしていたみたいな言い草を聞かされた。その声は紛れもなく天門坂一月のもので、この言い分だといいつは自分だけ先に起床して登校していたらしい。起こせよ、僕も。

『よく眠ってたから、悪いと思って。あ、そうだ。まだお礼を言っ
てなかったわね。昨日は泊めてくれてありがとう、久刻くん』

昨日とか言う時間ではなかったし、寝床として利用しただけなら礼を言われるほどではない。

「何の用だ、天門坂」

だから、である。天門坂がこんなくだらないことの為にわざわざ電話を掛けてくるとは思えなかった。こいつにしてみれば何か話すべきことがあるから、電話なんてしてきたのだ。そして天門坂が僕にする話といえば題目は一つに限定される。

『せっかちななあ。まあいいけど。本当は昨日の内に言おうと思っ
てたんだけどね、貴方すぐに寝ちゃったから』

作戦会議とやらは名目だけではなかったということか。

『犯人の目処がたったわ。久刻くん、誰だか分かる？』

冗談で言っているわけでは、ないのだろう。天門坂はあっさりと

そんなことを言っただけで退ける。元々声には抑揚のある喋り方をする奴なので、不意に僕の脳裏には携帯を片手に不敵な笑みを浮かべている天門坂が浮かぶ。どうあっても現実ではそのような情景は有り得ないだろうけれど。

「いや、分かんない。まったく」

「……はあ。寝起きだから頭が起きてないんだ。それとも惚けてるの？」

惚けるとは何だろう。それではまるで、僕が犯人の目星をつけていて、しかもその上ある核心的な証拠も掴んでいくせにあえてそれを看過しているようではないか。残念ながらそのようなことは全く以てない。誰が犯人であるかに見当をつけているなら暢気に眠ってなどいらなかったはずだ。

久刻標月——天門坂標月を、仮にも久刻十字を弟と扱ってくれた人を殺した誰か。今ではさらに、箱崎外流をもその手に掛けた異常者を一秒でも生かしておきたくない。

「そっか。本気で分かんないんだ」

「で、誰なんだよ天門坂」

「そう焦らないの。ねえ久刻くん、わたし、死体の状態は話したよね」

「……ああ、聞いたよ。確か致命傷を避けた傷が全身に刻まれてたとか」

「なのに致命傷は荒々しく、暴力的だった。一つの殺人における殺意やその意義が全く異なった形で二つ同時に存在していたって言ったのよ。つまりね、一人の人間の中で、同時に二つの意識が成立していたということ。本来人間は異種の感情と一緒に抱くことなんて出来ない。ましてや殺人衝動に連結するほどの感情を二つも持つなんて——人格が一つしかない人間には、到底出来ないことよね」

「……天門坂、お前何が言いたいんだよ」

分かったことは二つ。天門坂が冗談でこんなことを言っているのではないことと、それから——彼女の言う犯人とやらが誰であるか。

天門坂が殺意を向けて語るその対象の名前が口から出そうになるのを、僕はどうか堪えて否定の事実を模索する。

その何かが見付かるよりも先に、電話から機械音に変換された声が告げる。聞きたくもない、その名前を。

『遙風輪廻。知ってるでしょ、二重人格者の彼女のこと』

「……なんでさ」

違う。遙風じゃない。そう言葉に出来るなら救われる心地だと言うのに、何故かはつきりと天門坂の言葉を否定することが僕には出来なかった。

「遙風がそんなことをする理由が、ない。大体、全部推測だろ状況からみた予想でしかない。遙風には動機もなければ、疑われる理由もない。その……二重人格だってこと以外は。それだって他に仮説は立てられるだろ」

『この殺人がそもそも異常なのよ。もっともな常識的見解なんて有り得ないわよ』

「そんな理由で遙風を疑うってのかよ。いい加減にしろよ天門坂、それ以上は——」

『だから。だからね、この殺人の犯人は異常者なのよ。徹底的に壊れてる。わたしの知る限り条件に該当する異常者は遙風輪廻だけ』

「だから、遙風はお前が言うところの『異常者』なんかじゃないだろ。二重人格ってだけで他は普通の——」

『箱庭プロジェクトに関わってる時点で、もう彼女は普通なんかじゃないのよ』

二度、発言を遮られる。天門坂ははつきりと、決定的にその事実を口にして、僕は何かを言い返すことも出来ず彼女の発言を反芻していた。『箱庭プロジェクト』——その忌まわしい計画の名前を聞くだけで、脳が拒絶反応を起こす。何か反論を行う為に口を開けば同時に嘔吐してしまいそうだった。

後天的に先天的な異常者を造り出す計画。閉ざされた小さな世界を壊して完成した、終わりの月を生み出す為のプロジェクト。天門

坂は何と言った？ 遙風がその、馬鹿げた計画に関係している。…信じられるはずなど、無論なかった。

『遙風の家はね、脳の研究における権威なのよ。だから目をつけられた。異常者の構造を調べるのにはどうしてもその方面の知識が必要だったからね。補足程度にだけど、遙風家は新都側にあったから七年前の震災による被害はなかったわ。その裏側を知っていたかは分からないけれど』

「遙風も…プロジェクトの被験者だったのか」

『似て非なるものよ。遙風輪廻個人に関して言うなら、厳密にはプロジェクトに関わりはない。だけど並行して行われた実験の被験者であることには違いないわ。その実験が全く箱庭プロジェクトと関係がなかったとも言えないしね。あっちのことはわたしも詳しくは知らない。だけど大まかな概要なら聞かされてる。…そうね、天門坂が体を通して衝動を形にしたのなら、遙風は心を通して現象に至ろうとした、とても言うのかな。つまりね、わたし達は人体の雛型をして衝動を刻まれた、外側から加工された存在なの。対して遙風輪廻は内側を加工された存在。その形があの、二重人格なのよ』

意味が、分からなかった。理解できないのではなく、話している言語がそもそも異国の言葉のように感じられる。いや、遙風が疑われているという状況も相乗してまるで人外の植物か何かと会話している気分でさえある。

なによりも、遙風が『箱庭プロジェクト』などという実験に関わりを持つているその事実が吐き気を覚えるほどに不快だった。

『人間は基本的に一つの人格までしか自己として許容出来ない。後天的な二重人格者つてのは、自己を閉ざすことであたかもそこに他人がいるかのように装う究極系。遙風輪廻のアレはね、そもそもが奇異な形の二重人格なのよ。本来の二重、あるいは多重人格を想像するなら…例えば一つの巨大な箱があって、それがホストとなる人格だとするでしょ。その箱の中には記憶や感情といったモノが収容されるのだけど、まかり間違つて別の小さな箱が入ってしまった

とする。箱の中に箱があるのよ。それが多重人格という症状。で、遙風輪廻の場合はここが異なる。彼女はね、遙風輪廻という箱に腫瘍のような別の箱が接着された結果の多重人格なの」

——私達は同じ遙風輪廻ですが、完全に別離した人格です。遙風の言葉を思い出す。……そういえばそうだ。遙風は今まで一度も、お互いのことを他人のようにには言わなかった。遙風輪廻は一人だけ。紛れもない個人。

『目的はヒトとしての概念の破壊。自己の完全な欠落と喪失。二つの人格は互いの存在を肯定する為に喰い合っていずれ一方を消し去る。そういう内面的な殺人衝動を植え付けられた存在が遙風輪廻。遙風側はそうした結果空っぽになった遙風輪廻の素体に後からシステムをインストールするつもりだったんでしょね。やろうとしていることは箱庭プロジェクトと同じよ。遙風輪廻の中で全てを完結させる。その為の二重人格』

「……だとしても、それが何だよ」
そんなことが、遙風を猟奇殺人の犯人に仕立て上げる理由にはならない。

『自己否定、破綻を恐る感情からその衝動を外部に向けていたとしたら。——二つの殺人衝動もこれなら説明がつくでしょ。二回分殺さないと、その衝動は収まらないの』

反駁は、見付からなかった。天門坂の言葉には確かに説得力がある。……僕は死体の惨状を思い出していた。四肢を引き千切られた、喰い千切られたような死体。食欲染みた、殺意。不覚にも僕は思ってしまったではないか。遙風輪廻は、なんと『食欲』に忠実なのだと。

『決着をつけるわ。貴方はどうするの久刻くん？ まだ、遙風輪廻を庇うの？』

「……………いや、分かったよ天門坂」

何が分かったものか。何を僕は納得したというのだ。——自分の友達が大切な姉を殺した異常殺人鬼だなんてことを。ふざけるな。

信じたくない、決して。だが信じることは出来る、忌まわしいことに。

『そっか』

「ああ……ただし条件がある。まだ遙風だつて決まった訳じゃないだろ」

『十中八九そうだろうけどね。それで？』

「遙風と話したい。あいつはきっと、お前の思つてるような悪い奴じゃない。だから、僕もその決着とやらには同伴させて欲しい」

駄目だと言われても認めやしない。その意思が伝わったのだろう、天門坂はあっさりと、だけど呆れた様子の声で、

『分かった。それでアンタの気が済むなら好きにすればいい』

承諾の意思を口にくれた。

一悶着を想定していた僕は脱力して安堵の息を漏らす。あるいはそれはため息だったのかもしれない。全身から力が抜けていく感覚に立ち眩み染みた軽い目眩を覚えた時。

調子外れのインターホンがコールされ、その音が室内に鳴り響いた。どうやら腰を落着ける束の間を天は僕に与えてくれないらしい。

玄関に向かって歩き出しつつ、

『場所……そうね、旧都がいいわ。あそこなら——邪魔が入らないから』

「……分かった。時間は？」

物騒な打ち合わせをしながら除き穴に目を向ける。扉の前にいる人物が誰であるかをそれで確認し――

『それはまた後で。遙風輪廻はわたしが呼び出すから、時間とかは折り返して』

「いや、待った。それは僕が引き受ける」

『はい？ どういうつもりよ。心配しなくたって、アンタが話をするまではなにもしないわよ』

「そついう訳じゃねえよ。いいから、任せといってくれ。それじゃあ

な」

『あ、ちよつと十字——』

ぶつり、がちやり。

通話を切つて扉を開ける。開かれる扉。広がる視界。そこに立つ人物に向けて僕は自分の中にある普段の久刻十字を心掛けた可能な限り平常のままの笑顔を浮かべて、

「やあ、遙風。君が訪ねてくれるなんて珍しいね。まあ上がれよ。ちよつと話したいことも——」

そこにいた遙風輪廻を歓迎しつつ予想外の人物を同時に視界の中に認めてしまった。

「枯さん……と、未美好ちゃん？」

お隣の兄妹が白と黒を着て部屋の前にいたのだった。

*

複雑に入り組んだ繋がりの上に成り立つ、それは四人を頂点とした四角関係。現在その様な四人が久刻宅にて四者面談を絶賛開催中である。一応、ウェルカムドリンクとして麦茶なんかを入れてはみたのだが、目を離している隙に三者は三様のくつろぎ方をして久刻十字を待ち受けていた。

黒い霧みたいなヒトガタ、夜杜枯さんは部屋の床に膝を立てて座っていてそのルックスも助けてかなり様になっているのが何とも言えない。本当はあまり行儀はよくないのだが、彼の微笑はどこから誰が見てもその体勢を許容する高品質さを持っていた。次にその隣で対照的な態度を取っている妹の未美好ちゃんに注目する。この兄にしてこの妹は有り得ないと言いたくなるくらいに礼儀の正しい正座で、いっそのままずっとそこに飾っておきたくなくなるくらいに可愛さを振り撒いている。今日は白い上着に赤のシャツ。ツインテ-

ルを形成するゴムの色も赤色。スカートと靴下は相変わらずの黒。お気に入りなのだろうか。

最後にもう一人。

今現在のこの室内において枯さんを上回る不躰さを体現しているのは、ある意味で意外なことに遙風輪廻だった。彼女——様子からすると彼女——はベッドの上で胡座なんかを掻いているのだ。しかも滅茶苦茶あからさまに機嫌悪そうだし。なにこいつ、恐い。

「……まあ、お茶、入れたから飲んでください」

後半に連れて声が消えて行く。何故ここまで気不味い空間が生成されているのか。

「あー、遙風、まず君、学校はどうしたんだよ。まだ五限目の途中じゃないのか？」

「サボりの現行犯に言われたくないよ。今日は午前中までだ。近頃は物騒だからな」

……ああ、そういうこと。箱崎の事件は明るみに出てるから、学校側も配慮しないわけにはいかないわけだ。そうでなくともこれまで片鱗は見え隠れしていたのだから、今回のことを機にするのは確かに頷ける。して、遙風がここにおいでなさった理由は。

「バカが珍しく休んでるから、風邪引いてるんじゃないかって心配したんだよ。実際に見た感じは大丈夫そうだけど」

「……バカは風邪引かないって諺、知ってるか。まあいいや。心配掛けたことは謝るよ、sondeでありがとう遙風」

素直に心配してたと言ってくれる辺り、やはりこっちの遙風は話が早い。隠し事など全くしない性格だからな、あるいは——お前が箱崎を殺したのかと、問えば簡単に首を縦に振るかもしれない。……そうならないことを、心から祈る。

「で、枯さんはどういった用件ですか？」

「俺はたまたまそこで彼女と会って、面白そうだからついて来ただけだよ。思いの外話も合ったしね」

「帰れよあんた」

本気で、この人のことが分からない。

「……いや、本当に一度席を外して貰えますか？　ちょっと遙風と話があるので」

「俺がいたら迷惑な話かな？」

「ええ、はい」

遠慮なく即答させて貰う。この人が相手なら気を遣うこともないし、はつきりと言いたいことを言う方がお互いに気分がいい。

「分かったよ。なら外に出ていよう。未美好、ほら行くぞ」

「はいです」

枯さんの後ろを飛び跳ねるようについていくツインテール。未美好は玄関直通の超短距離廊下に出ると威勢良く振り返って、部屋の中に極上の笑顔を振り撒いた。

「お隣のお兄ちゃん、ごちそうさまです」

室内の光度が増した、その瞬間である。未美好ちゃんがいれば人類には採光技術も発光技術も得る必要がない。そう断言せざるを得ないほどの輝かしく眩しい純粹無垢な満面の笑顔だった。

二人がいなくなり、部屋には僕と遙風だけが残される。遙風は音もなく麦茶を啜っていて、ちらりともこちらを見ようとしていない話があると言つ旨は枯さんに対して伝えた際、同じ部屋にいた遙風にも自動的に伝播するはずなのだが。わざと慮外にされているのだろうか。

「枯さんと何の話したんだ？」

気にはならなかったが、話題がないので訊いてみる。

「いかにして人間を屈服させるか、その効率的手段と能率性について」

「僕には、お前が分からないぞ遙風輪廻！」

叫んだところで、遙風がコップを置く。今度はこっちの番だというような視線を投げ寄越して、

「話って？」

そんな風に直接本題を促してくるのだった。

分かってはいるのだ。こういう直線的で装うところがないのが遙風だとは、僕も重々承知している。だけど今回に限っては少し遠回りをしたかったというのも本音。この胸に一抹でも彼女を殺人鬼と疑う気持ちがあるのなら、それが否定できなくなるのはもっと後がいい。

「……なんつつか、気になったんだけどお前さ、ずっと僕のこと遠ざけようとしてただろ。それって、その、お前の二重人格が原因なのかなって、気になったんだよ」

「お前、さらっと酷いこと言うよな。オレは気にしないからいいけどさ。後で割りと気にするんだぜ遙風輪廻は」

「あ……悪い」

婉曲して言ったのが却って遙風を傷付ける言葉になるとは思っていなかった。こちらにしてみれば迂回した言い方でも、遙風には直接的な言葉の暴力だったのだ。気付かなかった僕は、言い訳させて貰うならそれくらい気が滅入っていたのだろう。

「いいよ、気にすんな。……さて、どうだか。遙風輪廻は人とは出来るだけ深く関わろうとしなかったからな。お前もその例外じゃなかった、それだけだよ。だから二重人格とか、そんなのはきつと関係ない。単に、人と必要以上の関係を持ちたくなかっただけなんだ」

「……君は、なんていうか、もう一人の遙風輪廻をどんな風に思ってるんだ？」

「別に。ただ、もう一人つてのは違うな。遙風輪廻は常に一人だよ。孤立してて、孤独で、単一であって単体だ。二重人格何て言っても、ちよつと気分が変わるみたいなものなんだよ。オレはアイツだし、アイツはオレだ。……上手く言えないけどさ。物凄く近くにあつてなのに互いが互いを認識しきれていない感じ。だって自分の顔を鏡なしじゃ見れないだろ」

「……遙風」

「なんだよ」

訊くべきか、一瞬迷った。でも僕は、それを訊かずにはいられな

かった。

「——人を殺したい、って思ったことあるか？」

どれだけ気分の悪いことを言っているかは、分かっているつもりだ。なのに訪ね終わった後になっても後悔はない。心の痞が落ちたような気分さえしている。だってここからの僕はなにもしなくていいから。残りは遙風がこの質問を否定すれば全部終わりだ。

だってのに、遙風は。

「あるよ。そんなの、毎日だ」

至極当たり前のことのように、そんなことを口にする。

「そういう風に造られてるんだ、オレ達は。——なあ十字、自分だけの空間に別の誰かがいたら、居心地悪いだろ。困ったことにね、遙風輪廻って器には一つの心しか入れられないんだ。なのに、オレ達は無理矢理二つ、押し込まれてる」

一人の人間が許容できるのは、一つの人格まで。天門坂の言葉を思い出す。轟めき合う器の中。容積を超えた内包量に耐えきれなくなった場合、遙風輪廻という器はどんな対応を取るだろう。

「問題はスペックじゃないんだ。遙風輪廻が二つを内包出来ないのは機能の問題じゃない。収納なら出来るんだよ。問題はさ、オレ達には序列がない。優先順位が存在していないことこそが問題なんだ」

決まっている。殺し合え、と。己の居場所を守る為に他者の居場所を剥奪せよ。それが下される決断。遙風輪廻という箱は一つだけだから二つを与えられた彼女は一方を消去しなくてはならない。それは、永遠に自己に向けられる殺戮衝動。

「どっちが本物が分からない。だから優先順位が定まらない。しかたないから有象無象のまま循環して、不確かな自己を保ち続ける。

……だけどさ、遙風輪廻はそのあり方に耐えられるほど丈夫じゃないんだよ。だから本能的に、一方を消そうとする殺人衝動が沸き起こるんだ。こればかりは抑えきれない。——分かっているよ、いかどっちかがいなくならないといけないうて。そうしないと、遙風輪廻は破綻するから」

「遙風……」

自己への破壊衝動は内側から自らを壊していく。遙風輪廻はいずれ二つの人格による摩擦で擦り切れて消失し、空っぽになる。天門坂曰く、それこそが遙風家の狙いだそうだ。……まだ、続いている。旧都を、そこに住まう人達を犠牲にしておいて尚、七年を経て何人もの人間を殺してそれでも未だに——『箱庭プロジェクト』は続いている。遙風輪廻の中で、今もまだ。

どうすればいい。

僕は遙風を恨めばいいのか？ 久刻十字の友人を。大切な、友達を。

「話はそれだけか、十字？ だったらオレは帰るけど」

「……また後で、もう一つ話がある」

「何だよ。だったら今すればいいだろ？」

「今は、駄目なんだ。ちよつと時間が欲しい。……いつもの、夕方の災害跡でいいか？ あの夕焼けの見える場所で」

「……変な奴。まあいいよ、変わり者。あれは結構好きだから行つてやる」

「ありがとう、遙風」

無邪気な、少年みたいな笑顔で遙風は承諾してくれた。

誰が悪い。誰が、悪いんだよ。『箱庭プロジェクト』なんて馬鹿なことを始めた連中が、全部悪いのに。

「十字？ どうした顔色悪いぞ」

「そうか？ 何でもない大丈夫だよ」

「そつか。それじゃまた後で」

じゃあな、と片手を挙げて去っていく遙風。

約束は夕方。旧都の瓦礫が赤く染まり、硝子が金色に煌めく赤い夕風の時間。それまでに決めなくてはならない。僕は、久刻十字は友達である遙風輪廻をどうするか、決断しなくてはならないのだ。確固とした一つの答えを定めて。

だがそれは直ぐには、決められそうになかった。

＊

過ぎる時間は人を待たない。足早とはもはや言い難い、駆け足で過ぎ去った時刻を振り返るに、一応色々と考えてはみたが答えは得られなかった。結局久刻十字は何の意思もないまま約束に突き動かされて旧都に向かう。天門坂には連絡を入れておいたから、あいつが先に遙風とコンタクトを取ってはいないと思う。確信はない。ともあれ、天門坂は約束してくれたのだ、遙風と話をさせてくれると確かに。

だから安心していい。まだ遙風と話は出来る。その上でどうすればいいのか、どうするべきなのか、どうしたいのか――それらを判断しよう。しかし今一つだけ確かなことは、どうあっても僕は遙風を心の底から憎むことはきっと出来ない。彼女の境遇に同情しているなど、そんな理由ではなくて。久刻十字はただ依然しているだけなのだ。遙風輪廻というたった一人の大切な友人に。彼女を、失いたくないのだらう。

こんなことを言ってしまうと、天門坂は怒るのだらうな。そう思つて、瓦礫の隙間に見える空に視界を向ける。

そうして、奇妙な体験をした。

空は晴れていたのに、雨に降られた。それも随分局地的な……いや、雨という表現もよく考えれば正しくない。その液体は嫌に生暖かく、そして染色されていたのだから。咄嗟のことで思考が追い付かなかったのだらう。同時に、そんなものが降ってくるはずがないと思つたから分からなかった。

誰かの血液を、僕は顔に浴びたのだ。額に落ちた雫が鼻の上に流れていく不快感。粘膜に絡み付く異臭。

さらに次の瞬間には。

どさり、と、砂の入った袋が高所から落下したみたいな音を背後に聞く。嫌な音だった。まるで落ちてきてはいけないものが落ちたような、聞いてはいけない音のようでそれは、どうしてか水分を感じさせる感じの音に聞こえないこともなくて。

恐る恐る、背筋の凍る思いで振り返る。故意にゆっくりと。なにがあるかを知っているから、時間を掛けて。いつもいつも思っていること。

「なんで……だよ、そんなの」

嫌な予感はいつも毎回、期待を裏切らずに的中してくれるのだ。

——うつ伏せに倒れて静かに血溜まりを作りながら、そこには制服を鮮血色に染めた遙風輪廻が落ちていた。

両手と両足を広げて、花を模るような歪な体勢。幸いというべきかそれはまだ関節の稼働範囲で可能な方向を向いていた。もっともその繋がる体が二度と動かないとしたら、そんなことは何の救いにだってなりやしないのだが。せめて原型を留めたまま地に伏すなら、この旧都においてそれは幸運なのだ。

冷静に、彼女の死を検分するならそんな結論を下すことが出来ただろう。

だが、そんなことが出来るはずがない。昨日の今日だというのに、まるで初めてする体験のように、自分で自分の感情を抑えきれなくなる忘我の衝動。無意識に足取りは血溜まりに向い、彼女の体に触れる。血に濡れた白い顔。静かに目を閉じた、その表情。

心臓の辺りから斜めに、鋭利な刃が振り上げられ辿ったであろう軌跡。それは深い溝になって遙風輪廻の体に刻まれていた。それだけで十分致命傷に成り得る傷跡を目でなぞる。首筋の辺りに到って、それは止まっている。

傷だけではない。落下の衝撃もまた、遙風の人体に多大な影響を及ぼしているはずだろう。

腕に抱いた体を持ち上げようとする。その時、だった。

そつと、赤の滴る白い指が、頬に触れた。

「……十字。ごめん、約束、守れなかった」

薄く目を開いて、生気のない声で遙風は言う。

「話……あつたんだろ？ いいぜ、聞いてやるくらいの時間は、あると思うから」

「お前……そんなこと言ってる場合かよ！」

肩を抱いて、体を起こす。口元から一筋流れる鮮血。落下した際の衝撃が血を逆流させたのだろう。見れば、遙風の目の焦点があつていない。いつもの覇気にも似た眼光が存在しない。胡乱な黒目が朧な幻を見詰めるように、

「なんだよ……話、あるんじゃないのか？ ……ああ、それともオレにじゃなかったかな……」

「違う……。違うんだよ、遙風。そんなこと、今はどうでもいいんだよ！」

急いで、遙風を担ぎ上げる。

まだ生きていた。間違いなく、遙風輪廻はまだここにいる。なら助かるかもしれない。話なんてどうでもいい。誰が、遙風輪廻が殺人鬼だった？ ……冗談じゃない。誰も殺してやしないじゃないか。遙風は自分への殺人衝動を、ずっと我慢してきたんだ。

「なあ十字……オレさ、いつかは自分がここにいらなくなるって、思ってた」

「……何でさ、そんなこと」

「遙風輪廻が、ここにいられるように。……オレ達はさ、いついなくなってもいいようにって、出来るだけ未練は残さないようにしてたんだ。誰とも必要以上に関わりを持たず、大切な物を持たないようにしてきた。何だって捨てられるんだよ。オレ達は……遙風輪廻は『何かを大切にすること』が出来ないようにプログラミングされてた」

中学を卒業して、突如栄光を捨てたトップランナー。

多くを魅了し、なのに自ら失速したスプリンター。

「だってのにさ……お前が、いたから。捨てられるわけがなかったんだ。遙風輪廻にとって、久刻十字は全部だったんだよ。……だから、どちらかが消えるしかない。どちらかを、残す為に」

言い終えて咳き込む。肩に遙風の血が染みていく感覚を覚えた。

「もういいから、喋るな遙風！　すぐ新都の病院に連れてってやるから……！」

「……十字、あのさ」

喋るなど、言っているのに。

「……こんなこと言ったらきつと後悔すると思うんだけど、どうせ最後だから言っておくよ」

呼吸は落ち着いて——否、荒っばかった息が少しずつ消え初めていた。

「嬉しかった。何もないまま空っぽにならなくて——お前がいてくれて、よかった」

「……遙、風？」

「じゃあな、十字……ありがとう、ここに、いてくれて」

かくり、と首を折る。俯くように、泣いている顔を隠すように。

肩に感じる温もりが、その濡れた温かさが遙風の血なのか涙なのかは、僕には分からない。そして、それを知っているだろう張本人は、その体を何度揺らしても返事をすることはなかった。

*

絶望の中にあつて、けれど希望を抱かせる鼓動は微かに聞こえていた。

意識の落ちた遙風の体はしかし、まだ死んではいなかったのだ。まだ心臓は脈を打ち、全身に血液を巡らせている。空前の灯火とい

える命かもしれないが、細い呼吸は確かにまだ続いている。このまま放っておけば助からない傷だが、治療すればまだ助かる状態だった。

遙風を背負って、半ば引き摺る形で運んでいく。意識の途絶えた人間を運ぶのは予想以上の労力を必要するらしいことが分かった。まるで無意味な学習だが。そんなことを考えていないと、正気を保っていられそうにない。

廃墟の角を曲がる。大橋までは後少し。

突き当たって左、瓦礫の形成する迷路の角。その先に。

天門坂一月が、啞然とした表情を貼り付けて立っていた。

「天門坂……頼む、ちょっと肩貸してくれ。まだ息が——」

皆まで言うより早く、天門坂は動き出していた。瞬く間の加速は、一步の踏み切りで十メートルほどあった距離を一秒でゼロにする。かのスプリンター二人でさえ驚愕するだろうロケットスタート。だが、これに箱崎が惹かれるかどうかと考えれば答えは否。——天門坂の速さは、そもそも質が違う。

それは運動としての加速ではない。

それは——殺人としての過程的動作。殺戮衝動に明かせた、殺人のツール。

「天門坂、待て——」

一秒後の未来が見える。蒼い瞳に見入られた久刻十字の四肢が断絶される光景が容易く瞼に浮かんた。——本気の殺意を携えて、あの夜と同じ、天門坂一月は凶刃を手にして久刻十字の懷に踏み込む。ふわりと舞う長髪。疾駆は時間の逆走染みた速さを伴い、急停止した体は無駄な動きの一切を排除して、その瞬間その体はただ目の前の存在を殺す為だけの兵器と化す。瞬きと共に閃く銀色の一閃が虚空を流れ切り裂いていく。刃の向かう先は狂いなく僕の喉元。頸動脈への致命傷を狙った一振りが、眼下から跳ね上がる。

「——ッ！」

回避出来たのは神の気紛れか運命の悪戯。どちらにしる僥倖であ

ることに変わりはない。飛び退いた負荷は想定範囲を軽く嘲笑い――遙風の体の重みの分を忘れていた――無理な跳躍に背中から倒れてしまう。

「待てつて、天門坂落ち着け！」

理性をなくした瞳が語る。――何も、聞く気はない、と。そう告げている。

「……この、野郎」

天門坂の体が飛び上がった。座ったままの体勢ではその跳躍が一層大きなものに見えてしまう。しかし目を引くのはその尋常でない運動神経ではなく、彼女が頭上に振り上げたナイフ。切っ先をこちらに向け、振り落とされる瞬間を待つ殺意の煌めき。

本能で飛び退いた。足掻くような、無様な抵抗をしてしかし命を繋ぐ。躲せるはずのない一撃。久刻十字は奇跡的にそれを回避できた。あるいは、それは。

隕石の落下。少女の細い身体が降ってきただけで、それだけの迫力を与えられる。耳を劈く金属音。大気と刃の振動。柄を握った力がどれほどのものかにも依るが、これではナイフを持つ天門坂にも衝撃が伝わってしまったているはずだ。攻撃にしては杜撰の一言に尽きる。芸術的な身のこなしに反して、殺しのその瞬間、殺意の爆発する決死の一瞬に彼女は乱れていた。

思えば、これまで何度も天門坂のナイフを避けられたのは、偶然でも奇跡でもなかったのかもしれない。

「……なんで」

震えていたのは、彼女の声だった。だらりと下げた手にナイフを持って、幽鬼のように揺らめく動作でこちらを向く。奥歯を噛み締めた悲痛の表情が、泣きそうな目をして僕を睨んでいた。

「……天門坂」

「――なんで、殺せないの――！」

爆ぜる少女の体。相変わらざるの異常な加速。一度の踏み切りがそれだけで最高速の到達を図る。その流麗な、蒼い瞳の輝きと黒い髪

の閃光に似た軌跡。何一つ無駄も迷いもない直線だというのにただ一つ、最後の瞬間にだけ――

「そんな………なんで、なんで………！」

――禍々しい殺意は何故か、久刻十字の喉元を目前に狂い出す。あるいは迷いとも言えるのか。今度こそ僕は自身の意思とは関係のないところで、一切の動作をなしに彼女の殺意を躲した。

ナイフは顔の横に突き立てられている。横目に窺うと、汚れのない銀の刀身が瓦礫の壁に突き刺さっていた。

「わたしは……貴方が憎いの………アンタを殺したいと思ってるのに………！」

どうしてこの手は、言うことを聞いてくれないのか。そう、自らに問い掛けるような悲しい叫び。

「ずっと憎かった、わたしの姉さんを奪って助かったアンタが恨めしかった！　ずっと殺してやりたいって思ってたのに、なんで、わたしは………わたしには――」

きりきりと、音がしている。鳥肌の立つ、嫌な音。ナイフの先端がコンクリートを削りながら立てるその音に引き摺られながら、遂に天門坂は膝を屈した。からんと鳴って地に転がる凶刃。泣いているような声が、俯いた彼女から聞こえてくる。

「……殺せるわけないよ。わたしを、許してくれるって言ってくれたのに。人並みに扱ってくれたのに――こんな、復讐なんて」
ゆっくりと、顔を上げる。

「ごめん、久刻くん。……わたしには、貴方を殺せない。殺したいなんて、わたしが破綻しない為の言い訳だったんだ」

殺すつもりなんてなかったと、それは許して欲しいと懇願しているわけでもなく、そうしないと壊れてしまう自らが悲しいと泣いているだけ。

「だけど――」

不意を衝かれた。その一瞬、確かに僕の意識は弛緩していたのだ。肩に感じる激痛。痛みに呼応して滲み出す傷口の焼けるような熱。

何が起こったのかを理解するのに必要以上の時間が掛かってしまう。純粹に驚いた。そう、天門坂が振り上げたその今は赤を付着させる刃に感じたのは恐怖ではなくて驚愕。有り得ないと、それだけを思った。

「——だけど次に会ったら、殺しちゃうと思うから。……これで、さよなら」

「天門……坂」

痛みに膝を折ってしまう。跪いた姿勢で、おそらく苦悶に歪んだ表情をしていただろうその顔で天門坂を見上げる。

彼女は、

「だから、もうわたしの前に現れないで——わたしは、貴方を殺したくない」

優しい笑顔に、斬られた僕よりも深い痛みを背負っているような悲痛を滲ませて、涙を流して泣いていた。

/ ?

/ 5

温かい腕に抱かれた夢。

絶望の夜に輝く始まりの月。

彼女の声を聞いていた。

嘆きに似たその声はまるで子守唄。懺悔を詠う悲しい唄。ならば、その腕は揺り籠か——あるいは寝具の類いでももっと他の、例えばもう目を覚まさない者の眠る箱の中。

だとしたらと思う。

——彼女の子守唄は、この街に送られた挽歌だったのかもしれない。

“ごめんね、私はキミを妹の代わりにするよ”

抱き締められた記憶。

一人だけが救われた夜。

本当の意味で言うなら——久刻十字はその日、死んでしまった。だから今ここにいるのは、彼女の夢。天門坂標月が生きていて欲しいと願った、人並みに平穏に暮らしていて欲しいと祈った妹の——その叶えられなかった望みの結晶。祈りの代用品でしかないのだ。そうして思った。この命の意味は、きっと彼女への贖罪の為に残されているのだと。

悲しくもそれを、僕は認めた。

...

結果から言つて、遙風輪廻は一命を取り留めた。

旧都の外に出るなりこれほどにないタイミングでやってきた救急車に乗せられ、僕と遙風は病院まで運ばれた。そのまま遙風は集中治療室へ、僕は車内での応急処置のみで大掛かりな治療は施されていない。切り口が綺麗なものだったために、搬送途中に処理し切れたのだという。ほとんど止血されただけの治療だったが、確かに僕はそれで十分だ。最初から重症を負わせるつもりなど、これを刻んだ本人にはきつとなかった。これはただの警告。あるいは願いの形。もう二度と、こんなことをさせないで。そんな少女の悲鳴。

遙風はその深い切り傷よりもむしろ落下の衝撃を頭に受けたことが重症となつたらしく、昏睡状態で一晩眠り続ける結果となつた。容体が安定したのは朝日が昇り始めた頃である。病院の廊下で彼女の治療が終わるのを待ち付けていた僕は、そのことを担当医から聞かされて胸を撫で下ろした。

と、そこまでなら何もかもが上手く行つたと言えるのだが。

僕が頭を抱える事象はさらにもう一つ、存在している。それがこの体に刻まれた傷跡を作つた天門坂のことであることは言うまでもない。天門坂は僕を斬り付けた後、そのまま闇の中に溶けるようにして消えてしまった。その背中を追いかけるだけの体力は残されていないが、それでも僕が優先したのは遙風の方だったのだ。

仮に天門坂を追いかけていたとして。

その後姿に、何と声を掛ければよかったのだろう。

次に会つたときには殺す、と。そう言つた少女に。今まで何度も脅すようなことは言われてきたが、実際に傷を負わされたのは今夜が初めてだった。だからその言葉がいつも以上に重かつたのかと問われれば、僕は首を横に振るだろう。

傷よりも心を縛つたものがあつて、それはあの――絶望に涙を流す強がつた少女の笑顔。

あんな顔をされては、何も言えるはずがない。心からの懇願を無

碍にすることなど、出来るわけがないのだ。気丈に振舞い続けた彼女が、初めて見せてくれた弱さだったから。だからこんなガラクタの命など、どうでもよかった。失うのなら、殺されるとしても、天門坂ならばそれも構わないと思う。

ワンコール。

二度目の着信。

昼間に見たものと同じ番号が液晶に表示されているのを確認して、咄嗟に怪我をした右腕を勢いよく振り上げてしまう。端末を落としてしまうほどの痛みを黙殺して、通話ボタンを押し込む。直前に感じた激痛をおくびにも出さないように、声だけは落ち着き払って平常に努めた。

「……天門坂」

名前を呼ぶ。無駄な前置きなど必要ではなかった。その声が早く聞きたいと焦る気持ちだが、意味のない定型句を省略させる。

『分かったことがあるのよ、聞いてくれる？』

そしてそのことは互いに同じであるらしく、前触れも前置きもなしに声は本題を促してくる。伝わらないと分かっている、小さく頷く。声を出すと、動揺が悟られてしまう気がして、つまらない意地を張った。

『わたしね、勘違いしてたことがあったみたいなんだ。まずはそのこと、謝りたくて』

「……それなら、僕じゃなくて遙風にだろ。あいつは、殺人鬼なんかじゃなかった」

疑われた矢先に一歩間違えれば死に至るほどの重傷を負わされた。都合のいいタイミングではあっても、それは何よりの証拠。遙風輪廻は殺人鬼などではなく、ただの被害者だ。この連続殺人に関して、七年前から続く『箱庭プロジェクト』に関しても。一片の間違ひもなく遙風は被害者側の人間と言える。

そう主張する僕を天門坂は一言で否定した。

『違うのよ、そうじゃない』

なにが違うというのか。携帯を思わず強く握ってしまい、端末の軋む音と共に傷口に痛みと熱を感じる。苦悶を押し殺して、声に出さずにそれに耐えた。

『考えてみてよ。連続殺人の被害者は、姉さん……久刻標月を除いては全員貴方に関係のない人物だった。それが何故、この二日で連続した殺人の被害者は二人とも貴方に近い人間だったのか。……つまりね、これは連続殺人なんかとは関係がなかったのよ、初めから』
全ての仮定を覆して、展開される天門坂の推理。

その先が読めてしまつて否定したくなるが、その間を与えずに天門坂は矢継ぎ早に続ける。

『箱崎外流と、遙風輪廻。この二人の殺害はこれまでの事件を真似た模倣犯の仕業なのよ。旧都という瓦礫の街で行われた、誰かの復讐。それが都合よく連続殺人に符合しただけ』

「……なにが言いたいんだよ、お前」

『なにが言いたいのかなんて、そんなこと——本当は分かつてるでしょ？ アンタはお人好しだから、気付かない振りをしてるだけよ。全部分かつてて、否定してるだけ。自分で認められないなら、わたしが言つてやるわよ』

苛立ちを堪えた声が、調子を荒げて言った。

『これは久刻十字への復讐。その周囲の人間が襲われたのは、それで説明が付く。なら誰がそれをしたのか、簡単よね。連続失踪事件が、連続殺人であると知っていて尚、被害者の状態を把握している人物。それに該当して貴方に復讐する理由を持っている人間なんて、一人だけじゃない』

声には抑揚をつける話し方。思うのは二度目だ。

だけど今度は本当に、この声に装うところはなく事実として、天門坂はそれを言いながら。

『これは、天門坂一月の復讐。久刻十字への復讐だったのよ。逆恨みから、自分が破綻しない為に繰り返した自分勝手な殺戮。ねえ、分かつてたんでしょ。本当は全部、アンタは分かつてたのに、何も

言わなかったんでしょ」

僕は、何も言わなかった。

『久刻十字の周りにいる人間を殺して、貴方を一人ぼっちにすることが目的だった。少しでも貴方にわたしの味わった七年間を感じて欲しいと思った』

僕は、何も言えなかった。

『殺したいほどに憎んでいるから、一思いに殺さずに首を絞めるようにして、静かに復讐を進めていた』

僕は、何も言わない。

『孤独の中に叩き込んで、絶望の中、罪悪感で八つ裂きになった貴方を殺そうと思った』

僕は、何も言えない。

『少しでも苦しみが長く続くように、何もかも奪い去ってやりたかった——！』

僕は。

久刻十字は、

「……ふざけんなよ」

傷が痛む。また血が出ているのかもしれない、そんな熱を感じる。熱いし痛い。けどこんな痛みなど、なんでもない。天門坂が受ける苦痛に比べればこんなものはなんでもない。だからこの憤りの半分は久刻十字に向けたものだ。図々しくも自分が被害者であるかのように訴えるこの傷口への憤慨。

そしてもう半分は、天門坂への腹立ち。

思い描いてしまった。思い出して、しまった。

泣きながら顔を歪めて不器用に笑う、強がりな少女の姿を。

「馬鹿なこと言うなよ。お前じゃない。絶対に、天門坂、お前は誰も殺しちやいないんだよ。勝手なことばかり言ってるといい加減に怒るぞ、天門坂」

既に発憤はゲージを振り切っているが、なるたけ声には表れないようにトーンを抑える。

「お前は誰も殺せない。僕を殺せなかったように、他の誰も殺せないんだ。あの地獄を知っているお前だから、人の死がどれだけ大切なものかを知っているから。自分勝手な復讐だと？ 笑わせんな。そんな理由でお前が人を殺すはずがない。天門坂、だって君は——何度やつても、僕を殺せなかっただろ」

「……バカ」

「僕はお前を信じるよ。天門坂が誰も殺していないって。君がなんて言ってもそれだけは譲れない。絶対に認めてやるかよ」

「……この、バカ！」

先に爆発したのは、天門坂の方だった。

「何を根拠にそんなことが言えるのよ！ どうして——自分を殺そうとした相手を信じるなんて言えるのよ！ アンタから何もかもを奪った震災は、わたしの所為であの街の崩壊は起きたのに！ そのわたしを、天門坂一月をどうして許容できるの！？」

「だって、それでもお前は——」

「人なら殺してる。もう七年も前にたくさん。あの街に消えた全ての命は、わたしが殺したようなものの！ とつくの昔から殺人鬼に成り果ててた。終わりの月は街一つ分の鮮血を以って満たされたのよ。なのに……なのにアンタを恨むことで——自分の境遇を嘆く振りをして破綻しないように的のない復讐を企てて——」

「——泣いてたじゃないか。その全ての死を悼んで」

天門坂の叫びが止まる。

「お前の言う通り、僕はお人好しだよ。でも君はそれ以上に、優しいんだ。だから罪の意識に耐えられなかった。裁いてくれる存在がなかったから、苦しんだ。それなら、僕が——」

「………いいよ、もう。何も言わないで」

悲しみの果てに、全ての感情をなくした声が絶望の響きを奏でる。これ以上の問答は不要と判断して、あるいはこれ以上は無意味と思考して、断ち切るような拒絶の声がそれ以上の発言を遮る。今までもよりも低い、唯一あった声の抑揚もない平坦な声がピリオドを打

つ。その先にあるのは、後書き染みた少女の嘆きだけだった。

『遙風輪廻をどうするかは、貴方に任せる。彼女が犯人だとしても、わたしにはどうこうする権利はもうないから。それと、貴方と話するのはこれが最後。もう会わないし、話もしない。……これ以上わたしに関わっちゃダメだよ、十字。だって、わたしは『終わりの月』だから。あの実験で生まれた、終焉のカタチは無自覚に周囲を巻き込んで全てを終わらせる。このままだと本当に、久刻くん、貴方の何もかもが終わるから』

別れの言葉が、二人の関係を終わりに導く。

それを阻止する為に僕は、無理矢理自らの意思を捻じ込もうとして、

「……………聞いてくれ、天門坂」

『バイバイ、久刻くん。ごめんね、いっぱい苦しめて』

やはり、それは認められず、残ったのは無機質な機械音だけ。通話が切れたことを示す一定間隔のその音を聞きながら、それでも僕は口にする。冷たくて暗い、夜の病院に残響するその声はどこか濡れているようでしかし感情を感じさせなかった。

「僕は、君が好きなんだよ。殺されたって、構わないくらいに」

誰にも聞かれることはなく、誰にも届くことのない告白が暗闇に溶けて消失した。

*

翌朝医師に告げられて、目を覚ました遙風の病室を訪れた。親族が出入りした痕跡はなく、実際尋ねてみたところ病室に入るのは僕が最初であるらしい。遙風の保護者を名乗る人物は電話だけを掛けてきて、その体に問題がないことを聞くとそれだけだったと言う。確認したかったのは、遙風輪廻の状態なのかそれとも『箱庭プロジ

エクト』の経過だったのか。

思うところは数多くあったが、僕がそれをごちゃごちゃ考えても仕方がないので何も考えないようにする。今は意識を回復した友人に会えることを素直に喜ぶとしよう。この時だけは全てを忘れて。遙風輪廻が連続殺人鬼であると語った天門坂のことも、その天門坂から突きつけられた絶縁状も考えない。

個室の扉を一応ノックする。返事がないことは分かっていたので、少し時間を空けてから自己判断で入室した。部屋の中を描写するなら、それはやはり誰もが想像する病室そのもので、殺風景でもない広い空間に白の装飾が目立つといった具合。壁、天井、カーテン。部屋の雰囲気を作り出すそれら三種のアイテムが全て白。病的なまでの、白色。

遙風は、これもやはり白いシーツのベッドの上で上体を起こしていた。僕の入室に気付くなり、閉め切られた窓から視線をこちらに変更する。普段通りの気さくさで、片手を上げて挨拶。遙風は表情を変えないで頷くような仕草で返事をくれる。

「よかったよ無事で、退院にはもう少し時間が掛かるみたいだけど」「そうですか。……来てくれてありがとうございます、久刻くん。申し訳、ございません」

「いやいや、僕は遙風のいるところならどこにだって現るさ。一日に一度君を視界に納めないと生きていけない依存症なものでね。ここに来たのも僕自身の生存の為だから気にしなくていいよ」

「いえ……そうではなくて……その」

遙風の視線は戸惑うように、僕の肩口周辺を彷徨っていた。言わずとも理解に及ぶ。一晚病院の廊下で過ごした僕は着替えなどしておらず、切り裂かれた制服はその切り口を鮮血で赤く汚しているのだ。その下を包帯で巻いているのは見えないとしても、何があったのかは自分の状況と照らし合わせて一目瞭然である。

「なんだ、いや、これは近所に凶暴な猫がいてね。襲われちゃっただけなんだよ……」

……苦しいか？

「久刻くん、冗談は止めてください」

指摘されるなら止めておこう。

……よく考えてみれば、気を遣って冗談なんて言っている場合ではない。謝らなければならぬのは遙風ではなくて僕の方だ。怪我をしているのはお互い様。だが、その程度は比べ物にならない。殺す為の傷と、脅す為の傷。軽症は僕の方。それだけでなく、遙風が怪我をしたのは僕の所為なのだ。

「僕の方こそ、ごめん遙風。僕が君を旧都に呼び出したから、こんなことに」

「了承したのは私です。久刻くんが気にすることではありません。それにこれをしたのは久刻くんではないのですから……この傷は、私自身が望んだ結果です」

そんな、訳の分からないことを遙風は言った。

「カーテンを開けてくれますか、久刻くん。自分では出来ないので、お願いします」

遙風は逆手で窓側の肩に触れて、小さく笑って見せた。動かすだけで傷が痛むのだろう。昨日の自分を思い出すと、よく分かる。僕は言われるままカーテンを開けて窓の視界を開く。外の景色は灰色の雲。雨でも降るのか、この寒さでは雪も降るかもしれない。病室は三階。目を凝らせばその果てに瓦礫に埋もれる旧都が望める。

灰色の雲を眺めて、あるいは窓に映る自分の虚ろな黒い瞳を見詰めて。独り言のようにぼつり、と遙風が零したその言葉を僕は聞き逃さなかった。

「遙風輪廻の在り方は彼が話して知っていますよね、久刻くん」

遠い昔のことのように、それは奇妙な語り口だった。遙風は昨日の彼女、彼を他人のように言う。それが違和感の正体だと気付くのに数秒。そこから最悪の現状を連想するのには、昨日の遙風と交わした最後の会話を交えた回想を挟んだことでさらに数十秒遅れる結果になった。

「遙風輪廻は一人だった。二人でありながら、一人であることしか許されなかった。だから私達は常に自分を否定していたのです。そのことが双方の破滅に繋がることも分かっていたのに。いつ消えてしまってもいいように、繋がりはずつ消してきたつもりです。自分のことですから、終わりが近くなれば分かります。少しずつ、少しずつ捨てて、空っぽになる予定だったのに」

窓から目を離す。遙風の視線が捉えたのは僕だった。

「あなたがいたんです、久刻くん。遙風輪廻の中にはあなたがいた。そしてそれだけではどうしても、遙風輪廻には捨て切れなかった。例えば自らと比較しても、守っておきたいと思える存在でした」

——お前が、いたから。捨てられるわけがなかったんだ。遙風輪廻にとって、久刻十字は全部だったんだよ。……だから、どちらかが消えるしかない。どちらかを、残す為に。

「だから、どちらが消えるしかない。どちらも消えてしまったら、遙風輪廻の中の久刻十字は永遠に失われてしまうから。それだけは嫌だったんです。私も、彼も」

同じだ。やっぱり、遙風輪廻は同じなんだ。

悪いのは誰か。

何度も繰り返したその問いかけに、今なら答えられる。紛れもない、久刻十字だ。遙風輪廻を苦しめていたのはこの僕に他ならない。何度も彼女は遠ざけようとした。もしもの可能性があったから。空白だらけだった彼女の中には他人が入り込む隙間が、その意思に反して幾つも存在していると、遙風輪廻は知っていたのだ。なのに、僕は。

「……間違えないください、久刻くん。私は決してあなたを恨んでなどいません。むしろ感謝しています。だって、何もなかった私の唯一になってくれたのは、生まれて以来あなただけでしたから。それこそ、自分を捨てても構わないと思えるくらい」

優しく笑っていた、その少女。

失くしてしまったと分かっているはずなのに、遙風輪廻はもう一

つだけなのだと知っているはずなのに。……そんなこと、他人の僕にだって分かる。もう彼がどこにもいないこと。それを彼女が気取られないように努めていることも。

遙風は、まだ動くその手を傷口の上に乗せた。目を閉じて、そこにあつた何かを思い出すように。

「だから、彼がしなければ、私がしていました。——たまたま、その機会が彼と重なっただけなんです、久刻くん。嬉しいんですよ、私は。自分を捨てても、守りたいユメが遙風輪廻の中にあつたことが。ですから、これは——」

押し殺した感情。閉じた瞳、噛み締めた唇。傷口を覆った包帯を強く握って、両肩を——全身を震わせる少女。遙風輪廻は、嗚咽の混じるその声で言った。

「悲しくて、泣いている訳ではないんです」

様々な遙風を見てきた。僕らが過ごした時間など、その生きてきた年数と比較すれば微々たるものでしかないだろう。それでも僕は曲りなりに彼女の傍にいて見て来たつもりだった。遙風輪廻を、すぐ近くで。廻り廻って移り変わる季節のように、変化するその表情も全部。

ぶつきら棒にため息を吐いた彼。冷静沈着に振舞いながらも、時折その表情を朱に染めた彼女。慇懃な言葉で罵りつつも、最後には互いに笑いあつて破顔した少年のような彼の表情。強く凛々しくも、歳相応に綻ぶことを知っていた少女の一面を失わなかった彼女の表情。

だけど、一つだけ、見たことがなかった。

遙風輪廻が涙を流している姿を、悲しい色にその顔を染めた表情を、久刻十字は知らなかった。

大粒の涙が、包帯を濡らす。指先が震えて、どれだけの力でそこを握っているのか、想像することも出来ない。きつと痛みに耐えて

いるはずだ。体の痛みと、心の痛みに。涙は代償のように、流れ落ちる。

「少しだけ、後ろを向いていてください。直ぐに済みます。……直ぐに、元通りになりますから」

掠れる声が紡いだ、精一杯の強がり。虚勢だと見抜くことは簡単で、けれど彼女の抱えている心中を測ることは出来なかった。痛々しい姿。寒さに耐えるように震える細い体。止まらない雫。強く努める泣き顔。

僕に出来ることは、いつものように彼女の隣にいて。

「……久刻、くん？ ……後ろを向いていてくださいと、言ったのに」

「悪い、遙風。でもさ、悪いけど僕は自分勝手なんだよ。でもいいだろ、これなら顔は見えないから」

傷口を握る手を掴んで、患部から遠ざける。余計な痛みはやつぱりない方がいい。

きつく抱き締めて、そこにいる少女を感じていた。同時に、そこにはもういない彼の存在を思い出す。無邪気に笑っていた、少年のような彼。最後、歪に笑って目を閉じた久刻十字の友人。……そういえば、彼は友人未満と称していたっけ。それでも構わない。彼がなんと思おうとも、僕がどう思つかは自由なのだ。

「……本当に、勝手ですね。……こんな時くらい、私の頼み聞いてください」

「こんな時だから、聞けないんだよ」

答えは、まだ見付かりそうにないけれど、抱き締める強さが一方的でなくなったこの瞬間だけは思えた。——遙風輪廻に声を掛けたことは、間違いではなかったと。一人だけでいなくなるうとしていた彼と彼女の傍にいられたこと。僕はそれを幸福に思う。

「……遙風、教えてくれ」

不謹慎でも、訊かずにはいられない。

もう何かを失うのは嫌だから。これ以上、何一つなくならないよ

うに。終わらせない為に、決着をつけなくてはならなかった。僕は尋ねる。一連の終わりに繋がるその真相を、彼女に問う。

「――旧都で、誰に会ったのか。誰に、その傷を付けられたのか、話してくれないか」

十

七年前の傷跡。今尚残される震災の爪痕はしかし、それでもあの夜の凄惨さを示す上ではまだまだ足りないと思う。あの夜は正しく終わりだった。全てが壊れていく、崩壊していく経緯が連結する終焉。誰もが逆らえなかった運命染みた破滅。

灰色の空に昇る月はなく、冷え込んだ世界に音はなかった。

僕はその空の下、旧都災害跡地を訪れた。ある一つの結末の為に螺旋のように廻り続けるこの復讐に幕を引く為に脚を運ぶ。世界は停止していた。こんな空で雨がいつまでも降らないのは時間が止まってしまったからだ、本気でそんなことを思う。

家の前から人影を追いかけて、大橋を渡る。入り組んだ瓦礫の道を歩く内、しばらくして僕はその人物を見失った。が、その人影の役目はそこで終わっていたのだ。もしかしたら自分が跡をつけられていると気付いていたのかもしれない。だからそこに辿り着いた時、先導の役目が終わった彼は姿を消したのだ。

ずるり、びしゃり。ぐちゃり、びちゃ。

――水音。生々しい、まるで掻き混ぜるように、引き千切るように。咀嚼するように嚥下するように。嬉々として弾む音に身が竦むのを感じた。何が起きているのかを想像するだけで、鳥肌が立つのを抑えられない。事実を直視してしまえば戻れないから。

一歩前に脚を進める。音の発信源に少しだけ近付いた。
びちゃ、ぐしゃ、ぐちゃくり。

止まない音。さらに一步。足音を殺すことさえここでは意味を持たない。角を曲がったところにその光景が待っている。もう一步身を乗り出せば視界にそれは飛び込んでくる。意を決して、僕は全身で角を曲がった。

瞬間。

信じられない光景を、およそ予測していながらもその凄惨さで想像の範囲を凌駕していた景色に怖気が走る。寒気が電撃になって背筋を流れ、本能的に自分の目を潰してしまいたくなるくらい、そこは常識を外れて異常だった。

理も道徳も無視した、それは一つの世界。蓋をして閉じた異界を内包する箱の中。

敢えて、その異界を言い表すとして、

有り体に言えば、ここは終わっていた。

鮮烈過ぎる真紅の飛沫。

四方を濡らす、美しいほどの赤色。

四肢を引き千切られた——否、喰い千切られた死体。

濃厚な死の臭い。

その、全てが終わった鮮血の囲いの中で、

——僕は、彼女に出遭った。

*

そこにいる少女を見て、僕は意識を抜かれたように立ち尽くした。分かつてはいたのだ。一つだけ想像と違っていたのは、肌で感じるリアルな死の気配。一面を真紅に濡らした四方の壁も、充満した死臭も、横たわる傷だらけで四肢を失くした死体も、何もかもが思い描いていたそれを遥かに凌ぐほど猟奇的だった。

びしゃり、ぐしゃり。僕のことなど意に介さず、少女は『食事』を続けている。

その度飛び散る赤い飛沫。……粹のいい、噴水染みた鮮血。人間の踊り食いと、その状況を形容してもまだ背徳性が足りないほどの異常。異界の中に在って、尚も壊れている。理の捻じ曲がった箱の中にありながらも常軌を逸した死のカタチ。

「……未美好ちゃん」

まだその名前を呼んで、振り向いてくれるかは分からなかったけれど。僕は僕の知っているその名前で、彼女に呼びかける他に為す術を持ち得なかった。果たして、白い顔に赤い血の化粧を施した少女が顔を上げる。彼女の好んで来ていた白色のパーカーも、今は赤の染色を逃れた部分の方が貴重に思えた。毎日変わる服装。未美好ちゃんが同じ服を着ているところを、僕は見た覚えがない。

つまりそれは、こういうことだったのか。

「お隣のお兄ちゃん」

理性を取り戻した瞳で、未美好ちゃんが口に出す。いつもと変わらないその声調にも関わらず、今日この時にこの場においては震える体を抑え付けることが出来なかった。

あたりと、血溜まりに座り込む齡十二の少女。その少女の姿に声が出ない。驚きよりも明確な恐れが、自分より一回り以上も小さな子供に与えられる。下手をすれば、数分後そこに転がっている死体は久刻十字の姿をしているかもしれないのだ。

背筋が震える。肩が跳ね上がる。

怖気づくように、無意識に働いた逃走本能から一方後ろに引いた時、その声が聞こえた。

「これが、君の知りたがってた真相だよ。久刻くん、感謝してください。君がついて来てることを知ってて、親切に案内してあげたんだからさ。……まあ、その内君にもばれるだろうと思ってたけど。タイミングとしては、丁度いいかな」

肩に乗った、冷たい手。

「枯……さん」

「驚いてるみたいだね。俺をつけてきたってことは、全部知ってるんだろ？　どうしてかな、聞かせてくれよ」

この異常な場においても尚、枯さんは微笑を崩さない。肩に手を乗せられいるだけなのに、全身を掌握されているような被支配感に吐き気を覚える。枯さんの笑顔が冷笑に見えた。逃げ出したい。ここにいれば殺される。

本能が叫んでいた。今すぐに全てを放棄しろ。そうでなければ壊れてしまう。だから早く、一秒でも早くこの異界から逃げ出せ。でないと久刻十字は間違いない――

「俺の質問、聞いているのかな？　久刻くん」

頭部に衝撃。痛みよりも脳が揺れる感覚に喉の奥から迫り上がってくるものが呼吸器官を塞ぐ苦しさに目が飛び出しそうになる。視界が揺れた。体の平衡感覚が失われ、立っていられない。ずるずると何かを伝って膝を突き、何が起こったのかを理解する。瓦礫の壁に、強く頭を打ち付けられたのだ。自覚すると余計に痛む。……無茶苦茶だ。

「あのさ、久刻くん。人とのコミュニケーションってのは大事なんだぜ。先に俺がこの光景を見せて上げたんだから、次は君の番だろ？」

獣染みた、人間の言語に成り切らない苦悶を自分から聞く。肩口の傷に激痛の再来。枯さんの脚がそこを踏みつけ、容赦なく体重を掛けてきている。拷問なんかではなく、それは僕が質問に答えるまでの暇潰し。発言しなければ無限に続く苦痛。

「……遙風が、教えてくれたんだよ」

痛みに耐えて、何とかそれを人の言葉にして吐き出す。枯さんの脚が肩から離れた。一瞬解ける緊張感。僕はその時、自分が無意識に呼吸を止めていたことに気が付いた。

「へえ、あの娘がねえ。俺としたことが、殺しそびれちゃったわけかな？　それとも助かる見込みがあったのか。彼女、遙風さんだっ

たよね。俺が殺気立って近寄ってることに気付いていた癖にさ、抵抗しなかったんだよ。でもな、殺せなかったのか。残念じゃないけど意外だな」

枯さんは、ジーンズのポケットからナイフを取り出してその切っ先を弄んでいた。その様子はまるで遙風のことなど意識していない、彼の言葉通り残念がつているのではなく不思議がつているように見えた。

「……ちゃんと、殺したさ、あんたは」

痛む肩を押さえて、片膝で体を立てる。見上げる姿勢になりながらも、目を逸らしてはいけない気がしていた。

「なんだそれ。分らないな、久刻くん。だったら君、誰にこのこと聞いたんだよ。……いや、まあ、何でもいいけど。今の俺が関心があるのは君だ。それ以外はどうでもいいよ」

やつとの思いをして、中腰に起き上がる。だというのに、枯さんはその行為から意味を剥奪するように体勢を屈めた。何をするのかと思えば、また僕の肩に手を置いて巻き付くように背後に上半身を回す。――凶器をその手に持った、上半身を背中に。

「ちよつと痛むけど、我慢してくれよ」

注射を打つ前の医者のようなことを言ったかと思うと――即座に、僕はその発言の意味を知る。思考よりも何千倍も早く、脹ら脛に感じる痛み。駆け上がってくる激痛に絶叫する。刃物が体内に侵入してくる感触。痛覚を刺激する、その冷たい鋭利な尖端。上下に少しずつ振れて、ようやく抜ける。異物が出ていくことで吹き出す血を、喘ぐような声を出しながら感じていた。

それがさらにもう一度。右と左の脚をそれぞれ丁寧に潰された。右の段階で痛みを意識が飛びそうになっていたのを、左の痛みで引き戻される。声が枯れるほどの大音声を上げて、痛覚から意識を逸らそうとする自分が惨めだった。

「少し、長い話になるからね。それとこの後のことで逃げ出されるのは困る。だから逃走手段を絶たせて貰った。……あれ、脚だから

手段つてのも可笑しいか？ いや、そんなこと。心配しなくても綺麗に斬っておいたから大人しくしてれば上手く塞がるさ、ただし、その肩と同じで無理は出来ないけどね」

地面に頬を付いて、上から降ってくるその声を聞いていた。視界に映るのは枯さんの靴の爪先。そんなところを睨んでいても何の抵抗にもならない。そう思った瞬間に引き上げられる視界。頭を掴まれて、強引に体を起こされた。枯さんはそのまま乱暴に、僕の頭を放り出すようにして瓦礫に凭れさせる。

「まずは……俺と未美好のことから話そうか。『箱庭プロジェクト』のことは知ってるだろ？ ある一つのコンセプトに基づいて人間を後天的に作り替える。そうすることで先天的な異常者を製造する実験。その結果も、聞いてるよな。俺と未美好もその実験の産物なんだよ。夜杜はね、天門坂に飼われていた被験家系だったんだ。素体の提供をしていた訳さ。未美好、こっちにおいで」

呼ばれて、従順な犬のように兄に駆け寄るツインテールの少女。未美好ちゃんが二足歩行をしていたことに安心した。よかった、この娘はまだ獣に成り下がった訳じゃなかったんだ。先刻の『食事』が礼儀正しい彼女にしてさあまりに乱雑だったから、理性も何もかもをなくしたのかと思っていた。

枯さんは駆け寄ってきた未美好ちゃんに笑顔を向けて、その頭を撫でた。血の滴る口元を拭いてやる様子が、どこにでもありふれた兄妹の食事風景にしか見えないのが異常だった。枯さんはにこやかな表情を一片も崩さずに、それをそのまま僕へと向けた。

「見ての通り、未美好は『食欲』をコンセプトに作り上げられた力タチなんだよ。そしてその食への意識は徐々に強大になっていったね、近頃では肉と見れば衝動が湧き起こるらしい。……困ったものだろ。妹を満足させる食事を用意する為に、俺は人を殺さなくちゃならなくなっただよ。満足しても一時的なものだけだね。人間の肉を生で食べて無事なほど人間の消化器官は優秀じゃない。大変なんだぜ、未美好の食事に付き合うのは。もっともそのお陰で、死体

の処理には困らなかつただけだね」

狂ってる。何もかも。この空間、隔離されて形成された今この場所の全てが完膚無きまでに狂い尽くしている。どこを見渡したって正常なものなんて在りはない。——狂った世界には狂った存在しか有り得ないのだ。踏み込んだ時点で諦めるしかない、ここに正常を求めることなど。それを理解している僕もまたやはり、狂っているのだろう。

「とはいえ、そんな厄介な衝動には流石に制限が付くのさ。これが実験の敢行側による配慮なのかは知らないけどさ。未美好の場合、この衝動は『閉鎖された一定範囲の空間に対象となる存在と一対になった時』に抑えられなくなるんだ。つまりこの空間だ。この箱庭染みた異界こそ、未美好の異常を造り出す空間なんだよ」

喫茶店から帰る時のあれは、なるほど確かに忠告だ。仲の良い兄妹だと思ってた、いつも行動を共にする理由もそれで納得がいくが疑問は残る。

この空間が未美好ちゃんを豹変させる要因だとして、もしそうなら他にも似たような状況は作られてしまっているではないか。そして夜杜未美好の衝動を抑える為に取っている行動も、また逆効果になるのではないか。例えばそう、あのアパート。どの程度の空間面積において衝動が起きるのは分からないが、ここで条件を満たすなら向こうでも——

「察しがいい君なら分かってるだろ。そうだよ、自宅では常に未美好は猛獣さ。でもだから何だ？ 人間は獣を飼い慣らす外道な生物だろ。サーカスでもよくやってる。獣を従えたいなら首輪を作ればいい、つまり力に依る蹂躪、支配だよ」

「あんだ……まさか」

徐に、桔さんは未美好ちゃんの服の袖をたくし上げた。白い肌が晒される。その細い腕を引っ張り上げ、未美好ちゃんの体が半分に浮いている。どれだけの力でそれをしているのか、ここに来て初めて未美好ちゃんが小さな悲鳴を上げた。

「あ……うぐう……ああ……」

目を固く閉じて痛みに耐える小さな姿。

「止める……！ あんた、自分が何やってるか分かってんのかよ！ 未美好ちゃんを離せ！」

「俺が、何をやってるか？ ……それを今君に見せてやってるんだろ、ほら見るよ、これ」

未美好ちゃんの細腕をなぞる指先。つつつ、と歪な線を示す。

「ここは一昨日。これは一昨日で、ここが先週。意外と綺麗に治るもんだよな。……あれ、そこからだと見えないか。腕は何かの拍子で見えかねないから控え目にしてるんだよな。——でも、これなら見えるだろ」

くるりと、まるで物のように未美好ちゃんを回転させ、背を向けさせる。あろうことか、さらにその上で仮にも兄である枯さんがしたことは未美好ちゃんの服を捲り上げるということだった。肩甲骨まで露になる少女の裸体。そこには、無数の傷跡が残されていた。「兄妹つてこともあつてね、俺達は上手く符合するんだよ。未美好の衝動が『食べる』なら、俺は『虐げる』なんだよ」

白い背中を撫でる手。骨盤の下辺りから這い上がっていく五本の指が途中にある傷口や傷跡、瘡蓋に触れて上へ上へと上がっていく。下着の紐を跨いでその上へ、首の下まで這つてようやくその手が止まった。続いて、その傷を一つ一つ丹念に舌で撫ぜる。手と同じ道筋を辿り終えて、枯さんは未美好ちゃんを解放する。また小さな悲鳴。虐待に耐え忍ぶ苦言を聞いた枯さんに睨まれて、未美好ちゃんがの身を縮める。捲られた服も下ろさないまま懺悔の面持ちで兄を見上げている。

虐げる——虐待と支配の図がそこにあった。

「俺の衝動は未美好と違って年中無休でね」

未美好ちゃんに微笑みを落とす。媚びるような目に満足したのだろうか。

「溜め込むのはよくないだろ、だから、未美好には発散の手伝いを

にやけた表情が、僅かに固く引き攣る。

僕に向けられていた視線が別の方向に行き、それだけでなく体全体を枯さんはそちらに向かわせた。

「君との話は少しお預けだ。先に下準備を調えよう」

大袈裟な仕草で両手を広げて、顔はいつもの微笑だが、彼の滲ませる空気は欠片ほどにも軽薄さを感じさせていない。高揚しているのは確かだった。だがそれはついさっきのような欲求の成就などとは関係なく、待ち焦がれていた何かをその視界に認めた時のようなそんな気分の高騰。その原因に、僕も目を向けた。

「ようこそ。待っていましたよ、天門坂のご令嬢。こうして会うのは二度目ですが——貴方はきっと覚えていらっしゃるのではしょうね。高貴なる、天門坂様」

敬うように頭を下げて、次の瞬間彼が灯した瞳の光は殺意のみを宿した怨嗟の暗く鈍い鉛の輝きだった。

そしてその敵意と殺意を一身に受けて尚も毅然と立つ、対抗するかのごとく蒼い目を綺羅星のように光らせる死神——天門坂一月は一振りのナイフを手にしてそこに佇んでいた。

*

「……随分、ぼろぼろだね、久刻くん。もう虫の息じゃない」

静かに憤る声が、僕に向いていた。

「ここには来るなって、言ったのに。約束、守ってよ」

「……なんだよ。もう会わないし、話さないんじゃないのかよ」
「知らない、そんなこと。もう忘れた」

あっけらかんと言いつけて、殺意の矛先が黒い殺傷衝動に放たれる。遠目にも分かってしまった。天門坂は怒っている。僕にしたように直ぐに飛び掛からない辺りが不思議に思えるくらいの、一触

即発を満たす空気の中で視線による殺意だけを相手に向けていることが信じられなかった。自身を必死に制御しているのか、それにし
ては落ち着いている。表情こそ強張っていても、そのナイフはいつ
までも待機したまま動かない。

黒い男が言った。

「来てくれて嬉しいよ。それに、君がまだ破綻していないこともよ
かった。既に壊れていたら虐げる楽しみがなくなる。お高く止ま
った天門坂様が涙ながらに赦しを請う姿を見る為に、俺は今日まで
色々と準備を重ねてきたんだからね」

かちやり、その手に握るナイフが音を立てる。もしも握られてい
たものが拳銃だったならば、彼は間違いなく既に引き金を引いてい
たことだろう。表面上の殺意は互いに拮抗し合い、ぶつかりあつて
充満する。一挙手一投足と一言一句に呼応して波紋を生み出す殺意
と殺意の停滞がはち切れる寸前の絶妙なバランスを保って蟠る。

「一応聞いておくけど、君、俺のこと覚えてる？」

一方的に話を投げ掛けているのはさつきから枯さんだけだ。天門
坂は視線に意思こそ籠めてもそれを威嚇以上のものとはせず、手に
持つ銀の強靱も無気力に地を向いている。ただこの質問にだけは、
それでは回答にならない。天門坂は目前の黒い存在を侮蔑する瞳で
睨み付けながら、ゆっくりと口を開いて返答した。

「知らない。覚えてない」

皮切り、あるいは口火とでも言うのか。

弾けたのは枯さんの方だった。天門坂のような常人離れた運動
神経を持たない、その肉体面では普通の成人男性でしかない踏み切
りはそれでも常識の範囲であるならば相当な速さと言えただろう。
少なくとも、普通ならば疾走の速度と剥き出しの殺気に当てられて
標的は初撃を躲すことが出来ないはずだ。仮に可能だったとしても
そこまで。反射の極致的な反応を以てして射程範囲を逃れても疎ん
だ体ではそれが限界。不様に倒れ伏すのが関の山だ。

しかし不運にも枯さんが標的としたのは常識の外にある存在。死

神の目が煌めく。無勢力に萎れていた腕が跳ね上がって——交錯、二つの刃が音を立てて交わった。共鳴するように光を放つ刀身。銀の閃光が描く軌跡。

天門坂はさらにナイフを弾いただけに終わらず、身を捻って枯さんの体を往なす体勢に入る。枯さんはナイフを上段から振り下ろした勢いを殺し切れていない。天門坂はそれを利用し、脚を捌いて枯さんの体を空中前転させる。無防備に晒される背中。急所を守るものは何もない。脊椎にナイフを突き立てればそれで全ては終結を迎える。

ゆらりとナイフを掲げて、位置を固定。落下地点を定めて後は一思いに腕を降れば決着。天門坂の目が細まる。音を立てる鉄の刀身。それは刹那の躊躇。決死を目の前にして乱れる彼女の殺意が上げた断末魔。

びたり、と。

ナイフの切っ先はそこで停止したまま動かされることは決してなかった。

「——っ」

舌を打つ。天門坂の一瞬の戸惑いが決着を破綻させた。

誰よりも驚いていたのは天門坂自身だろう。無表情を僅かに歪めたのを見て取り、そうして気が付く。彼女は誰に対してもあなのだ、誰かに対してではなく万人に。例えば自分が自分を殺そうと刃を突き立てる相手であっても、天門坂は殺せない。

——終わりの月。

彼女は終わらせる者であって、殺す者ではない。

万物を終焉に到らしめる終わりの具現。現象のカタチ。——それが、天門坂一月。

天門坂自身は死の重みを知っている。この瓦礫と廃墟に埋もれた街の破滅の一部始終を傍観していた彼女には、自ら人を殺すことなど出来ない。そのことは僕が彼女に訴えたことじゃなかったのか。——あるいはそれが原因で。彼女に気付かせてしまった。自分は、

誰かを殺すことを恐れていると。

天門坂の驚嘆の間に受け身を取った枯さんが起き上がる。奇妙にも延命した僥倖を無感動に享受し、寸前と変化のない殺意でナイフを握り直す。再びの疾駆。だが今度はさらに勢いがある。今の一撃で枯さんも気付いていたのだ。天門坂には人が殺せない、と、看破した。だから迷いなく懐に入って斬り合える。接近戦で反撃の恐れがないならば手数は多い方がいい。踏み込んだ脚をより深く。致命傷を与えるに十分な至近距離に迫り続ける。

「いつもだ。お前達姉妹はいつも俺達を見ているだけだった——！」
叫び、一閃。

鉄の弾ける音と彼の叫び。

「全てはお前達二人の為に行われた。俺も末美好も、他の多くの人間もだ！ 一人残らず実験の過程として、人間としての扱いすらされなかった」

嘆き、一閃。

閃光の煌めく軌跡と彼の憤り。

「それを覚えていなかった。そうさ。そうだろうなご令嬢！ お前にとつては俺も末美好もこの街の全てが踏み台でしかなかったんだよなあ！ 思い出せ、終わりの月。お前はどうかやって生み出された？ どれだけの犠牲を払ってここにいる？ 分かるか。分かるよな！ 全部だよ。この街の全部！ ここはお前の為に破滅した。ここに生きていた全ての命を殺して——終わりの月は数え切れない犠牲で満たされた——！」

一段と甲高い音が響く。斬り付けたナイフを弾く為に振るわれたナイフが軌道を誤って弾き切れなかったのだ。それだけではなく、力も足りていない。反応が遅れた分それだけ衝撃もまた大きくなる。不意に後退する天門坂。傾ぐ姿勢。一瞬だけ生まれたその隙を衝かれる。

「天門坂……後ろだ……！」

天門坂は失念していた。殺人犯はツーマンセル。二人一組の猟奇

殺人鬼。夜杜兄妹は黒の鳥だけではなく、白の木菟も含まれる。彼女を背にして防戦に回っていた時点で既に勝負は決していたのかもしれない。

未美好ちゃんの跳躍は、その体格から考えて異常な高さを記録していた。さらには繰り出された攻撃もまた常軌を逸している。理性をなくした瞳が振り翳す二本の腕が左右両側から天門坂の首元を襲った。凶器は爪。牙とならんで獣の武器とされる、無骨な刃。

「う——ぐう……」

苦痛に歪む天門坂の表情。飛沫のような鮮血が飛び散る。

着地した未美好ちゃんは尚も攻撃の手を緩めない。両手両足を地について四つん這いの体勢——それは大地を駆る肉食獣を思わせる姿勢で、凶器と化した爪が天門坂の脹ら脛を抉った。自分も同じ目に遭ったからこそ容易に想像出来る痛み。間もなく、勝敗は決した。天門坂が膝を屈する。足元に朱を落としながら。

「未美好の衝動は何も、限定条件下のみというわけじゃないんだよ。条件を満たすと制御出来なくなるだけで——本当はいついかなる場合においても、夜杜未美好は猛獣に豹変するんだよ」

息が荒い。狩猟の後で体力を使い切った獣が体を休めるように、未美好ちゃんは早い間隔の息を吐いて身体の熱を冷却している。矮躯に強い無理な運動。彼女が理性を奪われた獣となる代償は、決して小さくはない。

ぱたりと倒れた未美好ちゃんの異常な発汗。アスファルトに染み込む、天門坂の流血とそれが交わる。この閉ざされた空間の中、三人の人間が地に伏した。最後まで膝を折らずに、今現在全員を見下ろしている支配者。虐げるもの、黒の怪鳥。——夜杜枯が不気味に口元を三日月型に歪めた。

「いい様だね、ご令嬢」

見下す視線。脚を潰されても尚殺気を放つ天門坂を、不満げに見下ろして、

「その目はよくないな」

威圧的に言い捨て、天門坂の手首を爪先で蹴り上げる。無機質な金属音が反響して、天門坂のナイフが転がった。抵抗する術を奪われて、しかし未だ萎えない反抗の意思。今度は目に見えて不機嫌に、舌打ちをした枯さんが、天門坂の胸を爪先で打ち抜いた。

肺から漏れ出たような苦悶と悲鳴を上げて、天門坂の体が反り返る。さらにもう一度。今度は腹に食い込む蹴りを受けて、反った体はくの字に折り畳まれる。夜杜枯は、だがそれでも止まらなかった。自らも片膝を突き、目線を天門坂に合わせる。

前髪を掴んで顔の位置を固定し、その頬に往復で平手打ちを見舞った。掌が打ち抜かれる度に小さく零れる悲痛な呻き。必死に押し殺しながらも歯の隙間から出てしまう、その声を天門坂は憎らしげに聞いていた。痛みよりも、その暴力よりも、悲鳴を上げようとしている自分が気に入らないというように。

「止める……止めるって！」

何十発目かの平手の後、枯さんは天門坂を開放した。興味のなくなった玩具を投げ捨てるみたいに、無惨に転がる少女の体躯。頭蓋骨が地面に衝突する低い音が響いた。息を止めていたのか、咳き込む天門坂。白い頬に掠れた赤が付着している。それが誰の血液なのかは分からない。

息が上がっていたのは枯さんも同じだった。冷静に冷酷な表情を浮かべながら、肩を上下させている。だが自分よりも苦しげに呼吸を荒くする天門坂の様子に満足したのか、髪を掻き上げた枯さんはまた口元に歪な笑いを作り出した。

「そつえばさあ、一つ疑問にだったんだけどね」

くるり、とナイフを逆手に持ち直す。

「君、なんでさつき俺を殺さなかったの？」

それを問う男の瞳に感情の色はない。

それを問われる少女の瞳には、それ以上に色がない。虚ろで胡乱な、果てのない絶望が渦巻く空白みたいな孔が感情もなく僕を見ていた。目が合った気がして、けれどやはり偶然だったのだろっ。頬

を地に擦り付けるような姿勢が、たまたまこちらに顔を向けていただけだ。

「答えなよ。……ああ、そうかい。分かったよ。君は優しく扱われるのは趣味じゃないわけだね。とんだ変態だ。なら望み通りにしてやるよ。痛いのは嫌いじゃないみたいだから、ね」

言うなり、天門坂の胸倉を掴み上げる。引き起こされた体。付属された首はそこだけが別神経を経由しているように、力なく垂れ下がっている。まるで人形だ。天門坂の自我が、この時既に崩壊していた。

「ほら、じゃあ一回目だ」

喜色の色。唇を吊り上げ——なんの迷いもなく天門坂の肩口を斬り付けた。遙風と同じ部位。出血が吹き出す。返り血を浴びて光悦とする殺人鬼。その手に取られた人形は……天門坂はそれで意識を回帰させる。まるで痛みを感じる為だけに気を持ち直したように。今度こそ堪えることもなく、喉を切り裂く絶叫を響かせた。

「ははは！ いいじゃないか！ ちゃんと鳴けるじゃないか人外！」
加速する。虐待の手。食い込む刀身。吹き出す血液。飛び散る鮮血。木霊する悲鳴。

耳を塞ぎたい。目を背けたい。今すぐに駆け寄りたい。だがその全ての望みが僕には許されない。後者はこの脚が動かない所為。前者二つは、それをしてしまえば苦しんでいる天門坂を見捨てることになりそうだから。

僕は呪詛の言葉を吐き出して、歓喜する異常者を罵ることしかできない。

それさえ、彼の哄笑の前では微々たる振幅でしかなく、軽く飲み込まれて消えていく。無力だ。この場において久刻十字は悉く無力。声を上げて苦しむ少女を救うことも出来なければ、同じ苦しみを背負うことも出来ない。

のそり、と未美好ちゃんが体を起こすのが視界に入り込んだ。
血で湿った綺麗な黒色の光沢を垂れ提げ、まだ整わない息を調整

している。理性を取り戻した童女は、目の前で繰り広げられる虐殺から目を逸らしていた。硬く瞼を閉じて、体を震わせて見ないようにしている。

ざくり。嫌な音を聞いた。

最後、天門坂の嗚咽交じりの絶叫が聞こえた。

見れば、彼女は全身傷だらけだ。それはまるで多くの被害者のように。彼女と出逢ったあの夜に見つけた死体と同じか、それ以上。致命傷を器用に避けた無数の傷から滲み出る鮮血。細くて綺麗な腕も、脚も、腹にも、背にも、胸にも。唯一その端正な顔だけは避けられて、刻まれた傷の数は数えることを嘲笑うような多数。

喘ぐ声、辛うじて行える呼吸がそれを苦悶にして音を生み出している。枯さんが手を離すと、天門坂の体は無力に横たわった。

「さて、同じ質問だ。どうして、俺を殺さなかったんだ？」

横顔を踏みつけて、男が問う。

「答えるよ、終わりの月――！」

踏み鳴らす。鈍い音。耳を塞ぎたくなるなんてものじゃない。今すぐに鼓膜を爆発させたい。この目も、少女の存在を感じる全ての感覚器官を破壊してしまいたい。

「……………だって、嫌、だから」

虐げる、その蹂躪の中で、天門坂が言った。

「…………殺しちゃったら、戻れない、もん。十字が……………信じてくれるって、言って、くれたのに。裏切りたく、なかったんだ」

やっと気付いた。天門坂は僕を見ている。その、消えそうな眼光を絶やさぬように守りながら、傷付いた体を気にするよりも、それを為す術なく見ていただけの僕を。――何故か、大切な何かを見るような顔をして。死にそんな重傷でも、安堵したみたいに。

「天門坂…………お前、そんなことで」

「わたしを…………認めてくれたから、十字が。…………なのに、なにもかも捨てるなんて、出来ない」

「…………だからって、それじゃあお前が」

自分が、潰れてしまう。今にも消えそうな瞳の色を、失ってしま
う。

やっと、そんな人間らしい顔が出来るようになった癖に。

皮肉でなくても、強がりじゃなくても、笑えるようになったのに。
全部、消えてなくなるじゃないか。

「……いいんだよ、わたしのことは。これが……報いなんだから」
本当に、汚れた顔を本当に幸せそうに綻ばせて。

涙を流しながら、その少女は——笑っていた。今が幸福だと、こ
んな地獄よりも酷い世界の中で。強く、幸福を噛み締めて安堵した
少女の笑顔。初めて見せた、心からの欣喜。天門坂一月——終わ
りの月と呼ばれた少女が、おそらく七年振りに他人に明かした本音。
それを、足蹴にして、怒髪する黒い虐待。

「笑わせるなよ、終わりの月」

苦悶が少女の笑顔を破綻させる。

「なにが戻るだよ。どこに、戻るんだ？ 見てみろよ、これ。こ
の場所。全部なくなってるだろ。全部終わってんだろ。誰の所為か
分かってるよな！ お前だよ！ お前が原因なんだよ！ お前の所
為で死んだんだから、お前が殺したのと同じじゃないか！ それを
今更、何百の何千の幸せを破滅させたお前が——自分だけ人並みの
幸福を享受しようなんて、虫が良すぎるんだよ」

蹴り飛ばされる、少女の体。もう加えられる力に抵抗など出来な
くて、転がる体は瓦礫にぶつかって動きを止める。そうなった天門
坂は、死んでしまったように動かなかった。

「……さて、と」

濁った目が、僕を振り向いた。

「話の続きだよ、久刻くん。……あれ？ なんだっけ、まあいいや」
優しい、笑顔。いつもの隣に住んでいる話好きな青年の顔になっ
て、

「俺は別に、君を殺す気はないんだ。虐げようとも思わない。久刻
くん、俺たちは同志だ」

身を屈める。

悪魔のような微笑が、血に濡れた笑顔が提案する。

「天門坂一月を殺せ、久刻くん」

絶望の輝きで、赤く濡れた刃を光らせるナイフが、差し出された。

*

「なにを……言っただよ、てめえ」

沸騰する精神で、どうにかそれを言葉にする。

冷やかに笑って、黒いソレは答えた。

「意味はそのままだよ。君の願いを叶えてやろう、ってそう言っているんだよ。なあ、久刻くん。君、本当はこの娘が憎いんじゃないのかい？ 考えてみる。七年前、君は全てを失くした。奪われたんだ。あの震災に便乗した、忌まわしい計画の為に。君は元々狂ってなんかいなかった。普通に生きられるはずだったんだよ。なのに、家を奪われ、街を奪われ、家族を奪われ、生活を奪われ、人生を壊された。恨んでいいんだよ、君は。同情されるべきだ。報われるべきだ。狂ってしまった人生の——復讐をするべきなんだ」

真剣な表情で枯さんが言っていた。それは天門坂に向けて罵倒を紡いでいたときの顔ではなく、心から久刻十字の境遇を嘆いて共感している、そんな表情。

七年前の震災。

全てを失くしたあの夜。

……思い出せ、僕は、どうして天門坂のことを調べようとしていた？ 遙風に彼女のことを訊いたのは何故だ。この旧都で天門坂を見かけたから。そんなことじゃないだろ。彼女の姿が似ていたから、気に掛けた。天門坂標月に似たその少女に興味を持った。

だけど真意は。

こんな場所を訪れる理由が普通ならない。そんな理由から漠然と彼女を疑った。姉さんがいなくなっただけで気が可笑しくなっていたのだろう。手当たり次第を疑う疑心暗鬼。目に映る何もかもが怪しく見えた。

悪いことに、その疑いはあの昼休みで加速したのだ。そして確信に至ったのは、天門坂自身の告白。久刻十字から何もかもを奪い去った震災。回避出来るはずだった崩壊。その逃げ道を塞いだ、天門坂家の実験。恨みがないといえば、そんなのは嘘になる。

復讐。……天門坂一月への、復讐。

果たされなかった、救われたかった全ての人たちの願い。この街で消えた多くの願いを、根こそぎ摘み取ったその存在。終わりの月は旧都の仇。そうだ。もしも何も起きていなかったならば、誰も傷付かなかった。箱崎は死ななかったし、遙風も消えなくて済んでいたはずだ。

夜杜兄妹も、こんな異常者に成り果てる前に普通の人生を送れていた。誰かを殺すようなことをしなくて済んだ。誰もが幸福な日常が、そこにあつて、絶望の夜は訪れない。諸悪の根源。全ての、悲しみの始まり。

天門坂が、『箱庭プロジェクト』がなければ誰の人生も狂わなかったのに。

失われたモノが多すぎた。涙を流した人の数は、数え切れない。終わりの夜。破滅の月が煌く崩壊の日、生きたいと願った全ての犠牲者。——その懇願を笑いながら踏み潰した、家系。

生きたい、と誰かが泣いていた。

助けて、と誰かが求めている。

その声が始まり。復讐の鎖が繋がる杭。その杭がなければよかったのに——そうだ、天門坂がなければ。

大切な人を失わずに済んだ。箱崎も遙風も、姉さんも、誰も彼も死ぬこともなかったのに。

——出会うことも、なかったのに。

震える手で、それを掴んだ。黒い殺傷衝動はその僕を見て満足気に微笑む。

いいのか、これで。

これで、間違っていないのか。

僕は、焼けたコンクリートから背中を離す。受け取った凶器をしっかりと握り締めた。

これで最後。

全ての決着。

いいじゃないか。そうする為に、ここに来たんだろ。

なら迷うことはない。

手の中にある無情の重みを確かめる。

久刻十字はその感触を握り締め、

その切っ先を、

——夜杜枯に、振り上げた。

「断る。僕はあんたみたいにはならない。あの震災の結果で誰かを恨むのは間違ってる。天門坂を殺したからって、何も変わらない。あの夜はもう過去のことだし、失われたものは永遠に還らない。なら、復讐なんて意味を持たないんだ。……少なくとも、救われた僕が彼女を恨むのは間違ってる。自分一人が助けられた身で、それでも天門坂を恨むなんて出来ない。報われなかった全ての人達の為に——あの崩壊の責任を誰かに押し付けるなんて、してはいけねえんだ……！」

枯さんは、刃の刺さった自分の肩を興味なさそうに見ていた。

「久刻十字は今ここに在って、今の日々を貰った。——箱崎や遙風、標月姉さんと出逢えた『今』をくれたのが天門坂一月なら、僕は彼女に感謝だってる。そうだよ。確かにいつかの日々はなくなっただけけど、それでも僕は今が好きだから——そんな間違った復讐なんて、絶対にしない」

握った柄に力を籠めた。叫びの度に刀身を押し込んでいく。強く握りすぎて、掌には血が滲んでいるのか湿っていた。熱い血の滾り。枯さんの肩口から、背後に倒れている天門坂を見据える。聞こえているかは分からなかったが、病院で言えなかったことを口に出す。「僕は天門坂が好きだから、あいつを恨んだりしない。復讐がしたいなら、そんなのはあんた一人でやってろ。僕は前に進む、生き残った罪も何もかもを背負って、だからそんな間違った復讐なんて絶対に認めない……！」

久刻十字の啖呵を受けて、夜杜枯は動かなかった。感慨もなしに傷口を見下ろしたまま、無色の感情が瞳に濁っている。

やがて——冷たい手が僕の手首を締め上げた。慄いたのは万力染みた握力よりも、それをする枯さんの形相。表情こそは色を持たないそれでありながら、目だけは、刃物の鋭さを伴う殺意に煌いていた。天門坂に終始向けられていたその眼光が、今は僕に向いている。咄嗟にナイフを離してしまう。それが、合図になった。

「痛いよ、久刻くん」

当たり前前感想。

「分からないかな、刺されたら痛いんだよ。俺だって痛い。君さ、それくらい分かるだろ？」

蹴り付けられる傷口。完全に塞がっていないそこを踏み付け、捻られる。

「あ……ぐ………」

思ったよりも声が出ない。そんな激痛。痛覚神経を直接切り刻まれているような感覚だ。分かる。血が滲みながら熱を帯びていく傷口。噴き出す血潮は叫びの代償。痛みと相乗して天井を知らない激痛が全身を駆け巡る。

ぐちゃり。自分の体から聞こえた、思いたくないその音。枯さんが脚を離すと、それが蓋の役目をしていたのだろう、塞き止められていた鮮血が一気に溢れ出した。熱く、燃え上がるような激痛。

視界が霞む。意識が白む。

だがそれを許さない追撃。追い討ち。肩のその一点に絞られて、蹂躪は続く。

「痛いってば、ほら見ろよ、こんなに深く刺さってる。でも残念だなあ、ここじゃ死なないんだよ。心臓の位置は知ってるよな？　なら狙えよ。まさか殺したくないとか言わないよな？　そんな覚悟もない癖に人に痛い思いさせたんじゃないだろうなあ？　あー、痛い痛い痛い痛い痛い痛い。惜しいな、折同じ相手を見つけたと思っただのに」

傷口を鰐るのに飽きたのか、今度は逆の肩。腹、胸、頭、頬と、各部を丹念に蹴り上げられる。骨の碎ける音が聞こえた気がした。全身から、生きる力が抜けていく。傷口からは、何か零してはいけないものが出て行く気がする。

一秒ごとに確実に、あの夜と同じ状態に自分が戻っていく。

死を受け入れて生存を諦めた、あの時のように体が死んでいく。けれど、違うこともあった。

「残念だなあ、惜しいなあ——久刻くんを、殺さないといけないなんて」

——体は死を認めていても、心は、最後まで生きていたいと願いつづけていた。

顎の下から突き上げる、強烈な蹴り。部分的には上段だが、それを行う側には下段。威力は脳を貫いて意識を白濁させる凶悪無比。まだ生きてる自分が逆に不思議なくらいだ。

「いいや、もう。全部終わりにしよう。君の言う通り、俺は俺の復讐を果たすでしょう」

他人事のように自分の肩からナイフを抜き取って、ソレは破壊し尽くした僕に背を向ける。

夜杜枯の目標はこの瞬間、天門坂一月へと変更された。

「そこで見てなよ。君が好きだって言ったその娘が、ばらばらに引き裂かれるのをさ」

「……………め、ろ」

上手く話せない。口の中が切れていた。

夢遊病患者のようなふらつく足取りで、凶器を携えた殺人鬼は倒れ伏す少女に近づく。

ふらり、ふらり。満たされ過ぎた欲求の反動か、定まらない足取りが些細なことで躓いて転んでしまいそうに見える。動かない体。出せない声。目の前の虐殺を止める手段が僕にはない。足は動かない。だから手を伸ばす。傷が痛むことなど意に介さず。激痛の果てに意識を飛ばしそうになりながら、その痛みで自我を打ち鳴らしてここに繋ぎ止める。

伸ばした手。

だが、それは。

あの夜と同じで、直ぐ傍の月には届かない。

「……………どういう、つもりだ？」

だから、ソレが立ち止まったのは別の理由。他の要因に、それは脚を取られてしまったのだ。

そこで気がついた。目の焦点がっていない。白い靄が掛かっているように、目が霞んでいた。ほとんど盲目の状態。光がないのではなく、些細な光さえこの体には強過ぎて耐え切れない。網膜が焼かれている。……………見せる。そこで何が起きてる。僕にも、それを見せろ。

強く願うことで無理矢理に視界を回復させた。目を凝らすことであらゆる体の部位が痛みを訴える。意識を叱咤して、僕は見た。

「未美好、そこをどけ」

黒い殺人鬼の前に、両手を広げて立ち塞がる小さな少女の姿を。

「どけてば、未美好」

「嫌……………です、兄さま」

「俺の言うことが聞けないのか？ ……早く、どいてくれ。邪魔しないでくれ、未美好」

「や……………嫌です。もう、止めてくださいカラス兄さま」

舌打ちが聞こえて、未美好ちゃんの矮躯が撥ね飛ばされる。悲痛な叫び。今日、誰よりもか弱くそして悲痛を感じさせるその少女の声。僕は目を疑っていた。あの、夜杜枯が、それだけはしれないと思っていたのに。未美好ちゃんを足蹴にするなど、信じられなかった。それだけで動かなくなる矮躯。未美好ちゃんの体格では一撃で動けなくなるのが必然だ。だというのに、彼女は、這いながら全身を引き摺って兄に迫る。今正に自分を蹴り飛ばした爪先に縋り付くように、脚を全身で抱擁して封じる。

あまりに、弱過ぎる拘束。黒い殺戮が躊躇なく、未美好ちゃんを振り落とした。

「お願いします……カラス兄さま……。もう、やめて……！ やめてよ——お兄ちゃん！」

何度も振り払われ、何度も脚にしがみ付く。

涙を流す懇願を見下ろす内、遂に枯さんの感情が爆発した。

子猫を持ち上げるようにして、その首根っこを掴んでひょいと持ち上げる。

「なにが気に入らないんだよ未美好！ 俺は、お前は、この女の所為でこんなにされたんだろ！ 俺もお前も他の誰も彼も、傷付かずに済んだんだ！ 悲しまずに済んだ。そうすれば、俺は、俺達は——人並みに、生きられたのに……！」

「だめっ、だめだよお……お兄ちゃん。未美好のことならどんなに苛めてもいいから、痛いのが、我慢するから！ だからもう、十字お兄ちゃんを苛めないでよ……！ そのお姉ちゃんも、やめてあげて……お願い……お願いします！」

「なんでだよ未美好！ お前だって泣いてたろ！ こんなのは嫌だって泣いてたじゃないか！ 何で分かってくれない！ 俺はお前の為に、何人も人を殺してきた！ 虐げるだけでなく、殺してきたんだ！ お前の為だぞ！？ なあ、そこまでした俺をなんで止めるんだよ。もう最後の仕上げなんだ！ これで、全部終わりに——」

「——だって、お兄ちゃんが悲しそうだから……！」

いつもの礼儀正しさをかなぐり捨てて、普通の童女がそこで手足をばたつかせていた。駄々を捏ねるように泣いている。泣き叫んで、涙を流していた。——その涙の原因が兄にあつて、その兄を哀れんで。自分の境遇を喘ぐのではなく、体の痛みを訴えるのではなく。ただその兄が悲しいから、泣いていた。

「お兄ちゃん……いつもミニズクを叩くときは辛そうだから。無理して笑ってたから。今だって、ずっと苦しそうにしてるよ。……もう嫌だよ、お兄ちゃん。やめようよ、こんなこと」

懇願する。

涙の雫が、血のついた兄の頬を洗い流すように滑っていく。

枯さんは、夜杜枯は――夜杜未美好の兄は、

「ははは」

乾いた笑いを、零していた。

未美好ちゃんを下ろす。尚も続く哄笑。止まらない笑いに額を押さえて天を仰ぐ。

[illegible]

そうか！　俺が悲しそうか！　そんな俺を見ているのが辛い、悲しいか、未美好！　お前を毎日苛めてきたのは俺だぞ！　そんな俺を、俺を――」

その続きを、彼は声に出来なかった。

嗚咽が、それを邪魔したから。

「優しいな、未美好。本当に、いい子だ」

頭を撫でる、震える大きな手。泣きじゃくる子供をあやすような優しい声。

……そういえば、未美好ちゃんは言っていた。

「なあ、未美好。俺なんか……お前の兄で、家族でよかったのか……？」

——カラス兄さまはとても、可哀想な人ですから。

満面に、濡れた笑顔と赤い頬で頷くその少女。

「ミミズクは、お兄ちゃんが大好きです。ずっと、ずっと」

——だから、ミミズクが傍にいます。

——カラス兄さまの傍には、ミミズクがいないといけないんです。それを言った彼女の顔はどうだった。忘れるわけがない。

無邪気に無垢に純粹に、幸せに綻んだ晴れやかな笑顔で、兄を語る時の夜杜未美好は笑っていた。

——ミミズクの兄さまは——

「夜杜未美好のお兄ちゃんは、枯お兄ちゃんだけです」

いつものように笑って。いつかとよく似た台詞を口にする。

枯さんが膝を屈した。立っていられなくなったように崩れて、その姿勢で妹をきつく抱きしめる。……少しだけ、その心境が分かった。抱きしめた理由は、少なくとも。兄としてはやはり、泣いている顔を見せなくなかったのだろう。

「……………ありがとう未美好。ありがとう、本当に。それで——お終いだ」

華奢な肩を掴んで、言い聞かせるような形で未美好ちゃんに言う。「いっぱい傷つけて、ごめんな。終わりだ。——もう我慢しなくていい。俺を、食べていいよ」

驚愕は誰のものだったか、未美好ちゃんは一度だけ悲しそうに目を見開いて、けれど直ぐに兄の意思を汲み取った。終わらせる。彼らが彼らである限り、その呪いは消えない。自らが衝動であるから、抗えない。ならば、何を持って終わりにするのか。

決まっている。

現象そのものを、殺せばいい。

未美好ちゃんと手を繋いで、枯さんが迷路の奥に去っていく。夜杜兄妹は闇に溶けかけるほどの距離を歩いてからふと思ひ出したみたいに立ち止まると、枯さんはその視線を僕へと向けた。さよならを言い忘れた、そんな程度の軽い雰囲気。

「最後にさ、伝えとかなきゃいけないことがあるんだよ。そっちの、天門坂一月も。多分聞こえてると思うけどね、聞こえてなかったら

君から言ってやってくれ」

前置きは、それだけ。

「俺は天門坂を恨んでる。だけど復讐は止めだ。久刻くんの言う通り、意味がない」

それと、と、付け加えられたのは——天門坂標月の最期だった。

「天門坂……久刻標月の遺言だ。彼女、自分の死に際だつてのに、弟の心配してたんだよ。『ありがとう、いっしょにいてくれて』だとき。君さ、本当に愛されてたんだよ。それからもう一つ教えてくれたよ。彼女、よくこの辺をうろついてたんだけど、その理由を訊いたら」

天門坂に向けて、初めて彼が見せた、それは優しさのある微笑。

「妹を捜してるんだとき。七年間ずっと。ここのなら、再会できると信じてたらしいよ」

*

何もかもが終わったその空間は、恐ろしいほど閑静で物寂しく、余韻というには虚し過ぎる静寂だけが残された。ここでさっきまで起こっていたことが現実なのだと、信じられなくらいに。あれは白昼夢でしかなかったと、赤い瓦礫を見てもまだ思えるほど。ここは、終わっていた。

「じ——ほ……っ」

不意に吐血してしまう。内臓が破損しているのかもしれない。それを感覚で測れるほど、僕はフィクションの存在ではないので真偽は不明であるが。だが自分が今瀕死の状態にあることはノンフィクションの存在でも容易に理解出来た。

好き放題蹴られ、殴られた体の節々もそうだが、何よりこじ開けられた切り傷が尋常じゃなく痛い。

放っておいたらそこから熱で全身が溶けてしまふんじゃないかと、そんな風に思う。痛くて、熱いのだ。この熱が冷え始めた頃、本格的に人間は死ぬのかと思うと、今はその熱が愛しい。どうやら久刻十字はまだ、死にたくないと思っっているらしかったから。

満身創痍の体に激励して、無理矢理に立ち上がろうとする。瞬間、迸る激痛。意識を拐う常軌を逸した痛みが脚を蹂躪した。雷に打たれたようだ、と体験したこともないそれを比喻にして倒れる。起き上がる気力も体力も、既がない。という以前に、脚が使い物にならない状態なのだと思ひ出した。

だったらと、這う姿勢のまま肘で体を引き摺った。匍匐前進なら脚に負担は掛からない。だがやはり、今の状態では何をやっても駄目らしい。そもそも、これでは確かに脚に負担はないがそれ以上に重傷を負った肩に負荷が掛かり過ぎる。腕を突き出す度、肘を下ろす毎に、体が前に進むに連れて意識は一步步づつ闇に近付いていく。途切れそうになるのを繋ぎ止めるのに必死だった。次の瞬間には、もう指一本動かせなくなるかもしれない。漠然とした不安が悪魔のイメージになって付き纏う、嘲笑ものの自殺行為。

そうしてでもやはり、それを止めることは出来なかった。今の久刻十字に取って、止まることは死ぬことと同義。この前進を諦めれば――目指す先に横たわる少女が二度と笑ってくれない気がして。それだけは、死んでも嫌だった。

「天門坂……天門、坂……！」

手を伸ばす。今の自分の中にはそれしか残っていないことを自覚した。

天門坂一月。

終わりの月と呼ばれた少女が、本音で言ったのだから。ここにいたい、と。同じ場所にいたいと言ってくれたことが嬉しかった。偽りなく、彼女の持つ弱さを見せてくれたことが本当に。泣きたくなるくらい。嬉しかったから。

「天門坂……君を、一人になんて、しない」

謔言のように口にする度込み上げる血の味。嘔吐するみたいに吐き出すのを避けようとして、溜まったそれが呼吸の邪魔をする。息が詰まる。一度だけ吐き出して、大きく息を吸った。

「なんで……そこまでするのよ、十字」

仰向けに倒れた天門坂が、消えそうな声でそんなことを聞いてくる。と、突然咳き込んでしまう。……どうやらお互いに言葉を紡ぐというのは自殺行為らしい。肺が酸素の吸引を拒絶している。これ以上は働けない、と痛みは人体のストライキ。もう休ませると訴える声。

だが生憎と聞く気にはなれなかった。体は迫る死を受け入れていても、心はどうあっても認めていない。まだここにいたいと言っている。まだ生きていたいのだと、生命を削りながら打ち鳴らす鼓動が叫ぶ。

傷だらけにされた天門坂の腕を首に掛ける。酷く歪で、意味がないように見えるが、お互いに死に損ないでおまけに脚が機能しないと来ている。ならこんな形でも無意味ではないはずだ。これならまだ、天門坂に比べて傷の浅い僕が彼女を運ぶことが出来る。

「……なにやってんのよ、アンタ。いいから離しなさい……！わたしのことなんて、いいから。アンタだけなら、新都に行けるでしょ。そうすれば、助けも呼べるじゃない……！」

どこにそんな元気を隠し持っていたのやら、天門坂が威勢よく怒鳴る。……なるほど、意識だけは腐っても天門坂らしい。暴れて抵抗することも出来ないくせに声だけを張り上げて、まだ文句を言うてくるほどの気力が残っていた。もしかしたらこいつ、僕より動けるんじゃないのか本当は。

「お願いだから……アンタには生きてて欲しいのに。嫌だよ……わたしの所為で誰かが死ぬなんて。わたしは、この街の人達を殺した責任があるから……！もういいのよ……助かりたいなんて、思っていないわけないのに……」

「……うるさい。少し、黙ってる」

叫ばれるとそれだけで耳が千切れるような錯覚を覚える。聴覚と痛覚が連動していた。聴覚だけではなく他の全ての感覚が痛覚を呼び起こすスイッチになっている。前に進むほど、代償に消えていくのは久刻十字が生きるために必要な何か。続ければ待っているのは終わりだ。分かっているけれど、止まらない。

「離してよ……十字。わたしは、貴方に死んで欲しくないのよ……。貴方はわたしに、生きていたって思わせてくれたから——人並みに、扱って……くれたから」

「だったら……尚更放つとけないだろ。僕の所為で生きたいって思っただったら、僕がそれを叶えるのが筋だ」

「違うよ。もういいってば、そんなこと……。それだけで十分だったから、わたしは。そんな願い、本当は許されないから。——この場所で、幾つものそんな願いを殺したのはわたしだから……！」

「……うるせえよ」

感覚も消えてきた。指先が地面に触れても、もう何も感じない。なのに厄介なのは一つだけ残留するこの痛覚だった。他の余計なものなくなつて、一層好き勝手暴れ回ってくれる。いい加減、厳しくなつてきたかもしれない。

折れそうな心を叱咤激励、天門坂への言葉は久刻十字を繋ぎ止める為の代償行為。

「……いいんだよ、そんなのは。願っていいんだ、お前も。それに僕だって……天門坂に生きていて欲しいんだよ。だから、いっしょに帰ろう。終ったんだから、全部。日常に帰ろう」

こんな場所にはもういられない。ここは一切合切の終わった街。こんなところにいるは何も変わらないし始まらない。だから帰るんだ。この外にあるくだらな不幸せな日々へと。いつか天門坂標月という始まりの月が久刻十字にくれた、日常という幸福に。

喉を震わせて、天門坂。都合のいい捉え方をするなら、その声は泣き声で、それも歓喜の涙を流す嗚咽だった。

「わたしは……人殺しなのに……それでも、生きていていいのかな

……？」

「お前は誰も殺していない」

「……いつか、耐えきれなくなる。この街の壊した責任に、きつとわたしは耐えられないよ」

「なら僕がいつしよに背負ってやる。お前が辛いなら、同じ苦しみを受け持つてやる」

「わたし、は……わたしは……」

落ちていく綺麗な雫。それを指で拭ってやることは出来ないが、地に落ちたそれを見送ることは出来た。耳元で最後の言葉を繰り返している天門坂は、本当に、どんな時よりも弱いのに、どんな時よりも生きていた。実際に背負ってみて分かるその軽さ。強がってばかりの彼女は何を言ってもやはり、一人の少女でしかない。

「わたしは、貴方が憎い。殺したいくらい、恨んでる」

「言っただろ。構わない。君の好きにすればいい」

天門坂にはその権利があるし、久刻十字にはそうされる責任がある。だから――

「――だから傍にいます。君に生かして貰った命だから、死ぬ時は君に殺されないと勝手には死ねないんだ。そうなる一瞬、その直前で隣で同じ罪を背負う。君が思い返して悲しむ罪を、少しでも肩代わりする。約束だ――何があっても、僕は君を一人にしない」

何度も何度も、肩越しに頷いてくれる感触を感じる。痛みは忘れていない。どんなに微々たる衝撃も意識を焼き払う激痛になり得るが今だけは、それさえ尊い。ここに天門坂がいて、生きている証がそれだったから。

「勘違い……しないでよね」

声が普段の気丈さを取り戻していく。虚勢だなんて分かっていたけれど彼女が彼女らしくあれるのならば、それも悪くないと思う。

「アンタのことが心配なんじゃ、ないんだから」

いつか聞いたその前置き。

違っていたのはその先で、

「十字を殺すのはわたしだから、死なれたら困るのよ。……だから死なないで。いつか気紛れにわたしが、アンタに復讐したくなつた時——それが出来るように、生きて、傍にいて約束して」

久刻十字はきつと、その日交わした誓いを生涯忘れることはない。世界は決して永遠ではないけれど、願わくばこの約束が果てまで続きますように。終わりの月が世界を照らす、その最後の瞬間までずっと、大切にしていよう。

守り続けると、心に決めた。

天門坂と交わした——その約束を。

／エピソード

／

その日空は透き通るように青くて、遙風に遅れることおよそ二週間後に晴れて退院を果たした久刻十字が初めに訪れたのは自宅ではなく旧都の災害跡地だった。瓦礫の上に寝転がる。冬の冷え込みが浸透するコンクリートは、氷みたいに冷たかった。風邪引きそう。

後日談として語ることがあるのなら、まずは一つ目、遙風輪廻についてである。

中学時代に数多くの偉業を成し遂げた時代のトップランナーはなんと、二年半と少しの時間を経て陸上競技界への復帰を決意したらしい。今からなら三年最後の大会に出れないこともないそうなので、タイミング的にはギリギリセーフ——と言いたいところだが、現実にはそんなに甘くないのだ。

遙風的には大会へのエントリーが可能な時期として、期間的に間に合ったといえそうなのだが、その他で間に合わなかった人物がいる。そいつは速さに取り憑かれ、遙風輪廻に憧れたある少女で、残念なことに今度は少しばかり早過ぎた。もう少し、もう少しだけここにいられば、彼女も遙風と共にトラックを駆けていたかもしれないというのに。

「箱崎……パズルさんですか？ ええ、はい。知っていますよ、陸上部のエースランナーですよ」

僕を見舞いに来た遙風は、自身の陸上復帰を宣言した後でそう言った。ちなみにそれに至るまで様々な罵詈雑言にて僕の所業を非難したりしてくれたのだが、それは慎んで割愛させてもらう。いつもの一風景と同じ。それは久刻十字と遙風輪廻の変わり映えしない日々の再現とだけ言っておく。

「残念ですね、彼女は良い選手でしたのに」

「なんだ、やっぱり陸上部のことは気にしてたんだな」

「……？ いえ、私は高校の陸上部には出来るだけ近寄らないようにしていたので、活動を拝見する機会はありませんでした。彼女とは一度、中学の大会で走ったことがあるんですよ」

「……へえ、そうなんだ。あいつさ、なんつつか、やっぱり凄かったのか？」

「ええ。私の後ろについてこれたのは彼女だけです。……ただ」

「ただ？」

「他の競技にも参加する予定だったようですが、体調を崩してしまつたらしく全て欠場してしまつたんです。惜しいですね、私がいなければ結果は確実に出ていたはずなのですが。……と、どうしました久刻くん？」

「……いや、なんでも」

恋は人を狂わせるというが、箱崎は相当の重症だつたらしい。ともあれ、遙風の中にその存在があつたことに僕は安堵する。何一つ報われないまま死んでいった訳ではないのだと、後輩の瞞に持つていく話が出来たのが嬉しかった。——よかったな、箱崎後輩。

丁寧にも僕が欠席している間の授業をノートに纏めてくれていた遙風は、副教科も含め全ての科目別に色分けされたノートをサイドデスクに重ねていた。適当に一冊開いてみる。……うわあ。これ、板書だけに留まらず要点の纏めとか、遙風先生直筆のアドバイスなんかも書かれてる。これは凄い。だって、僕でも授業が分かるもんしかし、保健体育を詳しく筆記されているのはどうなんだろう遙風さん。

「……あ、ありがとう遙風。多謝するよ」

「いえ、この程度授業の片手間ですから」

「そうかい……もうあれだよ、お前には頭が上がないよ」

今度また、購買の甘い物を奢ってやろうと思う。ただし、人込みに入る際、僕は傍観に徹するが。とはいえ、遙風と手を繋ぐのは全

身を疲労させるだけの価値があるのかもしれない。などと不純な葛藤をしていると、

「私のことはいいんです。ただ、一つだけお願いをしてもいいですか？」

「なんなりと。僕は君の肉奴隷だ」

「いえ、そんな卑猥な奴隷は要りません」

卑猥じゃない奴隷は欲しいのか？

「約束してください、久刻くん。遙風輪廻にいた、遙風輪廻のことを」

遙風輪廻は二つで一つ。一人で二つの遙かな世界を廻る風。またいつか、同じ場所に帰って来る、輪廻のような風。忘れるはずがない。少年のように笑った彼を。同じ場所で同じ空を見上げた大切な友人を。

二人を分かť確かな隔たり。彼女は彼を他人のように語る。これからは、自分が遙風輪廻なのだ。自らを犠牲にしてその夢を守り抜いた彼の分も背負い、前に進むという確固とした自我を主張する彼女。

答える言葉は要らなかった。多くを語らずとも伝わる心がある。

この時、僕と遙風の思いはきつと同じだっただろう。だから何も言わない。言う必要がない。形にすれば消えてしまうものもあるのだから。視線に籠める意思。静かになった病室。遙風が先に目を逸らした。

「私も、彼のことは忘れません。いつまでも、それを過去の……終わったことにしたくはないので――」

部屋の天井の、角を眺めている横顔。目の錯覚か、少しだけ頬が赤くなったように見えた。

「――十字。……これからは、そう呼ばせてもらいます」

これはこれはまた。

からかい様が増えたぞ、このご主人様。

とまあそんなことがあったわけで、遙風と僕との関係が深まった

とさ。めでたしめでたし。……あ、やばい。そういえば遙風に今日が退院だって伝えてなかった。

後日談その二。というかこれは今までのことと、これからのこと。世間を騒がせた連続失踪事件とそれに連結する女子高生連続殺傷事件。前者と後者に関連性があると知っていたのは実は僕と天門坂だけである。世の中も薄々感付いてはいるだろうが、それを口に出さないのが暗黙の了解による世の美德なのだ。失踪事件は都市伝説のまま、闇に葬られる。この先は世の中の知らぬ領域で、また僕の予想でしかないが、事件の隠蔽には少なからず天門坂家が関与しているのではないだろうか。

そして本題。後者の女子高生連続殺傷事件について。被害者には一人、男子高校生も含まれているのだが。トピックの話題性を求めるなら表記はそっちの方が人目を引く。箱崎外流、遙風輪廻、久刻十字、天門坂一月の四人が被害者として数えられる。内、死傷者は二人。重傷者が三人。合計人数に矛盾が出るのはこちらの都合だ。

結局犯人は夜杜兄妹だとする僕の証言は、その後の家宅捜査とか何だとかの結果一応信じられはしたのだが——事件後犯人の姿を見たものはおらず、詳しい動機や殺害方法については謎のまま。……僕が包み隠さず全てを語ってもよかったが、こちらも天門坂家の権力により揉み消されるのがオチだろう。

そうした様々な過程を経て今がある。追記しておく、あの事件から久刻十字は天門坂一月に会っていない。お互いに入院していたのだから当然とも言える。しかしそもそも、同じ病院に入院していたのかも怪しい。

かくして。

晴天の本日をもって、久刻十字は世間復帰を果たした。

情景は冒頭の通り。場所は全ての始まりにして、何もかもが終わった場所。

思うこともなく空の果てを眺める。綺麗な青色。雲は斑で、地平線はずっと遠い。彼方には過ぎ去ったこれまでが滲むように、見詰

めていることで回想をする気分になれた。

「いい天気だよな。本当、見事な退院日和」

呟いた言葉は風に乗り、

「退院するのに天気は関係ないでしょ。……ていうか、退院早々にをしてんのよアンタは」

それを、拾ってくれる誰かがそこにいた。

「よ、久し振り天門坂」

「久し振り、じゃないわよ。ちゃんと質問に答えなさい、ここで、何をしてたわけ？」

「こうして寝転がっているとさ、たまーにいいものが見えたりするんだよ」

「例えば？」

「パンツとか」

思いつ切り顔を踏み付けられた。止める、傷が開く。いやだがしかし、それでも言わせて貰おう。我が生涯に一片の悔いなし。痛みへの代償は貰い受けた。……鼻血が出るかもしれないのは、単純に血管の損傷が理由であって他意はない。

冗談はさておき、

「無事で何より。また会えて嬉しいよ天門坂」

「ふうん。わたしはそんなに嬉しくないけど。貴方こそ無事でよかったわ、久刻くん」

いつもの口調だ。僕の知っている天門坂一月がそこにいた。

「そいつはつまり、僕を心配してくれてたのか？」

「まさか」

天門坂が膝を曲げるのを見て、こちらも体を起こす。腹筋運動の要領を実行すると、まだ腹部には僅かな痛みを伴った。退院と言っても完治した訳ではない。特に肩の怪我に関しては残り一ヶ月は安静を要する。無理に扱えばまた出血してしまうそうだ。

だがまあ、そんなのも悪くないと思う。この傷だけは別だったから。これが残っている間は少なくともあの事件のこと——あの誓

いも忘れないだろう。痛みと共に思い出すのは悲しい記憶だけではないのだ。

「林檎、食べる？」

「サンキュ。……て、待て。何で林檎なんだよ」

「ちよつとね。知り合いのお見舞いに行ったら、そいつ、今日退院なんだつて。買っっちゃった物は仕方がないから、アンタに上げる」

「どうやら、天門坂は僕よりも早く退院していたらしい。それなら何も、こんな日に見舞いに来なくてももっと早くこればよかったのに。」

「バカ言わないでよね。わたしだって心の準備がいるんだから……その、どんな顔して会えばいいのか分からないじゃない」

「どんな顔でもいいんじゃないか。大事なのは誰が来るかだ」

「うつさい……バカ！」

なんだこいつ。

こんな顔も出来るんだ。照れてるみたいな赤い顔は遙風の専売特許だと思ってたけど、天門坂は天門坂で様になっていた。顔のいい奴はどんな表情も似合うらしい。本当に、何をするかではなく、誰がするかだよな。

「あの実験のことだけど」

真っ赤な林檎をそのまま手渡しされた僕は、それをどうするか迷ってとりあえず弄んでいた。ワールドにかぶり付くべきか、いやいやそれは久刻十字のキャラじゃない。そんな葛藤を繰り返していると、不意に天門坂が言った。

あの計画という言葉が何を表すのかなど、訊く必要もない。

「七年前で全部が終わったのかは、わたしにも分からないのよ。天門坂は完成したサンプルはただのデータとしてしか見てないから、家の中でのわたしの扱いは基本的に放任。実験のその後についても、だから何も知らない」

訊けば、天門坂は屋敷を出てそれなりになるそうだ。仕送りを貰って生活をしているそうで、月に一度の生存報告を義務付けられて

いる以外は互いに無干渉だと本人は語る。あくまで、天門坂家に取って天門坂一月は終わりの月という研究成果でしかないらしい。

「だけど確かに言えることは、あの実験が奪ったものは何をしても補えないってこと。誰かの悲しみを、苦しみを、絶望に償うことは出来ない」

風に流れる髪を絆創膏を貼った指で押さえながら、最後に強い口調をして天門坂は言った。

「だからわたしは止まらないで生きていく。終わりの月が終焉を迎えるまで、振り返らないことが天門坂一月に出来ることだと思っから。……それと、アンタには謝らないわよ。助かったんだから、構わないでしょ」

「いいよ、別に」

どころか殺したいほど恨まれているくらいだから、今更そんなことなんてどうでもいい。

それを理解した上で、やっぱり久刻十字は天門坂一月のことが好きだと思えるから。胸を張って彼女の隣に立っていよう。失われた全てが悲しくないと言えば嘘になる。強がっていてもやはり、空白は虚しく別れは悲しい。それでも目一杯虚勢を張って生きていこうと思う。天門坂の言う通り、立ち止まらないことで報われなかった全てに答えられる気がするから。ここにいる自分は、大丈夫なんだと。

いつかその強がりの果てに、辿り着く彼方があるのならその時が終わりだ。

みつともなくしがみついていた、この命を彼女に差し出そう。

だからそれまでは、当てのない歩みを止めないように前を向いていたい。走り続けた先にはきっと、答えがあると思うから。

自分がここににいる意味に、出会える日があるはずと信じている。

それは誰かの代わりではなく、誰かに与えられるものではなく――

「なあ、天門坂」

「なによ」

「ありがとう、ここにいてくれて」

「はあ？ 急にどうしたのよ、バカなのもしかして」

「……なんでもねえよ」

生涯を経て為し得るもの——ただ一つの、自らに与える価値。

そして最後の瞬間、世界の果てで僕は終わりの月に答える。胸を張って確かな回答として。

——この世界は貴方にとって幸せ？

その問いにはつきりと、答えたいと思っている。

十

“ごめんね、私はキミを妹の代わりにするよ”

抱き締められた記憶。

一人だけが救われた夜。

本当の意味で言うなら——久刻十字はその日、死んでしまった。

だから今ここにいるのは、彼女の夢。天門坂標月が生きていて欲しいと願った、人並みに平穏に暮らして欲しいと祈った妹の——

その叶えられなかった望みの結晶。祈りの代用品でしかないのだ。そうして思った。この命の意味は、きっと彼女への贖罪の為に残されているのだと。

悲しくもそれを、僕は認めた。

認めた、はずだったのに。

“ありがとう……ここにいてくれて。わたしに、生きる意味をくれて”

絶望しかないこの場所で、始まりの月は微かに輝く。夜を照らす、生きていたいと願う心を導く眩い光。その涙を忘れていた。

“……妹を救えなかった、その代わりになるけれど。キミはキミとして生きていて”

有り体に言えばこの世界は終わっていた。

四方を照らす紅蓮の灯火。

夜空に昇る黒い狼煙と誰かの叫び。

夢の終わりと少年の始まり。その、凄惨な邂逅の夜、何もかもが
終結した最果ての世界の中。

終わりの月の満ちる夜に――

“キミの明日に続く道は、私が照らすから”

――僕は彼女に出逢った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1125k/>

終わりの月の満ちる夜

2010年10月8日14時12分発行